

---

# 蒼天のシンフォニア

アルノー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼天のシンフォニア

### 【Nコード】

N9967L

### 【作者名】

アルノー

### 【あらすじ】

『遺跡災害』。そう呼ばれる災害が頻繁に起こる『異世界』シンフォニア。

その災害に、古の遺産によって世界そのものを書き換えながら立ち向かう者たちがいた。

その名を『魔術士』という。

そんな『魔術士』の一人レーゼ・クライスはある日、遺跡内部にて水晶に封印された少女と出会った。

その瞬間から、彼は世界をも巻き込む争いへと足を踏み入れていく。

戦いの果てで得るのは真実か、それとも虚実か。時を超え、魂さえも超え、全てを知るための物語が今、始まる。

序 章：神焉の世界 - The End of the World -

個人HPで連載していたものの改正版です。以前よりも楽しめるものに仕上げたので、皆さん楽しんで読んでいってください。

## 序 章：神焉の世界 - The End of the World -

かつて世界は1度亡んだ。その傲慢さゆえに。

用

古文書『全理ノ解』の序章一節目より引

序章：神焉の世界 - The End of the World -

夜の闇が虚空を覆い、満月が妖しく輝くその下に紅蓮に彩られた世界があつた。

それを成すのは紅蓮の灼熱に包まれて崩れ落ちていく街だ。

長大にして巨大。恐らく、どんなに空高く昇つても全景を見ることはできないような、そんな大都市が赤く縁取られ無限に燃えていた。

だが、その中でも比較的まとまな外見を保っている建物が中心部に存在している。

それは白亜の壁とそれを守り囲うような外壁でかたどられ、東西南北に尖塔が均等に外壁の角を担っていた。

まるでこの都市と一体になることにより、ひとつの芸術品となるように設置されたそれらの周りと内部はしかし、悲鳴と怒号で溢れ

ていた。

熱気と死臭漂う城の中庭や回廊など、ありとあらゆる場所には褐色肌の男たちと銀の鎧を着た男たちが対峙し、己の得物を振るい合っているのだ。

直接肌の上から鉄の鎧をまとった一人の褐色肌の男が筋肉を膨らませて手にした大斧を振り下ろす。

対する騎士らしき甲冑に身を包んだ男は豪華な装飾が施された長剣を掲げて防ごうとした。

だが。

「おおおおお！！」

雄叫びと共に長剣ごと肩から切り裂かれ、血と肉片が飛び散り、紅の絨毯をさらに赤く染めた。

周りの騎士たちも徐々に押され、ついには槍や長剣の凶刃に掛かり、赤黒く染まった絨毯の上に倒れ伏した。

そして彼らは回廊を渡り、次の騎士たちが待ち構える部屋へとないだれ込んでいく。

その頃の都市内のあちこちらでは、熱に炙られた金属の銅像が限界温度を超過した事によって溶け落ち、烈火に抱擁された木材建造物は黒炭となり、自重に耐え切れず火の粉を吹いて倒れ込んでいた。

その中を、いくつもの人影が走り抜けていく。

追われるもの。そういった表現が適切だろうか。白い肌を持ち、

高級な素材で織られた長衣ローブを着たこの街の住民たちが、赤く染まった街中を駆けていった。

逃げ惑う羊のように、それぞれの顔に恐怖をこびりつかせて彼らはただ走り続ける。

そこに、炎の壁を突き抜けて褐色肌を持つ男たちが彼らの行く道の前に飛び込んできた。

燐光を放つ長剣を持つ者、あらゆる部分に刃が生えた長槍を持つ者、三角状の黒光りする三連装の銃身がある長銃を肩に背負う者など、彼らは総じて奇異な武器を手にし、白肌の人々の前に立ち塞がる。

たちまち住民たちは大混乱に陥り、意味を成さない叫び声を上げて散り散りになった。

だが男たちはそれを許さない。初めから決めていたかのように頷きあい、別々の方向へと彼らは走り出したのだ。

燐光を放つ長剣を持った男が逃げていく女性の一人に早速追いつき、その長髪を無理やり掴んで引き寄せる。

「嫌あ！」

女性が叫び声を上げる。だが男は眉一つ動かさずに、その背に向けて刃を突き刺した。

同時にそれを横へ薙ぎ払い、胴を寸断する。

ブシャッ！ と、水が地面の上をはねる音が響き、血と臓物を飛

び散らせながら石畳で整備された地面を赤黒く染めた。

各所に散った男たちも同様に、次々と切り裂き、撃ち穿ち、物言わぬ死体へと変えていく。

そして彼らはそれらを終わると無言で頷きあい、再び駆け出した。次に狙う獲物を求めて。

絶望と恐慌、殺人の快楽と『狩り』の愉悦。

負の感情の全てが渦巻く紅と熱の世界が、そこにあった。

城から見て西にある尖塔の最上階。その中から、燃え盛る都市を悠然と眺める青年が一人いた

肌色は白というより蒼白。長身で、引き締まった瘦躯の上にはラフなシャツとズボン。

そして研究者のような白衣を着ており、両側面に付いたポケットに青年は両手を突っ込み、遙か下の崩れた世界を見下ろしている。

鋭い茶の瞳には何の感情も浮かんでおらず、短く切った白髪は赤の色を反射して赤銅色と化していた。

彼もまた、『逃げる側』の人間だった。

だが青年はまったく慌てる様子もなく、ただ子供が興味を失った玩具を見るような目つきで遙か下の様子を見ている。



「……これが報いか。」

青年はかすれた声で呟くように、一人の想い人の名を呼んだ。かすかに表情を曇らせ、しかし次の瞬間には元の無表情へと戻っている。

彼が名を呼んだ彼女はもはやこの場にはいない。もう一人の恋敵であり親友である青年が、『来世への希望』のためにと連れて行ってしまった。

「来世、か。あいつらしい」

そう口にして、低く笑う。まるで喧嘩をした子供たちをいさめる母親のように困ったような、それでいて優しい笑みを浮かべ、ただ淡々と彼は忍び笑いを続けていた。

そして彼は思い出す。遙か昔の記憶を。

それは輝かしき日々だった。親友と、愛しい人と共に歩んできた最高の記憶。時には喧嘩をし、時には共に研究をし、時には晴れた空の下、三人で草原の中に寝転んだりもした。

結局愛しい人への恋は片想いに終わったが、これでよかったと青年は思う。

彼は目を細め、息を吐いてポケットから両手を引き出す。

その右手の人差し指には、紫色の宝玉がはめ込まれた指輪が差されていた。

眼前に広がる炎の世界が、揺らいだ気がした。

その時だ、尖塔の最上階から下へと通じる螺旋階段への鉄扉が勢いよく開いたのは。

轟音が響き、鉄扉が悲鳴のような軋み声を上げる。

その音を聞いて、青年は非常にゆったりとした動作で振り返った。

「『三柱将<sup>さんちゆうしやう</sup>』ガルディア・ザッハーク、君か」

「ほう、貴様がこんなところにいたとはな」

まるで獲物を見つけた肉食獣のように、褐色肌の男は灰色の目を細めた。

それは見上げんばかりの巨漢だった。

薄汚れた鉄の鎧を筋骨隆々の胴体にまとい、顔や手足を返り血でどす黒く染め、荒く息を付いている。

その右手に握られているのは柄尻同士が繋ぎ合わさった双剣だ。

男　ガルディアの身長二メートルを超えるそれは血と死臭がこびりついており、その臭いを受けて青年は細めていた目に力を込めた。

鋭く、全てを裂く刃。それを連想させる青年の眼光にガルディアは怯んだように後退りし、呻く。

「ぬっ……」

だがガルディアは胆力でそれを押し返すと双剣を両手で構え、ただ事実を告げるべく口を開いた。

「貴様もここまでだな。 『神の右腕』 ヘルベルト・フォン・カラヤン」

「どういう意味で『ここまで』ということかな？ 『三柱将』<sup>さんちゅうしょう</sup>にして『飢沼の戦幻』<sup>きしょうせんげん</sup>、ガルディア・ザッハーク」

まるで何かを確かめ合うように、互いの名前を呼び合う。

そこには親しみなどない。

ただ、殺意だけを込めた言葉のやり取りだ。

「分かるだろう、ヘルベルト・フォン・カラヤン。貴様の命だ」

「……君も『背信の聖者』や『龍の夢』と同じことを言うんだね。けど、僕の死に場所は僕が決める。悪いけどお引取り願おうか」

言葉と同時にパチン、と乾いた音が鳴り響いた。

刹那、凄まじい威圧感と共にヘルベルトと呼ばれた青年を中心として尖塔の床の上に奇妙な青の円形をした紋章が一瞬で現れる。

ありとあらゆる記号を組み合わせたような、意味を理解する事すらできない文字と線で形作られたその紋章は瞬く間に床を覆い、さらには帯状になって宙を舞い、壁や天井に張り付くようにそれを描いていく。

「それに……命、ね」

そして、ただ紅に染まった空を見上げ。

「ふざけたことを抜かすなよ、ガルディア・ザッハーク。僕は死なない。僕は死ねない。僕の罪が赦されぬ限り、僕は永遠に生き続ける。僕の魂は、永久にこの世界に囚われ続ける」

淡々とヘルベルトは言う。だがその表情は苦痛に満ちており、まるで罪の重さに震える咎人のようだ。

そしてそう言い切ると同時に、親指と中指を重ね合わせた。

不意打ちに近い『陣』の展開にガルディアはうろたえるように身じろぎし、しかし次の瞬間、戦士の顔となって武器を構えて叫ぶ。

「貴様、これはもしや！」

「『否定』の力だ。さて、愚かなガルディア君。君と僕はここで永久のお別れだよ」

先ほどの様子とは打って変わって、ヘルベルトは聖母のような笑みを浮かべた。

その顔を見たガルディアはさせないとばかりに双剣を振りかぶり、ヘルベルトへと踏み込む。

「おおおおッ！」

「その存在意義を否定され、一片たりとも残さず」

目の前に迫り来る『敵』に対してまったくの恐怖を抱かずに青年は宣告する。

声色に慈悲を施さず、殺意を込めず、感情を含まず　まさしく  
全てにおいて平等な神の如く。

「　世界に喰らい尽くされてしまえ」

そして、指を弾いた。

直後、生まれたのは酷く乾いた音と、風が吹き荒れる音。

その風は部屋中に満ち溢れ、あらゆる場所を撫でていく。  
ヘルベルトはそれに、風が竜のように鎌首をもたげて牙を剥いた  
かのような錯覚を覚えた。

紋章が一度だけ強く脈動する。その瞬間、最初の一撃がきた。

パキユツ！　と、乾いた音と共に、ガルディアの強靱な肉体ごと  
胸が穿たれたのだ。

「……は、ごあつ！」

円状の傷は強固な筋肉をえぐり取り、背骨を貫通し、そのまま背  
面へ抜ける。

その一撃によって喉の奥から沸きあがってきた熱い血をガルディ  
アは吐き出し、目を血走らせて咆哮を上げた。

「貴様、キサマアアアア！　この、小僧がア　　」

だがその叫びが契機となった。風が唸るような咆哮を上げ、次々に円の傷が男の体を穿っていく。

顔に、肩に、腕に、腿に、手の平に額に頬に眼球に脛脛に頭に鼻骨に腹に心臓に肺に背骨に脇腹に頭蓋骨に脳に股関節に胸骨に膝に足に。

次々と、次々と、次々と。風が吹き、穴を穿つ。

しかし、風の穿ちはそれだけでは終わらない。

ヘルベルトの隣、窓に近い壁に同様の穴が開いたのだ。

それに感染するかのように周囲の壁が穿たれ、じわじわと消失していく。

同時に天井にも穴が開き始め、数秒後、ついに何の音も立てずに尖塔の最上階の天井と壁が消滅した。

それはたった五秒の出来事。

まるでその存在が元々なかったかのように、そこには何もなかった。

外気に晒され、熱風がヘルベルトの顔を撫でていく。

眼前の光景　世界の終焉のような、地平線まで続く紅蓮の色に青年は再び目を細めた。

そして彼は両手を広げ、最後の言葉を告げる。

「さあ燃えろ。燃えて、消えてしまえ。傲慢と虚装に満ちた僕らの

『世界』よ。全ての終わりを、紡ぐために」

空は赤く照らされ、血の臭いと肉が焦げる臭いと木が焼ける臭いが世界の破滅を告げるように、青年の周りを包んでいた。

そしてその日、世界は滅んだ。

## 序 章：神焉の世界 - The End of the World -

導入部はあまり変わっていませんが、徐々に変わっていく予定です  
のでよろしく願います。



## 第一話：依頼

## 守護機兵と嫌な予感

清しいほどに晴れ渡った空は苦手だ、とレーゼ・クライスは内心でひとりごちた。

青い空の下、地平線すら見えるほど何の起伏も存在しない草原の上に立つ青髪の青年である。

刃のような雰囲気放つ鋭く細められた青の眼を前へと向け、黒の防刃シャツを覆うように纏った青外套は、ただ風を受けて揺れ動いていた。

「……青い空は、気が滅入るからな」

理由は分かんが、と付け足すように呟く彼の前方とその周囲には、全身をくすんだ鎧で身を固めたずんぐりむっくりな『人形』が三体、大剣を構えた状態で動きを止めている。

ただし、その身長は普通の人の1・5倍近くはあるが。

全長二m強はあろうかというそれらは、皮膚の変わりにごつごつとした鈍色の装甲を纏い、親指ほどの大きさの紅色をした宝玉を単眼として煌かせ、時折それに知的な光が奔っている。

「守護機兵の騎士型、か。よくも外に出てくるまで『狂った』ものだ。騎士の名が泣くだろうに」

そんな巨体に囲まれながらもレーゼは、まるで己の感情を押し隠すように淡々と呟いた。

その名の通り、守護機兵<sup>ゴレム</sup>は各地に存在する遺跡を護るための機械人形だ。血は魔力であり、肉は鋼と齒車であり、皮膚は並の武器では破壊できないほどに固い。

そんな守護機兵<sup>ゴレム</sup>たちの中に、時折思考の『狂った』ものが遺跡の外へと出てくる事がある。それをレーゼは排除しにきたのである。

彼の声に答えるかのように、目の前にいた一体の守護機兵<sup>ゴレム</sup>が豪腕を振り上げ、千年という長い年月の間で劣化しすぎた剣を青年に向かって振り下ろしてきた。

だが、迫る剛剣をレーゼは横へ飛びのくことで回避。勢い余った剣は地面に突き刺さり、粉塵を巻き上げる。

「なるほど、やはり『彩奏珠<sup>レヴィオス</sup>』は完全に壊れているらしい。となれば、やることは一つ」

冷静に眼前の守護機兵<sup>ゴレム</sup>の状態を確認すると、青塗りの柄に右を添え。

「排除する」

鞘から、剣を引き抜いた。

そして、そこからは一瞬だった。

地面深くまで突き刺さって抜けなくなった剣をどうにかして引き抜こうとしていた守護機兵<sup>ゴレム</sup>の懐へ、残像を残す勢いで踏み込み一閃。

それは右上から左下へと振り下ろす、ごく単純な切り裂く動作。

柄元の真ん中から切っ先にかけて深い溝が刻まれた白銀の刃が翻り、風を切り裂く音を立てる。

だが、ただそれだけで分厚い守護機兵<sup>ゴレム</sup>の装甲を、人間にとっての内臓とも呼べる内部機構ごと それこそ熱したナイフでバターを切るように斬り裂いた。

痛覚を持ち合わせていないはずだが、両断された守護機兵<sup>ゴレム</sup>が断末魔のような耳障りな金属音を上げる。

すると、その音に残りの二体が過剰反応を示した。  
まるで恐れを振り払うかのように、両方ともが大剣を振り上げ、左右からレーゼへと突っ込んできたのである。

だが。

「遅い」

極めて冷静な声と、地を蹴る音が響いたのは同時。

レーゼは迷うことなく『右側』の守護機兵<sup>ゴレム</sup>へと体を向け、迎撃するのではなく、そのまま向かっていったのである。

それは、そのままの位置で迎え撃つと確実に挟み撃ちにされると分かっていたがゆえの判断であった。

「ふっ！」

レーゼはすぐ目の前に迫った守護機兵<sup>ゴレム</sup>目掛け、裂帛の声と共に長剣を振るう。

キンッ！ と鋼鉄が裂かれる澄んだ音が蒼天に響いた。守護機<sup>ゴレ</sup>兵が横に両断されたからだ。

草原の上に、金属がまとめて落ちたような甲高い音が鳴る。そしてそれすらも無視して、残り一体の守護機兵<sup>ゴレム</sup>はレーゼの背後へと突き進んだ。

ガチャガチャと、ギチギチと、怒りとも悲しみとも取れる音を発しながら、鈍色<sup>にひいろ</sup>の装甲を鳴らし、涙を流すように紅色の宝玉を輝かせながら。

「　　ビバ！　一・撃・必・殺！」

刹那、空から声が響き　　爆音。

まるで地震のごとき凄まじい揺れが起こり、あまりの衝撃に地面が砕けて粉塵が宙を舞う。

だが、風がすぐにそれを押し流した。

そして見えてきた光景は　上から押し潰され完全に砕け散った機兵の上に、黒の外套と灰色の上下を身にまとい、頭部に深紅の鉢巻を身につけた青年が立っているというものだった。

「よおーう、レーゼ。油断は大敵だぜ？」

空から降ってきたその青年　アシュレイ・ツァイスはそう言いながら鉄塊と化した機兵から刃を引き抜き、立ち上がる。

彼が手にしている得物。それは槍だ。黒塗りの刃の中心部に灰色の宝玉が象眼されており、先端から石突まで二メートルほどある。

その姿を認めたレーゼは空を見上げ、まるで呆れたように口を開

く。

「『重力操作』で空から一撃か。相変わらず派手なことをするな、お前は」

「ま、それが俺の得意技だしな。ところで、お前を助けた俺様に対するお礼とかないのかにゃ？」

「さあ、むせび泣いてありがたがりやがれ！」と胸を張るアシュレイに、レーゼは面倒くさいといった様子で半眼を向けると、

「ふむ、メルヴィスを簀巻きにする権利をやるう」

「それはいつもやってることだと思っただが……」

「確かにそうだな。……さて、報告によると今ので最後らしいが」

さりげなく話題を逸らし、辺りを見渡した。

黒く焦げて鉄くずと化した機兵の姿が五つと、体の中心を砕かれて機能を停止している機兵の姿が五つ。計十体の機兵が草原の上に倒れている。

これら全てが十数分のうちにレーゼとアシュレイの手によって『排除』されたものだ。

どれもこれも思考回路たる『彩奏珠』<sup>レウイオス</sup>が完全に壊れているので、人々に害を及ぼすものばかりである。ゆえに、破壊したところで文句などは言われない。

「確か騎士型<sup>ナイト</sup>が五体と小人型<sup>ゴブリン</sup>が二体、んで魔術士型<sup>キャスター</sup>が三体だったっけか？」

『依頼内容』を思い出しながら、何か忘れているのかアシュレイは首を傾げた。

「……けどなーんか忘れているような」

「ふむ。奇遇だな、俺もだ」

大の大人が二人でうーんと唸りながら、改めて周囲を確認する。

すると地面の一部が不自然に盛り上がっていく風景が見えた。ぼこり、ぼこりと急速に隆起していくそれを目にしたレーゼとアシュレイの脳裏に浮かび上がったのは、グッとこちらにサムズアップしてニヒルな笑顔を浮かべている己の上司の顔だった。

「……ああ、思い出した。さっきの通信でメルヴィスから追加注文があつたはずだ」

「確か、巨人型タイラント一体が新たに確認されたとかだったっけ？」

アシュレイがそういった瞬間、2人の眼前で限界まで盛り上がっていた地面が　爆音と共に粉碎した。

その中から現れたのは見上げんばかりの巨体の機兵、通称『巨人型タイラント』。

全長は大体十メートルほどだろうか。全身をくすんだ青の鎧で覆われ、人と言う額の部分には茶の宝玉が埋め込まれており、頭部の頂点には地面を掘り進むためのドリルが装着されている。

そして両手にはやけに黒ずんだナックルガードが見えた。あれで多くの人間を肉塊へと変えたのだらう。

その姿を認めた瞬間、アシュレイはわめき立てた。

「あーっ！ これだからあいつの依頼を受けるのは嫌だったんだ！」

「つべこべ言うな、さっさと片付けるぞ」

そんな彼にレーゼは鼻を鳴らしながら長剣を構え、己の魔力をその刃に纏わせながら巨人型タイラントに向かって走り出した。

「分かってるよ、こなくそっ！ “神意は虚無へと移ろいゆく”」

やけくそ気味にアシュレイは叫び、槍を構えて巨人型タイラントを睨みつける。

そして 酸素の如く宙に存在する『界魔力』オドと己の体内に駆け巡る『魔力』マナを魔術の触媒たる灰色の宝玉 魔奏珠テリオスへと送り込み、世界の根源であり全ての魔術の源である『世界樹』へと続く『回線』を開いた。

開かれた回線から重力という名の『事象』コウを複製、本来の役割を改編。

僅かコンマ1秒の間にそれを済ませると、槍の刃に象嵌されている灰色の宝玉から帯が飛び出し、巨人型タイラントを囲む。

それを見た機兵は金属の擦れ合うような唸り声を上げ、右腕を振り上げた。

（術が発動する前に俺ごと押し潰す魂胆らしいが、そうは行かん！）

「バックアップは任せたぞ、アシュレイ！」

レーゼが思考を終えるのと叫びを放つは同時だった。

見上げんばかりの守護機兵の足元にたどり着くと、『魔力』<sup>マナ</sup>によって脚力を強化。鈍く輝くドリルが装着されている頭部めがけて跳んだ。

「んなこたあ分かってんだよ！　いくぜ！　“<sup>ザガン</sup>鍊帝の滅杖”！」

その瞬間、アシュレイが槍を振るう。

瞬間、鋼鉄を切り裂く甲高い音と、超重力の一撃が草原ごと機兵を飲み込んだ。

よく晴れ渡った空の下、太く歪な「く」の字をした大陸　リス  
トア大陸の中心部にその都市はある。

『魔奏都市』ダルムヘイツ。

総人口三〇〇万人を抱える大都市であり、『魔奏都市』と呼ばれる街。

昼も夜も明かりが絶えず、眠るということを知らないこの大都市には、一つの大きな特徴があった。



それは街の中心部に鎮座する、地上十五階・地下三階建ての巨大な漆黒の建造物。

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』、その本部だ。

『魔術士』。この世の森羅万象を操るものたちの総称である。ある者は虚空に炎を生み出し、ある者は空間そのものを支配し、またある者は運命さえも超越する。

だが、そんな夢物語を現実へと変えてしまう力は万人に与えられたものではなかった。

魔<sup>マ</sup>力。人の体に流れる『血』とは異なる、もう一つの『流れ』。

それを有しているものだけが、魔術士となれるのだ。

そこで本来ならば、それを有しているものとしていないもの、その間で蔑みや差別が生まれるはずだった。

だがそれが生まれるよりも早く、動いた者たちがいた。

『ヴァルハラ』の初代ギルドマスターたちだ。

彼らのすばい動きによってその悪しき流れは食い止められ、今のこの活気に満ちたダルムヘイツがその影が『ほぼ』ないことを物語っている。

そのヴァルハラの本部は、やはりと言うべきか周囲の建物と比べて破格の大きさと巨大さを誇っており、近くには所属魔術士専用の寮や保育所まで存在しているのだ。流石は世界最大の大きさを誇るギルドといったところだろうか。

そんなヴァルハラには、三人のギルドマスターが存在している。ここ『魔奏都市』ダルムヘイツと『医学都市』イザーク、そして『聖都』エル＝エデン。

それぞれが手のつけられないほどの個性的な性格を持っているが、その類まれなる統率力によってヴァルハラ管理者として魔術士たちの頂点に立っている。

そしてギルドマスターの一人である青年　メルヴィス・セルタレイは誰がどこからどう見ても性格が『変わっている』人間に分類されるものであった。

彼を知る者はすべからく口をそろえてこう言うだろう。

曰く、変人とはアレを指すのではないかと。

「くくく、約束の時は来たれり……」

ギルドから下された依頼　“近隣の村を繰り返し襲う壊れた機兵を超ゴリ押しで破壊せよ作戦”（メルヴィス命名）という名の仕事が終わわり、報告のために本部の最上階へ昇降機を使って行き、ギルドマスター専用の執務室へと足を踏み入れたレーゼとアシュレイを迎えたのは、怪しすぎる声を発しながらビーカーの中の怪しい紫色の液体をかき混ぜているメルヴィス・セルタレイ、その人だった。雪のように白い頭髮と悪戯小僧のような光を浮かべた茶の瞳を持つており、整った顔には今現在、怪しすぎる笑みが張り付いている。

それを見たレーゼはため息の後に淡々とした声で言った。

「アシュレイ。医者呼べ、医者」

「おう、任された」

その言葉に乗ったアシュレイは早速懐から小型の通信機を取り出し、知り合いの精神科医辺りへと連絡を取ろうとして。

「ごめん、調子に乗った僕が悪かったです。だからお医者さんだけは……お医者さんだけは勘弁して……！」

慌ててメルヴィスが止めに入る。するとアシュレイはつまらなさそうに舌打ちをし、通信機を懐に仕舞いなおした。

それに安心したのか白髪のギルドマスターは「ふう」とため息をつき、さも残念そうに呟いた。

「二人ともさ、もうちょつとこう……面白おかしい的確なツツコミとかさあ、期待してたんだけどね」

「そんな下らん願望はドブにでも捨ててしまえ」

そんなレーザーの斬って捨てるような言葉にシクシクと擬音を発しながら女座りで座り込んだメルヴィスを一瞥し、懐から報告書を取り出して執務用デスクの上に置く。

するといつの間に傷心から復活したのか、よろよとした足取りで執務用デスクに向かうとその報告書を手に取り、

「うーん……、面倒だからこれで認証ぶへえ！」

斜め読みさえせずに報告認証の印を押そうとするメルヴィスの頭部をレーザーは鞘つきの長剣で引つ叩いた。

こうまでしないと、彼の暴走は斜め四五度はおるか九〇度を超える勢いで爆進するためがゆえの突っ込みなのである。

無論、面倒なのでこうした方が手っ取り早い、と思っている部分もなくはない。

「むぐぐぐ」と頭を押さえながら呻き声を上げてデスクの下に沈んだ己の上司にレーゼはため息をついた。

「それじゃ、俺は帰るぞ」

「俺も。じゃあなメルヴィス」

レーゼは振り返らず、アシュレイは後ろ手に振ったまま執務室から出て行くこととするが。

「ふふふふ、ギルドマスターの僕をコケにするとは……。僕、怒ったよ……！」

地の底から響く声で、ゆつくりとメルヴィスはデスクの下から姿を現した。だが涙を目に溜めたその表情はどこからどう見ても怒っているように見えず、さらに言うならまったく怖くない。

彼の声に振り返り、その姿を見たレーゼはさも面倒くさそうに鼻を鳴らし言い返した。

「いや、あれはお前が悪い」

「右に同意」

そんな、あまりにも反省していない二人の様子にメルヴィスはあ

れえ？ と首をかしげ、

「おかしいなあ、ここらで僕の怒りパワーに恐れおののいたレーゼ君とアシュレイ君が五体投地して僕を敬ってくれるはずなんだけど……」

「……どうやらさっきので頭のネジが緩んだようだな。もう一撃加えるか」

「いや、ここは俺がやってやるぜ」

「ちよつと君たち！ 何で僕を殴る方向に走ってるのっ!？」

鞘つきの剣を肩で担いでいるレーゼとやる気満々の表情で腕まくりしたアシュレイに青年は叫ぶように突っ込んだ。

「……で、用があるんだろう？」

唐突にレーゼは鞘を鞘止めにパチリと収め、ため息と共に問う。  
するとメルヴィスは太陽のような笑みを浮かべて頷いた。

「さっすが僕の部下！ 僕の言いたいことをここぞとばかりに言い当ててくれるなんてね！」

「まったく、お前は……」

こめかみを人差し指と親指ではさみ、揉み解す。

この上司とはもう四年の付き合いだが、そのお陰か彼が言いたい事がその場の雰囲気や行動で分かってしまうのだ。正直言って、この破天荒さに慣れてしまった己が恨めしい。

そんなメルヴィスの様子にアシュレイもやっと事の次第が理解できたのか、険しい表情で凄む。

「んで、また『仕事』かよ？ 労働法違反で訴えるぞコラ」

「大丈夫、書類を書き換えれば問題ないから！」

「お前は一度地獄に落ちてこい」

呆れた表情でレーゼはそう言い捨てる。だがそんな一言にもめげずにメルヴィスは悠然と微笑み、机の上で指を交差させ、

「それじゃ、『仕事』のお話 始めようか？」

余裕を持った表情で、そう告げた。

『遺跡』。そう呼ばれるものがこの世界には数多く存在する。

聖王都市エル＝エデンの聖地の奥深くに封印されているという『始まりの遺跡』“エンド”や、製造ラインを破壊してもいつの間にか修復し、今でも守護機兵を製造し続ける『創造の遺跡』“パレード”など、各地に存在する遺跡を数えるとその数は三桁にも及ぶだろう。

それらは全て、世界統一思想を持つアルカーナ大陸帝国と、海を

挟んで存在するリストア大陸共和国が反発したことによって世界統一戦争が始まり、アルカーナ大陸の勝利として終戦した一年後、アルカーナ大陸帝国の指導の下に『世界統一政府』<sup>アスガルド</sup>が発足したその年の初めに、唐突に、そして『独りで』に出土し始めたのだ。

そう、『独りで』なのだ。

誰かが掘り出したわけでもなく、ただ『勝手』に地面を突き破り、遺跡内部へと続く『門』が現れ始めたのである。

なぜそんなものが勝手に地中から現れたのかは、未だにまったくといっていいほど説明されていない。

明確に分かっている事は三つ。

出土した遺跡はかつての古代文明の建造物であること。

そこを守護していた『守護機兵』<sup>ゴレム</sup>と呼ばれる人を模して作られたその思考はほぼ壊れていること。

そして 守護機兵<sup>ゴレム</sup>は遺跡内部から外に出では人に危害を加える、というものだけだ。

だが、それを世界中の人々が知ることになるまでは、かなりの時間がかかってしまった。

なぜなら、『出土』が始まった時、『世界統一政府』<sup>アスガルド</sup>は発足したで足並みがまったく揃わず、それに対応ができずに世界規模の混乱が巻き起こってしまったせいだ。

多くの人々が死んだ。巨大な守護機兵<sup>ゴレム</sup>に押しつぶされ、騎士の姿をした守護機兵<sup>ゴレム</sup>に斬り屠られ、短剣を装備した小さい守護機兵<sup>ゴレム</sup>に群がられ 無残な死が、世界に蔓延した。

これは後で分かったことなのだが、守護機兵<sup>ゴレム</sup>に対しては魔力を上乘せした攻撃でなければダメージが通らない、という事実もそれに拍車をかけていた。

だが、人はそのような過去の遺産に負けるほど柔ではなかった。

命知らずな者達が遺跡の中へ潜り、そこで得られたもの　主に  
『魔奏珠』<sup>テリオス</sup>という名の宝珠や魔術に関する書物、いわゆる魔道書だ  
を解析・改良することで、守護機兵を打ち倒すまでに至ったの  
である。

そして探索できるものたちが集い、次第にその集団は大きくなっ  
ていった。

それが、『ヴァルハラ』、遺跡探索・魔術士ギルドの始まりだ。

こうして九一年間、人は未だに現れ続ける遺跡や守護機兵の脅威  
『遺跡災害』に晒されながらも、ただひたすらに戦い続けてい  
る。

『　“アルバレスタ”って呼ばれている遺跡は知ってるかい？  
南西部のかなり辺境にある、最近出土した遺跡なんだけどさ』

見上げると首が痛くなるほどの高い天井と、大人が五人並んでも  
ずいぶんと余裕のある広さを持つ廊下をレーゼは一人で歩いていた。  
外壁に水に浸すと発光する鉱石が水の入った小さいケースの中に  
入れられて設置されているので、明かりには困らない。

ちなみに、一緒に来ていたアシュレイは早速入り口のトラップで



ある落とし穴に引っかけて床下に消えた。

きちんと地図を確認しないからこうなるのだ、とレーゼは呆れた様子でそう思う。

その際に『やっちまったああああ……！』などと叫んでいたが、心配しなくても恐らく生きているだろう。彼のしぶとさはギルド一なのだ。

『それで最近、そこにギルド<sup>ウチ</sup>の遺跡調査隊が入ったんだけどね。奥の方に予想以上の量の機兵がいて、結局調査は終わらずじまい』

メルヴィスに手渡された最奥部以外が記された地図を見るに、この遺跡は二層構造で作られているようだ。

先ほどアシュレイが引っかった落とし穴は一層目に通じるものらしい。

『そこで、君たちには最奥部の調査をして欲しいんだ。あ、マップピグと適度な機兵の撃破もお願いね？』

（だが、これは……）

改めてこの遺跡の全容を地図で確認し、レーゼはふむ、と顎に手を当てて思考する。

この遺跡は巨大すぎる、と。

通常、大陸の端　つまり中央から外れるに従って、遺跡の規模

は小さくなるはずなのだ。それは、九一年前に始まった遺跡が有する絶対の法則。

そう、そのはずであった。

なのにこの遺跡はその法則から外れている。それにあのギルドマスターが気づかない事があるはずがない。

ということは。

「何か厄介な事が起こりそうだな……」

それだけは確信を持って言える。

何せ、面倒ごとを察知する能力とそれを他者に押し付けることにおいて、上司メルヴィスの右に出るものはいないのだから。

『へローへロー、こちらアシュレイ。聞こえますかコノヤロー』

と、左耳だけに引っ掛けていた丸ごと覆うような大きさのイヤホンから聞き覚えのある声が響いた。これは電波を飛ばす旧式のものではなく、遺跡内部でも通信が出来るように魔術的な工夫がなされたものだ。

レーゼは懐に入れている小型通信機の返答用ボタンを押し、イヤホンの側部に収められているマイクをコードごと引っ張って口元に近づけると、口を開く。

「聞こえている。というより生きていたのか、アシュレイ」

『いやあ、落とし穴の先が硫酸の池だったんだが何とかなったぜ』

死ぬかと思っただけどなー、などと暢気に嘯く彼の声を尻目にレーゼは手にした地図に目を通し、「ふむ」と呟くと、

「……一応、地下の方からも奥に行けるようだし、お前はそのまま進んでくれ。最奥部に通じる扉の前で落ち合おう」

『はいはい、リョーカイリョーカイ』

アシュレイのなんとも投げやりな返事にため息をつき、通信機を切る。

同時に長剣の柄に手をかけ、振り返りざまに鞘から抜き放った。

硬い装甲を叩き切った確かな感触が手に伝わり、今まさに短剣を振り下ろそうとしていた紺色の守護機兵の胴体が横一文字に切断される。

だが最後の足掻きといわんばかりに、それは短剣を握り締めた方の腕を無理やり突き出してきた。

「ッ！」

咄嗟に体を捻り、それを避ける。

だが左頬に冷たい感触が奔った。頬を浅く斬られたと理解したと同時にレーゼは無理な体勢のまま、長剣を下から掬い上げた。

その一撃でその守護機兵は上部部から命とも呼べる顔部に象嵌された宝玉 レヴィオス 彩奏珠までを真つ二つに断たれ、完全に機能を停止する。

レーゼは重たいものが幾つも石造りの床に落ちる音を聞きながら

長剣を鞘に収めると、頬から流れた血を袖で拭った。

「『最奥部以外の機兵は全滅させた』はずじゃなかったのか、メル  
グイス……」

先ほどの不意打ちの際に手放し、床に散乱したこの遺跡の資料を  
拾い集めながらぼやく。

だが当の本人は遙か遠くのギルド本部だ。帰ったら山ほど文句を  
言ってやろうと内心誓いつつ最後の資料に手をかけ。

「これは」

そこに載っていたのは、恐らく最奥部から撤退する際に撮ったも  
のと思われる写真だった。

淡い青色の光に包まれた巨大な空間の中に凄まじい数の機兵がひ  
しめき、腕を伸ばしているその姿は少々引いてしまうほどの迫力が  
ある。

この最後の資料を見たときは、大して興味もなかったので軽く見  
る程度にしていたのだが、どうやらそれは間違いだったらしい。

レーゼが注目したのはそこではなく、写真上部に映る青い結  
晶だった。

まるで霞がかかったかのようにぼんやりとされていてイマイチ分か  
り辛いのか、その中に何かが封じ込められている。

それが何なのか少し気になったが、これ以上眺めても分からない  
ので写真から目を離して前を見据えた。

「まあ、どうにかなるだろう……」

そして、まるで自分に言い聞かせるようにレレゼはそう呟くと、  
ゆっくりと一歩を踏み出した。

## 第二話：解放

## 交わる瞳

アシュレイ・ツアイスという名の青年は、ギルドで最もお調子者であると評価されている。

それは普段の行いのせいであり、その言動のせいであり、あまりのノリの良さが原因であると言えるだろう。

だが仕事となると話は違う。やることはキッチリとするし、なおかつ行動や判断が速い。あまりの変貌振りに初めて彼と仕事をした者は大抵驚く。

本人が言うには『ギャップがあつて格好いいだろ?』とのことなのだが、それを言った瞬間に周囲から冷たい目で見られたのは言うまでもない。

そんな彼は今現在、淡い青の光の中に立っていた。

「こいつぁ困った」

アシュレイは腕を組み、唸りながらそう言う前を見据える。

彼の眼前に広がる光景。表現としては『巢穴』が一番だろうか。深いすり鉢状の形をしており、数メートル下の広場にわらわらと歩き回っている守護機兵の群れが見えた。

「メルヴィスの野郎……デタラメ書きやがったな」

ハア、とため息一つと一緒に懷から紙束を取り出して一瞥。そこにはこの遺跡の調査について書かれていたのだが、確かに、そりゃもうハッキリとこう書かれていたのだ。

『最奥部以外の機兵の全滅を確認。最奥部への扉は封印済み。以降は担当の魔術士が到着するまで』

（これはあれか？ あんちくしょうを強請るチャンスですよってか？）

にやり、とアシュレイはほくそ笑む。

その瞬間遙か遠くにいるはずのギルドマスターがぞくりと体を震わせたのは別の話である。

「つたく、仕方がねえな」

だがここには何もならないということは理解している。故にアシュレイはさも面倒くさそうに頭をがりがり掻き、腰からぶら下がっている漆黒の十字架に手をやって呟くように口を開いた。

『“黒十字”より変幻せよ “白き闇”』

その言葉は魔術を発動する時と似通った声色だった。

瞬間、漆黒の十字架が溶けるように形を変えた。

十字を模していたはずのそれは余計な出っ張りを収納し、伸びて一つの形を成したのだ。

アシュレイが『白き闇』と呼ぶ長槍が、彼の手の中にあった。

「せいじゃ、ま……いつちよ派手にやりますか！」

刹那、アシュレイは勢い良く機兵蠢く広場へと飛び込んだ。

目の前に潰れた刃が迫る。

色は赤銅。その上に赤黒い血のようなものをぶちまけた色が混ざり合い、見ているだけで不愉快になってくる。

そんなことを考えながら、レーゼ・クライスは己の頭部を薙ぎ潰そうとするその一撃を軽いバックステップで避けた。

ブオン！ と風を切る音と共に目の前を分厚い刃が通り過ぎる。

だが彼はそのことをまったく気にした様子もなく、ただ強く床を蹴ると守護機兵『騎士型<sup>ナイト</sup>』の懐へと飛び込んだ。

「せいッ！」

裂帛の声と同時に一閃。あまり手ごたえも感じずに機兵の胴体を両断し、返す刃で下から顔面部の彩奏珠<sup>レイオス</sup>ごと十字に叩き斬る。

その一撃で動力部が破壊されたのか、それはばちばちとスパーク



を弾かせながら動かなくなった。

そして改めて周囲の気配を窺い、敵意を持ったものがないことを確認すると手にしたものを鞘に収めた。

彼が今現在立っている場所は最奥部へと通じる扉の手前である。といっても、広さはそれなりにあり、少なくとも機兵が10体以上たむろしていて、その中で自由に動き回って戦えるほどだ。

先にここへたどり着いたレーゼを迎えたのは機兵の群れであり、それを今しがた全滅させた、というわけなのだ。

「だが、これは……」

レーゼは足元に転がっている大きな錠の型をしていた封印の残骸を一瞥し、呟く。

これに施された封印は物質操作魔術マテリアル・マギスの応用による『物体の不変化』だ。

決して曲がらず、壊れず、『変化』することのないそれは、少なくとも機兵に簡単に破壊されるほど柔ではない。

更に、大きな欠片を拾って軽く表面や破砕面を確認してみる。これは、明らかに。

「人の手による破壊、か」

確かに『物体の不変化』は魔術で行使されたものだ。そのため魔力を多量に用いて魔術の構成に割り込み、破壊することも可能だろう。

だ  
が  
。

「こんなことをする必要が、どこにある？」

少なくとも、こんな辺境にわざわざ出向いてギルドがかけた封印魔術を破壊するなど、意味があるはずがないのだ。

一瞬だけギルドに敵対する組織の仕業かと思うが、こんなみみっちい事をするぐらいならもっと別のことをするだろう。

それが相当阿呆な組織でなければ、の話だが。

「……嫌な予感がするな、まったく」

そう呟き、ため息。

そして思う。分からないことが多すぎる、と。

『誰か』が封印されていた最奥部への扉を開き、その中に詰まっていた守護機兵を解き放った。だがそこに秘められた理由を知ることとはできない。

まとまらない思考に本日四度目のため息を吐き出し、幸運が逃げそうだ、などと考えながら壁に瀨を預けて力を抜いた体勢になった。

だが、そこで地面が唐突に揺れ初め、音が響き渡った。

ごおん、ごおんと定期的に響くそれはレーゼの右側数メートル先の床が発生源らしい。その証拠に、そこには徐々に盛り上がりひびが入り始めている。

レーゼはそれに警戒し、瞬時に壁から背を離して柄に手をかけた。  
そして。

「どっせーい！」

そんな間拔けな声と共に、床が爆砕した。

砕かれた石床が砂煙となって辺りを包む。レーゼは咄嗟に口元を覆い、床に生まれた穴から何かが飛び出してくるのを見た。

『それ』は空中でくると回転し、彼に背を向けた上体で華麗に着地し 何故かポーズを決めている。

身長ほどもあろうかという槍を手にした右腕を斜め四十五度に掲げ、左手を当てた腰を左に突き出している 見ているとサタデーなナイトにフィーバーしたくなってくる、そんなポーズだ。

よく見れば『それ』は見覚えのある槍を手にしていて、見覚えのある服を着ていて、見覚えのある鉢巻を巻いていた。

つまり、アシュレイ・ツァイスその人であった。

「……何をしてるんだ？ アシュレイ」

レーゼは痛む頭を片手で包みながら、フィーバーポーズを決め続けているアシュレイへ呆れた様子で声をかけた。

すると彼はにやり、と笑みを浮かべ、

「いやあ、一度でいいからこういうポーズを決めてみたかったんだよな、俺」

その得意げな言葉にレーゼはなんとなく腹が立ったので、元来た穴へと背中から蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされ、宙に浮いたアシュレイは一瞬何かをこらえるかのように全身を強張らせ、次いでバタバタと平泳ぎのように両手両足をばたつかせて空気を引っ掻き回し、何とか落下を阻止せんと必死に努力する。

だがしかし、現実是非情である。彼の努力も空しく、たった一つの言葉を残して青年は穴の中へと落ちていった。

「なぜだああああああ………」

ちなみに、彼が再び床の下から這い上がってきたのは落ちた時間から数えてきっかり10分後のことである。

「おいおい、何の冗談だよこりゃあ………」

最奥部へと続く扉を開けてその内部へと突入し、その光景を見た

アシュレイはただ呆然と呟いていた。同じように、レーゼも彼らからぬ表情で『それ』を視界に捉えている。

二人の眼前。そこには淡く青い光を放つ巨大な湖が存在していた。

たったそれだけ。そう、たったそれだけなのだ。そこにあるのはただ静かな空間だけである。

驚きで未だ動き出さないアシュレイの横から、レーゼは無意識のうちに一歩前を踏み。

『だれ？』

聞き覚えの無い少女の音が　だが妙に心に響く声色で　レーゼの耳に届いた。

反射的に顔を上げ、それが聞こえた方へ向ける。

視界に入ったのは、青い光を放つひし形立方体の巨大な結晶。

そしてその中には、うつすらと瞳を開いてこちらを見下ろしている1人の少女がいた。

「っ!？」

あまりに幻想的なその光景にレーゼは息を呑み、言葉を失う。

見たところ、年齢は十七、十八ぐらいだろうか。青で構成された

何の装飾も無いローブに身を包み、腰まで届く金の美しい髪は翼のように広がっている。

その澄んだ海のような碧眼は虚ろで、あまりにも整いすぎた顔には愁いを帯びた表情が浮かんでいた。

何だ、あれは。

レーゼ・クライスは驚きによって鈍った頭でそう思考する。ありえない、とただ否定する。

そう、現実的に考えれば『それはあまりにも『普通』からかけ離れていた。

だが頭のどこかで、自分ではない『誰か』がその考えを否定した。

これは     ありえないことではない、と。

酷く聞き覚えのある声が頭の中に響く。だがそれは無感情で鷹揚がなく、まるで人ではないかのような声色。

「材質、素材     共に不明だと？     どういうことだよ」

いつの間にか機械じみた眼帯を左目に装着したアシュレイがそう呻く。

そうこうしている内に結晶内の少女が動いた。

虚ろに開いていた目蓋をゆっくりとだが持ち上げ始め、瞳に意識の光が宿る。

その視線は二人を捕らえていただけだったが、のろのろとレーゼの方へと向けた。

蒼髪の青年と金髪の少女の視線が交差する。

直後、レーゼの視界が暗転した。

風が耳元を通り過ぎる鋭い音で、レーゼは意識を覚醒させた。

視界に飛び込んできたのは、地平線まで続く壮大な草原。

先ほどまで遺跡の中にいたはずだ。それがどうしてこんな場所に  
そう思うが早いのか、ざあっと風が草原の海を凪いだ。あまりの  
勢いに一瞬目を細め、手を目の前にかざす。だがそこで驚きに息を  
止めた。

手が、ない。いや、全身を見渡してみればそこには何も無い  
つまり今ここにはレーゼの視覚と聴覚だけが存在しているのだ。

あまりに不可解な現象に眉をひそめるように感覚を動かし、現状  
を把握するために視界を動かせるかどうか試してみる。すると、九  
十度ほど動いてくれた。

そこに、人影があつた。

漆黒の外套を纏った、長軀の男である。自分と同じような蒼髪だ  
が太陽の逆光のせいで顔の辺りが影になっていてその表情は見えない。  
い。

彼はただ太陽を背に、じっと目の前の光景を見据えていた。

その視線の先が気になったレーゼは、体を捻るような感覚で視線を彼と同じ方向に向ける。

最初に映ったのは、地平の果てへと伸びている汚れ一つない純白の城壁。そして所々にはためく深紅の旗。

それを見て、レーゼは目を見開いた。

中央には『誇り』の証である金色の獅子を据え、周囲を6つの『英知』を司る小さな円で囲み、獅子の背後に『力』の象徴である剣を描いているその旗は、まさしく太古の昔に滅びたとされる古代王国『シンフォニア』の証。

男はしばらく城壁と旗を睨み続け、不意に草原の遥か彼方へと顔を向けた。

『来たか』

そして、とても聞き覚えのある声で彼は呟く。

その視線の先。そこには。

『魂ぱクノ照合ヲ確二ん。再生機構No.0000000“リデ  
イヴィヴス零番”の封いん解除シークエンスを開始します』



酷くノイズの混じった合成音声が一帯に響き渡る。その声にレーゼは咄嗟に顔を上げた。

どうやら一瞬の間だけ気を緩めてしまっていたらしい。第一級魔術士からぬ『油断』だが、それほどの衝撃が頭上のそれにはあった。結晶内に閉じ込められた少女。それが目の前の光景を表すのに一番な言葉だった。

「『アーティファクト』の影響で閉じ込められたのか。それとも……」

レーゼは己の疑問を呟くようにして口に出す。

アーティファクトとは、古代文明が生み出した特殊な力を持つ道具の総称だ。

その大きさは小指大のものもあれば、一軒家が数10個収まるほどの巨大なドーム状のものまで多岐に渡る。

そして秘められている能力は見た目と反している場合も多く、使用によつては暴走する可能性もあるので『ヴァルハラ』は積極的にそれらを回収し、その力の解明に努めている。

「アシュレイ。彼女を降ろす事は？」

「無理だな。俺の『千里之眼』<sup>クレヤボヤンス</sup>で無理やり解析してみたが、内部が『魔奏回路』<sup>サーキット</sup>で埋め尽くされてやがる。下手に動かすと何の魔術

が発動するか分からねえぞ」

ふと思い立って隣の青年に問いかけてみるも、本人はそう言っ  
て左目の眼帯を叩いた。

彼が言う『魔奏回路』とは、魔奏珠の内部に刻まれている『世界  
樹』へと至るための回路だ。

絵本などでよく見かける魔法の方陣　いわゆる魔方陣のような  
代物で、魔奏珠が壊された時に活用することもできる。

だがあの結晶体全体にそれが張り巡らされているという。  
つまりあれはいつでも魔術を発動可能というわけだ。慎重になら  
ざるを得ないだろう。

「ならば、これで」

仕方がない、といった様子でレーゼはホルスターから一丁の小型  
銃を取り出す。

それは何の装飾も存在しない無骨な外見で、色は漆黒。左側面に  
は群青色の宝玉がはめ込まれており、アンバランスな銃であった。

『魔力銃』と名のつけられたそれは鉛ではなく魔力を打ち出す代  
物だ。

レーゼは照準を空中の結晶へと合わせ、弾丸としての魔力を銃へ  
と送る。

するとそれに呼応するように銃の側面に彫られているエネルギー  
ラインが発光を開始。

だが。

「  
2.....1.....0.....。解除シークエンス、正常終了。封  
因結晶体“万理<sup>オリオール</sup>の令晶”を開封。続いて構成術式の組み換えを開始  
成功。再生機構No.0000000“リデイヴィウス零番  
”・イリス・レミナート 開放します」

「.....くっ！」

「うおっ!？」

刹那、先ほどとはまったく違うクリアな合成音声が響き渡り  
青い光が二人の視界を覆う。

咄嗟にレーゼもアシュレイも腕で目がつぶれそうなほど強烈な光  
を防ぎ、収まった後にそつと上を見据えた。

そして最初に見えた光景は、魔術も使っていないのに宙に浮  
く少女の姿。

先ほどの光はあの結晶が消滅した影響だったのか、彼女の体は外  
気に晒されている。

レーゼは改めて少女の顔を見た。  
感情を宿しておらず、まるで機兵のような瞳。人形じみた造形美  
も相まって、まさしく彼女は本物の『人形』にしか見えなかった。

「.....む」

そこまで考えていた時だった。あらゆる変化を終えた少女が空中からゆつくりと足から降り始めた。

まるで偉大な何かが降臨したかのような光景に二人はしばらく言葉を失う。

だが、このままではあの娘が水の中に沈んでしまうと考え、水中に飛び込んで助けるべきか一瞬迷ってしまう。

その一瞬の後に何かが凍る音が広大な空間の中に響き渡った。思考を頭の隅に追いやり、その音が聞こえた方へと顔を向ける。そこには少女がいた。

魔術を使わず、ただ足元の水面を凍らせながら　少女は目を閉じて浮いていた。

再び思考が停止する。

「おいおい、嘘だろ」

アシュレイの呟きも耳に入らない。ただ目の前のありえない情景に目を奪われる。そしてついに、かすかな冷気を漂わせて氷結は泉の縁で止まった。

目を凝らし、レーゼは少女の姿を探す。

霧のようなものが発生してよく見えないが、少女は確かにそこに立っていた。

だが刹那、支えを失った人形のようにイリスと呼ばれていた少女は、力が抜けたかのように倒れ込む。

「ッ！」

咄嗟にレーザーが駆け出した。

どうやら泉は奥深くまで凍っているらしく、大人が乗ったぐらいでは割れない。その上、氷特有のつかみ所の無い足場ではなく普通の地面のように容易に走れた。

アシュレイが背後で何か叫んだが無視し、少女の下へ一目散に駆け寄る。

なぜそこまで必死になるのか自分でもよく分からないが、そうしなければならぬ気がしたのだ。

それが何の感情かは知らない。ともかくあの娘を無事に保護する事だけが最優先事項だ、と。

氷漬けの泉の中央。そこに横たわっている少女の下へ辿り着いき、膝を突いてその小さな肢体を抱き上げて、意外と軽いことに驚きながらも立ち上がる。

少女 『イリス・レミナート』と合成声にそう呼ばれた少女は驚くほど整った顔立ちをしていた。

あの結晶体に閉じ込められていた時は遠くにいたのでその輪郭がよく分からなかったが、改めて見てみるとそう感じてしまう。

肌は透き通るように白く、肩より若干長い金の髪に縁取られた顔は小づくりで、その中にある小さな薄紅色の唇は閉じられている。

妙に滑らかな青のローブを着ており、首からは矢じりの形をしたペンダントをぶら下げていた。そのペンダントの真ん中には青の小さな宝玉が埋まっている。

ぐったりしているが、胸が上下している所を見るとただ気絶しているだけのようだ。

「それにしても……」

少女の無事を確認して安心したのか、レーゼは一人呟く。それは既に彼のクセのようなものだ。考え事をするときはついそうやって独り言を口にしてしまう。

考える事はただ一つ。この少女は何者が、ということだ。

だが一人で考え込んでも仕方がない。少なくとも、あの馬鹿で変人なギルドマスターの知恵を借りなくてはどのようなもない。

この異常現象を信じてくれるか　それだけが心配だ。

「ワケが分かんねえな。……どうするよ。レーゼ」

いつの間にか隣に来ていたアシュレイはレーゼが抱え込んだ少女の顔を覗き込みながら言った。

「ああ、とりあえずメルヴィスに相談してみるしか　」

そう言いかけて、少女が苦しそうに体を動かした。レーゼは言葉を止め、問いかける。

「……起きたか？」

その声が届いたのかは知らないが、イリスは瞼を震わせて、目を開いた。

「あ……」

続いて、鈴を転がすような声で何かを言いかける。しかし苦しそうに咳き込むと、ぼんやりとした眼をレーゼに向けた。

思わず見つめられた本人もその美しい瞳に吸い込まれるように目を合わせ。

「に、げて」

少女の声に、我を取り戻した。

「お前、一体何を」

何を言っているんだ、と言いかける。

だが次の瞬間、それは何か巨大なものが地面に突き刺さるような轟音に阻止された。

それが聞こえた方へと顔を巡らせ、瞬時に表情を凍らせる。隣で静観していたはずのアシュレイも、顔を引きつらせていた。

二人の視線の行き着く先に、『それ』はいた。

タマゴ、と表現すればいいだろうか。アーチを描いた灰色の『そ

れ』は、底辺の横辺りから三角形の足のようなものをぱっくりと生やし、頂上からは円錐状の光る単眼モノアイを覗かせている。

間違いなく、守護機兵の一種だ。

それも上位の守護機兵の一体である『守護グラント覇者』 通称『アイゼン・リッター』と呼ばれる存在。

その間抜けだが禍々しい姿を見た瞬間、レーゼは最悪だ、と思った。

アイゼン・リッターは魔術士の中でも最高の称号といわれる第一級に到達した人間が三人束になってやっと倒せるというほどの戦闘能力を保持しており、しかしその数の少なさからもはや『伝説』としてでしか扱われていなかった。

それが今日の前にいる。倒せるかどうか分からない化け物が。

「これは、ちょっとヤバイかな……」

冷や汗を垂らしながらアシュレイが呟いた。反射的に槍を強く握っており、既に戦闘体制には言っている。

だが、その戦意もすぐさま失われることになる。

壁に次々と穴が開き、中からまるで亀の産卵の如くアイゼン・リッターが何体も飛び出てきたのだ。そして瞬時に起き上がり、壁を作るかのように左右に展開していく。

がちり、と前足代わりの三角足をぶつけ合わせ、威嚇するようにじり寄り、最強の機兵は包囲網を狭めた。



万事休す、か。

レーゼは心の奥底の自分がそう言うのを確かに聞いた。だが、と思う。ここで簡単に諦めるわけにも、死ぬわけにもいかない、と。

故に、少女を庇うように抱きかかえ、右手で器用に長剣を引き抜き言った。

「……さて、足掻くぞ。アシュレイ」

「お前は何でそう気軽に言えるんだよ」

レーゼの極めて冷静な言葉にアシュレイは「たくつ」と呆れたような声色で返し、だが次の瞬間には口元に獰猛な笑みを浮かべた。

「しゃーねえな。一思いに暴れるか」

気合を入れるように槍を構え、二人は背中合わせになる。もちろん少女はレーゼが抱えてままだ。

ゆつくりと、緊迫感が増してゆく。空気は既に張り詰めており、少しでも揺れれば全てが断ち切られるかのように　誰も、何も動かない。

「……げて」

唐突に、少女が呟いた。

同時にアイゼン・リッターがその研ぎ澄まされた脚部を振り上げ、

飛び掛る。

レーゼは即座に動けるように足に力を込める。

アシュレイが詠唱を開始する。

全ては一瞬の出来事。

「逃げてええええ

」！

少女が叫ぶ。

瞬間、彼女の首にかかっていたペンダントを中心として、閃光が奔った。

その光は一瞬にしてイリスとレーゼ、そしてアシュレイの三人を包み込み。

そこに三人の姿などは、どこにもなかった。

### 第三話：邂逅

#### 始まる物語

時は既に夕刻。レーゼとアシュレイはギルド内にあるメルヴィスの執務室にいた。

あの妙な光に巻き込まれた三人は気付けば遺跡の入り口に佇んでおり、そのまま気絶してしまった少女を急いで魔道列車に乗せて大都市ダルムヘイツに帰ってきたのだ。

その際、少女のことを駅員に色々と疑われたが銃を突きつけるといふ誠実な交渉のおかげであっさり乗せてくれたのは言うまでもない。

そして今、少女は一向に目を覚ます事なくソファアの一つを占領している。

「つまりこの子　イリスちゃんを助けたために遅くなった、と」

二人が今までの出来事を説明し終わると、ギルドマスターであるメルヴィスはうんうんと頷いて、

「青春だねえ……」

もはや反射的にレーゼは鞘を叩きつけた。

「あひい！」と奇声を上げてメルヴィスは避ける。

さらにそれを追撃すべく腰のホルスターから魔力銃を引き抜き照準するが、傍らにイリスが寝ていることを思い出し、引き金から指

を離した。

こんな狭っ苦しい場所で血やら脳漿やらを飛び散らせたらそれこそ片づけが面倒くさいという、そんな考えもあるが。

「死ぬかと思つたよ」

ふう、と額の冷や汗をメルヴィスは袖で拭きつつ座り直す。そしておもむろに口を開いた。

「それで、君たちは彼女をどうしたいんだい？」

「俺たちが聞きたいぐらいなんだが」

レーゼが言葉を返すと、

「だよねえ。だからこうしてわざわざ僕に頼りに来たんだろうし」

メルヴィスはふうむ、と顎に手を当て、ソファアの上で居心地良さそうに眠る少女を眺め、

「……なんか、どこかで見たことある顔なんだよねえ」

「ついに子供までに手を出すようになったか」

その指摘に慌てて青年は手を振り、釈明するように言った。

「ははは、なに言ってるんだかこのお馬鹿さんはー。ははははははそんなことしたら僕がマイナに殺されます」

「お前の奥さんって確か『軍神』だったよな……。跡形も残らず消し炭にしてもらえよ」

レーゼの言葉にメルヴィスは笑いながら冷や汗を流していた。

それもそのはず。『軍神』とは言ってしまえば『自然災害』に例えられるほどの、『止めようがない』強力無比な存在だからだ。

九一年前の『統一戦争』でも、別の『軍神』が剣一本、拳一つで単身敵基地に乗り込み、わずか半日で壊滅させたという噂さえ存在している。

『軍神』が何故それほど強力な力を持っているのかは、未だに証明されていない。

せいぜい、『軍神』は四十年周期に二人だけが生まれ、初めから規格外の戦闘能力や魔術的な能力を有している、といったことくらいしか分かってないのが現状だ。

時折レーゼは思う。コイツよく結婚できたな、と。

「あ、うん、ごめん。絶対に言わないでくださいお願いしますっ！」

自分の妻の暴れっぷりを思い出したのか、必死に頭を下げるメルヴィスを見て何となく不憫に思えてきたので話を逸らす。

「まあその話は置いて、だ。とりあえず、どうするよ？」

「んー。ともかく血の繋がった人を探したいところだけどねえ」

話題を変えると、早速メルヴィスは考え出した。頭だけは無駄い

いのだ、こいつは。

「そもそも『結晶の中にいた』なんていう状態で肉親とか血の繋がった人間がいるとは思えねえな」

アシュレイの意見にレーゼも同意するように頷く。

その時だ、少女がかすかに身じろぎをしたのだ。

まるで悪夢から逃れるように、苦しそうに何度か寝返りを打つ。

「ん……」

「起きたか」

眩き、レーゼが立ち上がって少女の側まで行く。

ちょうど少女が目を開けたところだった。

二人の目が合う。

少女が、目を見開いて眩いた。

「？」

聞き取れなかった『それ』は、誰かの名前。

だがそこには最大限の愛情と悲しみが詰まっており、まるで久しぶりに会う恋人への呼びかけのような。

そこまで考えて、レーゼの意識は激しいノイズと共に闇へと落ちた。

これは……。

風が優しく草を撫で、過ぎ去っていく草原の中央にレーゼは立っていた。

地面は地平線の果てまで緑で覆われている。

咄嗟に前へ出ようとするが、動けない。足を見てみると、そこで初めて自分が視覚と聴覚だけの存在だと理解した。

そして思い出す。以前に一度だけ、似たような状態になったことがある、と。

いったい何なんだ、これは。

答えてくれるものはいない。ただ悠然と風が吹き抜けていくのみ。

『ここにいたのか、』

そこに響いたのは若々しい声だ。以前と同じようにレーゼは体を捻るような感覚で視線を動かす。

草原の中央に、青年がいた。

知的で優しい茶の瞳を持つ青年だ。白色の髪はざっくばらんに切っており、白衣のような上着を着ている。

研究者だろうか、とレーゼが思考する前に再び違う方向から別の声が聞こえた。

『ルトか、……何かあったか？』

視線をそちらへ向ける。

青年は、ルトと呼ばれていた白衣の青年と同じように草原の真ん中に立っていた。

白衣の青年と相対する彼の顔は見えない。まるで意図的に隠されているかのように。

寝転んでいたせいか肩ほどに伸びた鮮やかな青髪には葉が絡まっており、だが太陽の光を受けて艶を放っている。

白衣の青年はそんな彼に歩み寄りながら口を開いた。

『知らないかい？』

『また逃げたのか？ 懲りずによくやるものだ』

やれやれ、といった様子でそう言った青髪の青年にルトは苦笑し、

『まあ活発だからいいじゃない。それにほら、彼女、君に懐いているから』

『懐かれる身にもなってくれ。遊んで遊んでとるさくてたまらん』



『あははは、それぐらいがちょうどいいんだよ。あの子だって、一人で寂しかったんだから』

青年は「やれやれ」といった様子でため息をついた。

『確かにそうだな。……だがあいつは、何故か俺がちょうど暇な時に遊んでと迫ってくる。そこが怖い所だ』

堪えきれなくなったのか、ルトは腹を抱えて笑い出す。それを取り繕うように青年は咳払いをし、

『ともかく、「外」に出てたら大変だ。俺も探すのを手伝うぞ』

『そうだね。彼女がいなくなったらみんな悲しんじゃうし。頼むよ』

『ああ。それにあいつは、俺たちの』

そこで言葉は途切れた。

何を言っているのかは聞こえない。だが二人の間には友情のようなものがあるのをレーゼは気付いていた。

青年二人は歩き出す。少女の名を呼びながら。草原の中を。

そしてレーゼの意識は急激に深淵へと落ち、浮上する。

闇から浮上したレーゼの意識は突如として現実へと引き戻された。

まず焦点が戻り、感覚が戻り、そして全てがレーザーの意識下に収まる。

夢のような何かを見ていたような気がするが、やはりこれも覚えていない。

やがて、五感が完全に戻った。

そして見えたのは不思議そうにこちらを見返してくる少女だ。

整った顔立ちをしており、つぶらな澄んだ碧眼はにわかに焦点が合っていない。

少女　確か合成音声にはイリス・レミナートと呼ばれていたは小さく頭を動かし、しかしぼんやりとした表情で、

「……あ」

そう呟き、首を振って己の覚醒を促す。

そして完全に目が覚めたのか、毛布を持ったまま起き上がって振り返り、三人を視界に収め、

「……あなた達は、誰ですか？」

小動物のように首を傾げ、きょとんとした声で聞いてくる。

「その前に、こっちも聞きたいことがあるんだけど」

イリスの言葉をメルヴィスが留める。そして彼は続けた。

「うーん、とりあえず君の家の所在地とか親のこととか。ね？」

数秒の間の後、少女は俯きながら口を開いた。

「……わかりません」

「なに？」

思わずレーゼは聞き返してしまう。だがイリスの声は止まらない。

「わからないんです。自分が誰だか、ここがどこか……」

寂しげな表情を浮かべ、少女は呟く。

「私は、誰なんですか？」

その問いかけは、空しく霧散した。

「記憶喪失、ねえ」

メルヴィスは少女のために紅茶を入れた後、自分で入れたコーヒ  
ーを飲みながらそう呟いた。

「実際あるのか？ そんなもん」

「目の前に実例がいるじゃない」

さらりと切り返され、アシュレイは「んがっ」と声を詰まらせる。

「ま、はつきり言っちゃえば『記憶』を『喪失』しちゃうなんてよ  
つほどの衝撃がない限りはありえないよ。うん」

メルヴィスは自分の言葉に納得したのか、うんうんと頷いた。

「それで……、結晶の中に閉じ込められていた事も、本当に何も思  
い出せないのか？」

レーゼはそれとなく少女に聞いた。

そう、この少女は二人に会ったあの洞窟内での出来事を何も覚えていないのだ。

さらに言ってしまうと、それは全員が自己紹介した後に分かった  
事なのだが、ここで目覚める以前の記憶もなくなっているらしい。

イリスは紅茶を一口に入れ、落ち着いたように一息つくと答えた。

「はい……」

表情を押し隠すように俯いてしまう。そして「ごめんなさい」と  
呟くように言った。

そんな彼女の態度にレーゼは無意識のうちに口を不機嫌そうに曲  
げる。

「別に謝ることはない。記憶が無くても、人は生きてはいける」

そしてそうぶっきらぼうに言うと、イリスははっとしたように顔を上げて聞き取りづらいほど小さな声で呟いた。

「ありがとうございます」

「礼を言われるような事は何もしていないが？」

とぼけるようにレーゼはそう答える。そんな彼に少女は小さな笑みを返した。

「何はともあれ、イリスちゃんの記憶を取り戻さなきゃいけないね」

ぱん！ と手を叩いたメルヴィスはいそいそと机の下から巨大な機械を取り出す。

面倒だったので、レーゼはそれをどうやって収めていたのか聞かないことにした。

机の上に置かれた『それ』は、実に奇妙な形をした機械だった。

先端と思われるのは調理用のボウルを逆さにしたような半円形をしており、根本に埋め込まれたホースは赤で彩られたドラム形の本体へと繋がっている。

そのドラム形の本体に見えるのはコンソールとその下にある四つのボタンだ。

さらにその下にある注意書きには『全部のボタンを一斉に押すと

<ヤバイよヤバイよ>モードになります』と書かれており、妖しく輝く画面には謎の数字がずらりと並んでいる。

「……何だそれは」

レーゼが半眼で問うと、得意げな表情でメルヴィスが言葉を返した。

「ん？ 『記憶吸引君：デイ・ガーワ型』だよ。ウチの開発部が最近暇だからっていう理由で作っちゃったらしいね。『世界樹』の『全ての記憶を司る場所』から目的の記憶を引き出す試作機」

「どんな使用目的だよ、そりゃあ」

呆れた様子でアシュレイがそう聞く。

確かに、他人の記憶を覗くなどと、使用用途がかなり限られてくるだろう。

「これを被せて、こう、ギュインと！ ギュインと！ 吸っちゃうわけだね、その人の記憶を」

そんな疑問をメルヴィスはさらりと無視し、ボウルを被って吸っている事を表現するかのように両手を頭に添え、上げ下げした。

駄目だこいつ。いろんな意味で。

いつもより若干暴走気味な彼に、レーゼは痛む頭から逃れようとこめかみを親指と人差し指で揉み解しながら、再度問いかける。

「一応聞くが……実験は？」

「してないけど？」

「とりあえずお前が吸われている」

その返答に、レーゼは即座にコンソールの下に付いていたボタンの一番左を押した。

下には、『最大出力』斗書かれているが気にしないことにする。

瞬間、ぎゅぎゅぎゅいいいいん！ と冗談抜きでヤバそうな音が『記憶吸引君：デイ・ガーワ型』から発せられた。

その上、上下左右に振動した拳句に熱廃棄のための場所からは黒い煙が吐き出される。

「あばばばばば！ 吸われてる！ 凄い勢いで吸われてるよ！

ああダメダメダメだこれ以上吸われたら何かが変わっちゃうー！」

そして、凄まじい勢いで身をくねっているメルヴィスを見て気持ち悪くなってきたので『停止』と書かれているボタンを押し込んだ。

軽い振動と共に吸引君が停止。同時にコンソールに何かの映像が映し出される。

「なんだこりゃあ……」

アシュレイはそれを覗き込み、唸る。

そこに映されていたのは何故か爆発から逃げ回っているメルヴィ

スだった。

紅蓮の炎が辺りを包み、連続的に爆砕する地面を避けて彼は走っている。二人がしばらく見てみると、メルヴィスが足元の爆発を受け吹っ飛んだところで映像が途切れた。

だが直後、記憶吸引君がガタガタと不穏な音を立てて震え始め、黒煙を上部から噴出し始めた。それを見たレーゼの脳裏に嫌な予感が掠める。

そしてその直感に従い、咄嗟に記憶吸引君を掴み上げ、

「そおら！」

そんな掛け声と共に、ボウルを装着していたメルヴィスごと記憶吸引君を窓から外へとぶん投げた。

体内を巡る魔力<sup>マナ</sup>よって無理やり強化した腕力によって虚空へと放り投げられたそれは、眩い光を全体から放射し　刹那、轟音と共に爆砕する。

ズズンッ！　とギルド本部全体がその衝撃で揺れるが、そこで働いていた職員のほぼ全てが三秒後には「ああ、またか」といった表情で業務へと戻っていった。

ちなみに下の方は既に確認済みで、訓練所であるそこに人影は見えず、実質的な被害はない。

「め、メルヴィスさん！？」

「ふう……悪は滅びた」



「メルヴィス、お前の犠牲は無駄にしないぜ」

メルヴィスが記憶吸引君と共に散ったのをぼかんとした表情で見  
ていたイリスはその二人の声を聞いてようやく我を取り戻し、慌て  
て窓際まで走っていった爆散したギルドマスターの名前を呼ぶ。

だが返事をするものはおらず、まさか、と思ったその次の瞬間  
。

「勝手に殺さないでくれるかなあ!？」

「ひゃあ!？」

ぐわし、と窓枠を掴んでよじ登ってきたメルヴィスがそう叫んだ。  
それに驚いた少女は可愛らしい悲鳴を上げて尻餅をつく。

「生きていたか」

そんな彼女を助け起こしてやりながら、レーゼは舌打ちをしてそ  
う呟いた。

声色には実に残念そうなものが混じっており、その言葉が本気で  
あったことを示している。

「なんで生きてんだよ、お前」

「ふっふっふ、このヘルメットがなければ即死だったよ」

そしてこれ見よがしに残念がるアシュレイに、白髪の青年はいつの間にか被っていた黒いヘルメットをコンコンと突き、

「開発部が生み出した試作型衝撃吸収機『衝撃君ファースト』さ。吸収した衝撃はこの箆手に溜め込まれ、ここから射出することで若干ながら空も飛べるんだよー？」

誰も頼んでいないのに話を始め、次に自らの腕に装着した黒くゴツイ箆手を指差してメルヴィスはのん気な表情で説明を続ける。

「問題は衝撃を頭で受けて溜めなきゃいけないから、落下中はずっと自分を殴りまくったよ、いやぁ辛かった」

そんなゴツいものをどこから取り出したのかは説明されていないが、レーゼはあえて言及せずに先ほどの映像を思い出して呟いた。

「……あれは、奥さんを怒らせたというところか。夫婦喧嘩の粋を超えていたな」

「そついや昨日、都市の外れで原因不明の火災事故と爆発事故あったよな。……真相はあれだったわけか」

その言葉を聞いてメルヴィスはその時の事を思い出したのかビクリと固まり、

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

同じ言葉を永遠と繰り返しながら部屋の隅で「の」の字を書き始めた。

そのあまりの豹変振りに、イリスは反応に困ったのかレーゼの方

を見た。

そんな彼女の視線を受けた青年はふむ、と頷いて、

「気にしないほうがいい。というか気にするな」

「は、はいっ」

その声にイリスは慌てて立ち上がって姿勢を正し、答えた。

「さて、んじゃあ次は俺が頑張ってみますか」

「無駄だとは思うが、一応聞いてみようか。何をする気だ？」

絶対に阿呆なことを考えていると知りつつも、レーゼは聞く。するとアシュレイは顎に手を当てて考えるように唸り、

「記憶が戻るまで頭部を集中的にマウントパンチ。俺の知り合いはこれで治ったぞ？」

直後、ソファアーの上からアシュレイの姿が鈍い音と共に消失した。それを見てイリスは躊躇いがちに、

「あの……何でアシュレイさんは床に転がっているんですか？」

「知らん。急に床に寝転びたくなっただろ」

「その割には随分と痛がっているようですけど……」

頭を押さえて「ぬおおお」と呻き声を上げつつ床を転がり回っ

ている緑髪の青年に鼻を鳴らし、レーゼは握っていた拳を解く。

そんなやり取りを見ていたイリスはくすぐすと笑った。

だがレーゼがそちらに視線を向けると、少女はそれに気付いて顔を真っ赤にして俯いてしまった。

一体どうしたのか、とかすかに疑問に思うが、いきなり発せられた言葉にその思考は中断させられた。

「まあそこまで急いで記憶を戻すこともないよね」

いつの間にか復活したメルヴィスがソファアに座りなおし、微かな笑みを浮かべながらそんなことを言いはじめたのだ。

彼の言葉に若干の戸惑いの表情を浮かべて、イリスは頷く。

「は、はあ」

「それじゃ当面、イリスちゃんが住める場所を探さなきゃね」

のんびり暮らせばいつかは戻るでしょ、と付け加える。

するとイリスは、「ええ!？」と何故か驚きの声を上げた。

しかし自分の声の大きさに気付いたのか、白い肌の頬をさらに紅色に染め、

「え、えーっと……。私、そこまでお世話になるわけには……」

「でも記憶が無いから住む場所も無いでしょ?」

その言葉にイリスはあう、と口を閉じてしまった。

「ギルドで預かる事はできないのか？」

「無理だねえ。それにこんなかわいい子を癒し分に飢えた男共の中に放り出すなんて気が引けるし」

「確かにそうだな……」

レーゼはメルヴィスの言葉に即座に同意した。

基本的にギルドには男が多い。それは守護機兵と戦うことは危険であり、力自慢が集まるために必然的にそうなってしまっからだ。

そのために女性ほとんど事務業などに回され、前線に出てくるのは小数だ。だからメルヴィスには気が引けたのだろう。あの荒くれどもの中にこの少女を放り込むことを。

「だったら女性職員の誰かに預けるか」

「いや、その必要はないよ」

「なに？」

「最適な案が一つだけあるんだよね、これが」

人差し指を一本立て、メルヴィスは言葉を続ける。

「はいここで多数決に移りまーす。第一発見者のレーゼ君を保護者とするという方向で賛成な方ー」

手が三つ上がった。

いつの間にか頭に巨大なタンコブを作って部屋の隅で気絶しているアシュレイの腕をメルヴィスが無理やり掴み、掲げているのその本人が上げているので二つ。  
そしてもう一つは。

イリスが控えめに手を上げていた。

なぜそこでお前が上げる、とツツコみたかったがギリギリ抑え込む。己を落ち着かせるために深くため息をつき、深呼吸。

「……ちよつと待て、そこで気絶してるのは数えないだろ」

「やあ僕アシュレイ！ 僕はレーゼ君とイリスちゃんが住むのに賛成だな！」

白目を剥き、泡を吹いているアシュレイの体をガクガクと震わせ、裏声でメルヴィスが言った。かくんかくんと頭が揺れる姿は凄まじく滑稽である。

「……勝手にしろ」

これは何を言っても聞かないな、と心の底からそう感じたレーゼは諦めにも似た口調で呟いた。

「はい、というわけで決定！」

もはや用なしとなったアシュレイを投げ捨て、メルヴィスは意気揚々とソファーに座る。見事に押し付けられた、という感じた。

どうせ初めからこうするつもりだったのだろう。ここまでやられるとむしろ清々しい。

「あの……」

「ん？」

「これから、よろしくお願いします」

嬉しそうに顔を緩め、イリスはぺこりと頭を下げる。首にかかったネックレスが光を反射して輝き、金糸を梳いたような美しい髪が、さらりと揺れた。

その光景に表情を和らげながら、レーゼは言葉を返した。

「ああ。よろしく頼む。イリス」

### 第三話・邂逅

### 始まる物語（後書き）

これで第一章の終了です。次回の第二章でお会いしましょう。



## 今までの登場人物 Ver.1（前書き）

区切りがいいので、一話から三話まで登場したキャラクターのプロファイルを簡単にまとめてみました。

## 今までの登場人物 Ver.1

レーゼ・クライス - L e s e C r e i s -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』に所属している魔術士。  
ギルドの中で最も高いランクである『第一級単独探索許可書』エ  
クステス所持者であり、その実力は折り紙付きである。

容姿は美形といっても過言ではない。

首すじまで伸ばした青の髪を一まとめにしており、鋭い刃のよう  
な冷たい碧眼を持つ。

黒いシャツの上に、対魔術の効力を持つ仮想金属を繊維状にして  
織り込んだ青い防刃ジャケットを羽織り、同じように金属繊維  
を編みこんだズボンを着用している。

使用武器は長剣と魔力銃。

堅実な戦法を得意とし、派手さはないが確実に守護機兵<sup>ゴレム</sup>を破壊す  
るように立ち回る。

イリス・レミナート - I r i s L e m i n a r t -

古代遺跡『アルバレスタ』の地下において巨大水晶に封印されて  
いたところをレーゼらに見えられ、保護された謎の少女。

現在は重度の記憶喪失であり、保護される前までのことを名前を  
除いて一切覚えていない。

見た目は美少女といって差し支えない。

金髪碧眼で、肩甲骨が隠れるくらいの金糸のように美しいロング

ヘア。

アシュレイ・ツァイス - Ashley Zeiss -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』に所属している魔術士。

『第二級単独探索許可書』セイレス・ルード所持者ではあるが、その実力は『エクステス』に匹敵している。

陽気な性格で、誰からも親しまれているが、一度調子に乗るとヘマをしやすい、どこか抜けている。

ざつくばらんに切りそろえた銀灰色の髪と緑の瞳を持つ。

その容姿はどちらかというと二枚目。

使用武器は十字架から姿を変える長槍。

得意の重力魔術によって派手に動き回りながらブーツやコートに仕込んだ暗器なども使い分けて戦い、トリッキーな戦いが得意。

メルヴィス・セルタレイ - Melvis Seltaray -

『遺跡発掘・魔術士ギルド』が誇る三大ギルドマスターの一人であり、『古の到達者』エンシェントマスターの二つ名を持つ青年。

『怒る』ということをしない極めて穏やかな性格だが、人を扇動するのが最も得意である。

また既婚者であり、『軍神』である奥さんに尻に敷かれているようだ。

雪のように白い髪で茶の瞳を持つ。容姿はそれなり。

レーゼらには手荒く扱われているが、大部分のギルド職員には慕われている。

だが、どんな時でも心のゆとりを忘れずにはっちゃけまくっているせいか、『変人』として見られることもしばしば。

#### 第四話：魔術

#### 記憶のかげら（前書き）

PCの故障で投稿が遅れました、すみません。  
第二章のスタートです。

## 第四話：魔術

## 記憶のかけら

『この子が                      なのか？    なんだ、普通の女の子じゃないか』

それはハジメテのコエ。

赤くて蒼くて黄色くて、白くて黒い世界の中で初めて聞いた  
優しい音。

『ふむ、言わせてもらうが……。彼女が何であろうと“もの”扱いはするな。

       はただの女の子であり、私たちが守るべき存在だ。それ  
以上でも以下でもない。

……うん？    正気か、だと？    阿呆め。    お前は彼女が化け物にでも見えるのか？    もしそうならもう一度言ってやろう。        この馬鹿、阿呆、ドジ、マヌケ、とな』

何も分からなくて、何も知らなくて、何も見えない世界でその暖かい声は確かに        この心に染みこんできた。

『む、怒ったか？        ははは、この軟弱な研究者め！    そんな拳で私を倒せるものか！

………    おい、待て。    阿呆だの馬鹿だのと言いつぎたのは私が悪かったからそれを仕舞え。

………    なに？    痛くはしない……？    いやちょっと待て！    それは痛い以前の問題で        ！』

眩しい誰かが怒っている声が、感情がこの心を打つ。

暖かい誰かが慌てている声が、感情がこの心を打つ。

全てを受け入れてくれる誰かが、笑っている声が　この魂を打つ。

『ああ、ああ。反省したよ……。まったく、お前は怒りっぽいな。くくくつ。いやすまない。』

十分反省したからその物騒なものを仕舞え。怖くてかなわん。…さて、様子も見だし私はそろそろ行くぞ?』

暖かくて優しい誰かが魂と心を撫でていく。

だけどそれはゆっくりと目の前から消えていった。

『なに、次も暇な時に来てやるさ。それじゃあまたな　イリス』

それは色褪せない原初の記憶。

おわることのない、ゆめのつづき。

イリス・レミナートの朝は早い。

何せ、人の家の世話になっているのだ。怠けていたらバチが当たる、と本人はそう思っている。

「んにゅう……」

眠気を振り切った彼女は可愛らしい呻き声を上げながら起き上がった。

かけていた毛布がベッドの上に落ち、美しい金の髪がさらりと揺れる。

くあ、と猫のように欠伸をしてイリスは立ち上がり、ついでに目蓋を擦って自身の覚醒を促す。

「朝、ですね」

窓の外から差し込む光を眺めてそう呟くと、「んー！」と体を伸ばして立ち上がった。

自分を助けてくれた同居人のためにやるべき事はたくさんある、と、イリスは気合を入れるようにガッツポーズをすると部屋を出た。もちろん最低限の身だしなみを整えてから、ではあるが。

少女がレーゼの家　　といっても部屋が二つとごく小さな倉庫代わりの部屋が一つ。そしてリビングとこじんまりしたキッチンで構成された魔術士専用の集合住宅の一つなのだが　　にお世話になるようになってから既に一週間が経っており、その期間でイリスは自分が大体の自分の役割を理解していた。

自分は戦闘には出られない。武器を振るう力などあるはずは無く、それは分かりきっていることである。



彼女にとって出来る事は唯一つだけ。

ギルドや世界政府、そして各方面から持ち込まれる依頼を完遂して帰ってきたこの家の主人のために、精一杯家事をすること。

辛うじて『知識』としての家事のやり方は知っていたのでどうにかなっているが、料理の方はまだまだだ。

本を買って勉強しようにも、自分のものではないお金を使うのは憚られるし、それで上達しなかったら目も当てられない　と言うのが彼女の心境だった。

「はあ……」

一週間で作り慣れた目玉焼きを二人分焼きながら少女はため息を付く。それは現状の不満に対するものではなく、自分の『能力』のなさに対してだ。

過去に関する全ての記憶を失ってしまった自分をさりげなく励まし、そして渋々ながらも文句の一つも言わずに迎え入れてくれた彼に対して、自分は何も恩返しを出来ていない。

唯一、恩返しができそうなものであった魔術もメルヴィスと呼ばれていた青年に「ありえないくらい適性が見つからないねえ」なんて言われたら、そりゃあ落ち込みたくもなる。

「魔術かあ」

ある程度時間が経った後にフライパンの上へ水を少量落とし、界

オド

魔力によって動作するコンロの火を弱めにしつつ蓋をする。

そして皿を並べ終わったイリスはまだ焼き上がらない目玉焼きを眺めながら、数日前に受けた適性検査のときに聞いた説明を思い出していた。

魔術とは『奇跡の代行』ではなく、定められた一定の事象つまり、森羅万象の一時的な『強制変質・強制操作』こそが本質である。

そう最初に切り出したのは、他ならないメルヴィス・セルタレイだった。

「森羅万象、ですか」

「うん。森羅万象というのは、世界に存在するありとあらゆる事象や現象のことだね」

そう言って白髪の青年は紅茶を口にする。

二人　メルヴィスとイリスが今いるのはギルドの執務室、つまりはギルドマスターの仕事場である。

そこでメルヴィスは、彼女が希望した魔術に関する素質の検査結果が書かれた書類を眺めながら話を続けた。

「物が落下するのは『重力』の事象が存在するから。

雨が降るのは水と風と大気が深く交わりあって『降雨』という現

象が生まれるから。

物が燃えるのはその物体と酸素や熱などその他もろもろが混ざって『燃える』という現象が発生するから」

そこで一息つき、長い話で乾いていた口を紅茶で潤しながら再び言葉を紡ぐ。

「ん……、僕たち魔術士は ユグドラシル この世界の根幹であり、世界そのものを構成する『世界樹』に『接続』アクセスして、それら森羅万象の一部を引き出し、事象や現象に指向性を与えて操作する人たちのことを指すんだ」

またも聞いたことのない言葉が飛び出てきたのでイリスは首を傾げた。

するとメルヴィスが彼女の疑問に思っていることにすぐたどり着いたのか、どう教えようかと「うーん」と唸り、

「それじゃあ、まず『世界樹』ユグドラシルの概念から説明してあげないとね」

得意げに立ち上がると、いつの間にか設置されていた小さな黒板に体を向ける。

「  
“我々の住む世界は、一本の大樹によって支えられている”」

そしてひどく感慨深い表情で、あらゆる魔術を生み出した言葉を口にした。

我々の住む世界は、一本の大樹によって支えられている。

聖王暦一七七年、そう断言したのは『ユグドラシル・クライン』という名の学者だった。

大樹といっても実際、地面の下に木が生えているわけではなく、『世界を構成する要素と根幹、そして存在が確認されている事象や現象は木の根や木の枝のように枝分かれして、それぞれの役割を果たしている』という理論を指しているだけに過ぎない。

後に『ユグドラシル理論』と呼ばれ、全ての魔術の基礎となるその理論は、とある事件をもって裏付けられる事になる

遺跡の『出土』とそれに伴う守護機兵の被害。その機兵に対抗しようとして遺跡へ潜り、生還した者たちのよってもたらされた魔奏珠と魔道書。

それらに刻まれていたのは守護機兵の存在理由であり、そして古の人々が使用していた究極の技術　魔術の存在であった。

また、とある魔道書には世界は大樹によって支えられている、とそう記されていた。

それはまさしく『ユグドラシル理論』そのものであった。

なぜ、一介の学者がそれほどまでの理論にたどり着いたのかはい

まだ分かっていない。

なぜならこの理論を発表した当の本人は、その翌年に死亡したのだから。

その遺体は凄惨極まる表情を浮かべていたせい、ある者は『悪魔と契約してその知識を得たから、代償として魂を刈り取られた』などという荒唐無稽なことを言い、

またある者は『理論の裏づけを取るために、なにかヤバイことに手を出したから、見せしめとして殺されたのでは？』と体を震わせながら呟くなど、どうにも的を射ない噂ばかりが広がっていたという。

だがとにかく、彼の遺した理論と長年の風化や虫食いによってボロボロになっていくつも魔道書を重ね合わせ、世界に魔術が再び蘇らせることができたのだ。

その点では、人々はユグドラシル・クラインに感謝した。こんな素晴らしい理論を残してくれてありがとう、と。

そうやって生まれた魔術を簡単に説明すると、世界樹へと続く回線<sup>イン</sup>の役割を果たす『魔奏珠<sup>テリオス</sup>』に、大気を漂う『界魔力<sup>オド</sup>』と血液のように人の体内を循環する『魔力<sup>マナ</sup>』を融合させた特殊な魔力を通わすことによって、

世界樹の中に存在する『あらゆる現象・事象を司る場所』や『あらゆる法則を司る場所』へと『接続<sup>アクセス</sup>』し、自然現象を複製<sup>コピー</sup>してそれを操る事ができる。いわば森羅万象を操る力だ。

とても分かりやすい説明だった、とイリスは思う。

『知識』のない自分でもそれなりに理解できたのだから。

けれど、使えないのなら意味がない。

メルヴィス曰く『<sup>オド</sup>界魔力と<sup>マナ</sup>魔力の融合は出来るけど、世界樹に“接続”しようとするとなぜか弾かれるんだよねえ』とのことである。

そういわれた瞬間、彼女は思わず泣きそうになった。

これは後に言われたことだが、目の端に涙を溜めていたとのことである。

「私って、昔から涙脆かったのかなあ……？」

まったく思い出せない過去の自分に、イリスはなんとなく問いかけていた。

## 第五話：予感

## 依頼と悪寒とわがまま娘と

『エンシェントマスター  
古の到達者』

そう呼ばれる称号を持つ人間が、ここ『ヴァルハラ』本部には存在するという。

噂では、指先一つで悪をダウンさせたとか、軍神級魔術士を屈服させて無理やり娶ったとか、その絶対的な力で世界征服を企んでいるだとか。

そんな根も葉もない噂の中心部である『エンシェントマスター  
古の到達者』であり、普段はギルドマスターとして仕事に精を出しているメルヴィス・セルタレイは、現在進行形でとんでもなく悩んでいた。

恐らくこの悩みは一人では解決することは出来ないだろう、と彼は思う。

何せ色々と一大事なのだ。目を通すべき書類は溜まっているし、このところ守護機兵の被害が多くてその対処に色々と頭を使っ、このところ寝不足なのも問題の一つだが。

（どうしようもないよねえ……）

内心愚痴り、メルヴィスは顔を上げる。彼の眼前、そこには腕を組んで睨みつけてくる女性が一人いた。

見事に整えられた腰まで届かんばかりの金髪と、我の強そうな釣り目に深緑の瞳。

その存在を主張するように盛り上がっている豊満な胸元には、緑

色の魔奏珠がはめ込まれた三日月型のネックレスが吊り下げられている。  
テリオス

そしていかにもお嬢様といった、緑を基調としたドレスのような服を身につけていた。

その女性 セレーネ・C・ミストノートに睨みつけられながら、メルヴィスは言った。

どちらかというと、興奮している動物を落ち着かせるような口調で。

「あのさあセレーネちゃん。僕としてはこんなところでの押し問答は……埒が明かない気がするんだけど」

その言葉にセレーネは辺りを見渡した。

二人がいるのはギルド本部のロビーだ。つまり人が多く集まり、なおかつ最も注目されやすい場所である。

勿論、彼女たちはすでに注目されていた。主に『ああ、またか』といった意味で。

だが、それがどうしたことかといった様子で彼女は髪を後ろへと手で流しながら話を続けた。

「ダ・メ・よ。私は急いでるんだから」

「けどさあ、前衛系の仕事が全部取られたっていつてもまだ他にも色々あるでしょ？ 商隊護衛とかさ。何も守護機兵を狩るだけが魔術士じゃ……」

「イ・ヤ。『第二級準単独探索許可書』持ちの、この私が護衛なんてちんたらした任務やってられないわ」  
セイレス・ルード



一息つき、さらにセレーネは続ける。

「手っ取り早く確実に！　それが私のモットーなの。第一護衛任務は時間がかかりすぎるし、時々イヤラシイ目で見てくるのよ。あの成金ども」

「ふん」と不機嫌そうにそう言い切った彼女にメルヴィスは苦笑し、そして再び悩む。

こちらの仕事も溜まりっぱなしだし、どうせ回せる仕事もない。無いものねだりされても困るのである。

というわけで、どうにかして帰るように説得したのだが、一人では絶対にどうにもならないぐらい分かる。

だから共犯者が来てくれればなあ、と願ったりするわけだが。その時だった。メルヴィスにとって最も扱いやすく、一番の顔見知りが見界の端に飛び込んできたのは。

メルヴィスはいつもの笑みを取り戻すと、『彼』に向かって手招きをした。

その日、いつも通りの時間にギルド本部へとついたレーゼは玄関ロビーの隅に不思議な光景を見つけた。

見知った顔が二人、睨み合っていたのだ。

一人は顔を陰しくしたメルヴィス。もう一人は数少ない女性の知り合いであるセレーネである。

「……何をやっているんだ、あいつらは」

呟くと同時にメルヴィスの顔が凄まじい勢いでぐりん！ と動き、レーゼを見つめた上で、何故か満面の笑みで手招きしてきた。

嫌な予感というか、すでに直感までに達した彼の感覚は全てを拒否することを勧めている。

それに従い、レーゼは凄い勢いで顔を背けた。

（よし、見ないフリ見ないフリ）

心の中で自分に言い聞かせ、足を進める。

だがその直後、ぐいっと、その歩みは強制的に止められた。

誰かの手が、レーゼの肩を力強く掴んでいるせいだ。

もう誰が掴んでいるのかは分かりきっているが、この考えが外れていてほしいと願いつつゆっくりと頭を回し、誰が掴んだかを確認する。

そこには、予想通りメルヴィスが微笑んで立っていた。

なんで自分の願望はこうもことごとく外れてくれるんだろう、とレーゼは微妙な感傷に浸りながら口を開く。

「放せ馬鹿ギルドマスター。略して馬鹿スター」

「……僕は馬鹿の星なのかい？」

「いや、どちらかというと思の骨頂といったところだな。　　とい  
うわけで放せ」

「放さないよ。うふふふ」

地の底から響くような笑い声を上げ、青年は告げる。  
その表情を見て『ああ、これは逃げられんな』と心の底から悟つ  
たレーゼは、ついに降参するように力を抜いた。

「うんうん、それでよし」と

「……何か用か？」

うん、と満足そうに頷き、メルヴィスは先ほどまでいた場所を指  
差す。

そこにはセレーネが凄まじく不機嫌そうな顔で仁王立ちをし、こ  
ちらを睨んでいるのが見えた。

それを見て、レーゼは無言で再び歩き出す。先ほどよりも大股で、  
なおかつ足早に。

「ちよっ、ちよっ！　レーゼ君！　なに逃げようとしてるの！？」

「放してくれメルヴィス。俺は向こうに行かなければならない用事  
が出来た」

「そっちは出口でしょうが！」

ギャーギャーと押し合いへし合い、やがて責任を押し付けあうように二人はセレーネの前に辿り着く。

不審そうな表情で彼女に眺められ、レーゼはアシュレイに睨みつけるような目線を向けた。

（で、どうしろというんだ？ お前は）

（この傲慢かつ恐ろしい悪女の暴走を止めて欲しいんだけど。ほら、いつもみたいに）

ゴシヨゴシヨと、なるべく聞こえないように小声で問答を繰り返す。

するとその瞬間、セレーネは額に青筋を浮かべて眉を立て、息を吸い、

「悪女で……悪かったわねええええ！」

「何で聞こえてるのぉおぉお！？」

同時に咆哮。

そしてスカートなのも気にせず、ヒールの回し蹴りをメルヴィスのわき腹に叩き込んだ。

骨と肉を打つ鈍い音と「ばぶろお!？」という叫び声が響き渡り、ギルド内で最大権力者のはずのギルドマスターは吹っ飛ぶ。

人型の何かが壁に激突する音を聞きつつ、レーゼはセレーネから視線を逸らした。

「何で目を逸らすのよ！」

「いや、生存本能が働いた」

「なお悪いわー！」

その言葉に、ムガー！ と大人気なくキレたセレーネが今度は鉄拳を飛ばすが、器用に半身だけ下がってレーゼはうまくそれを右手で受け止めると、

「セレーネ、まずは落ち着け、深呼吸だ。でないと怪我人が大量に出るぞ。俺も怪我なんてしたくない」

最後の部分を聞こえないように呟きながら、まるで犬を諭すように冷静に言い聞かせる。

するとその冷静さに当てられたのか、彼女は口の端を引き攣らせながらも目を閉じ、何度か深呼吸を繰り返した。

そしてしばらくして、レーゼは彼女の握りこぶしから力が抜けたことを確認すると手を引き、首をかしげて問いかけた。

「それで、相変わらず下らない文句を言い募っていたのか？」

「違うわよ。正当な権利のしゅ・ちょ・う」

セレーネはその答えとして鼻を鳴らし、そう言い捨てる。

それを聞いてレーゼは、「ああ、またか」と思った。

今までのやり取りで分かるとおり、彼女は自分の主張を無理やりにも通そうとする私の強いところがあるのだ。

それは自分の意志を曲げないという美点とも取れるわけなのだが、レーゼにしてみればただの気の強い女性だという認識しかもってい

ない。

金髪という点で同居人の少女　イリスに似ているような気もしたが、あちらとこちらでは性格が真逆だなと考え、そのくだらない思考を放棄する。

「そう言う割には物騒だが……」

そしてそれとなくレーゼは首を動かし、視線を己の背後に向け、未だに床の上で大の字にのびているメルヴィスを見やる。

即座に彼のことは記憶から手を尽くして消去しておき、なだめるように言った。

「ともかく落ち着け。今のお前にはそれが一番必要だ」

「大きなお世話よ！　それに……」

「それに？」

「……はあ、もういいわ。ここから先はあそこで寝ているのに聞きなさい」

セレーネはメルヴィスを指差し、さっさと外に出て行ってしまった。

ふむ、とレーゼは顎に手をあて、

「と、いうことだそうだ。説明しろ」

「……僕を気遣うとか、そんなことはしてくれないの？」

「生憎、男を氣遣う趣味はない」

体中の埃を払いながら半目で見てくるメルヴィスにレーゼは冷たく言葉を返す。

足をくの字に折って泣きまねを始めるが無視して再び口を開いた。

「あいつがあそこまで怒っているなんて いや、いつも怒っているか……何かあったのか？」

「うん、アルベレージ『三級探索許可書』持ちの魔術士たちが集団で仕事を取っていったね。しかも守護機兵を狩るものばかり」

その言葉でレーゼは全てを理解し、ふむ、と頷く。

『三級探索許可書』      正式名称『アルベレージ第三級複数探索許可書』とは  
ヴァルハラ《ギルド》が定めた六つある階級のうちの一つのことだ。

最強を指す『エクステス第一級単独探索許可書』。

実力者を表す『セイレス・ルド第二級単独探索許可書』。

ある程度の熟練者たちを指す『セイレス・アーク準二級単独探索許可書』。

そこそこの実力者を示す『アルベレージ第三級複数探索許可書』。

初心者から抜け出したことを指す『ソーディア第四級複数探索許可書』。

まったくの戦闘初心者を表す『フアーティス初級探索許可書』。

そのどれかを持っていればギルド所属の魔術士であるということ  
を証明でき、各都市の支部においていくつかの恩恵を受けられる。

『アルベレージ第三級複数探索許可書』の魔術士はその恩恵の一つとして、優

先的に守護機兵討伐の依頼を受けられるというものがあるのだ。

もちろん限度というものもあるが、『アルベレージ第三級複数探索許可書』同

士の魔術士が組めばそれも軽減されるということ、セレーネは手っ取り早く稼げるそれらの依頼を根こそぎ目の前で持っていかれたというわけなのだろう。

「以前は『未登録』<sup>タグ</sup>の魔術士連中が押しかけてきて、セレーネが文字通りぶっ飛ばしたとか聞いたが。毎度思うが、あいつにはおしとやかさが足りないと思う」

「それを言ったらレーゼ君だって……」

ぼそり、とメルヴィスがそう呟く。  
するとそれと耳ざとく聞いたレーゼがドスの効いた声で返した。

「な・に・か・い・っ・た・か？」

「ナンデモナイヨ！ ホントウダヨ！」

そして同時に若干の殺意をこめて睨み付けると、メルヴィスが顔を真っ青にしながら片言で叫んだ。  
誰でも、痛いものは嫌なのである。

それを見て、やれやれとため息をついて呟く。

「それじゃ、今日は俺も休みか……」

そして、「ああ、これはまずいな」とレーゼは思った。

家に帰ればまったく自己主張をしない接し辛い同居人がいて、何の義務感を持つているのかは知らないが一生懸命に家事をしてくれているのだらうと思うと、ひどく気まずいという気分させられる



のだ。

今まで家事も仕事も全てを自分でこなしてきたせいもあってかその気持ちは大きく、一週間経った今でもまともな会話一つもできていないのが現状である。

正直言って、レーゼはやけに献身的なあの少女のことが苦手であった。

ゆえに、家に帰りたくないのが今の気分なのだ。

しかし、メルヴィスはそんな彼の考えを遮るようにのん気に横に首を振り、口を開く。

「うっん、レーゼには別に探索依頼があるんだ。こっちきて」

「俺に別の？　なんだそれは」

その言葉に首をかしげながら、レーゼはメルヴィスが手招きしている玄関ホールエクスデスの隅へと歩を進めた。

「簡単さ。機兵の中核であり、知識の根源たる宝玉　レヴィオス 彩奏珠を取ってきてくれるだけでいい」

にこにこいつもの笑みを浮かべながらそう言い、「ただし」と人差し指を突き出して言葉を付け足す。

「特殊な『色』だからね。難しすぎて君にしかできないんだよ。『第一級単独探索許可書』所持者、レーゼ・クライス君？」

メルヴィスが今先ほどまでとは違う、深い笑みを浮かべる。

その瞬間、レーゼの体を凄まじく嫌な予感と悪寒が同時に通り過ぎていった。

## 第六話：軍神

### 彼女と少女が出会ったとき（前書き）

主人公よりも強い女性が登場です。

レーゼがミサイルなら、この方は核弾頭レベルでしょうか。  
強い女性って、いいよね！

## 第六話：軍神

### 彼女と少女が会ったとき

ダルムヘイツは三つの区域に分かれている。

商業区と住宅区、そしてギルド区、この三つだ。

これらを分けるなら、商業区は南東、住宅区は南西に位置しており、ギルド区はそれら統括するように北に存在している。

それもこれも、ダルムヘイツがギルドの事業で成り立っているからである。

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』は民間企業といっても、アスガルド発言力はもはや世界統一政府に匹敵するものであり、各都市には支部が必ずあるほどだ。

その上、ダルムヘイツはリストア大陸の中心部に位置している。そうなれば必然的に各地から様々な品が流れ込み、商業都市に近しいという側面も持っていた。

時刻は昼過ぎ。未だにその商業区では人々が行き交い、行商人たちが各地で仕入れた自慢の商品を売ろうと声を張り上げ、値引き交渉の叫びが反響する。

その中を、波に飲まれた木屑のようにふらふらと歩く少女が一人いた。

金髪碧眼で滑らかな青のローブをまとい、首からは矢じり型の飾りのついたネックレスをぶら下げた少女　イリス・レミナートだ。

彼女はレーゼが出かけた後、食料や生活日常品などを確認して足りないものをこの商業区へと買出しに来ていた。

だが慣れていないのと背が低いのも相まって、人波に吞まれて何度もぶつかっては謝り、再び歩き出すということを繰り返している。

そうやって歩きながら、少女は今朝のことを思い出していた。

「あんまり、話せなかったなあ……」

同居人、というより保護者である彼　レーゼといつも通りロクに会話もできずに朝食をとり、そしてただ「いつてらっしやい」の一言だけで見送った。

それが既に一週間も続けていれば、気が滅入るのも仕方がない。

「それに」

そうぼんやりと呟いて、空を見上げる。

「なんでだろう。あの人と話せないと」

胸の奥が、痛いぐらいに締め付けられる。

それは覚えている『記憶』の中でも体験したことのない、妙な感覚だ。

少女は思考する。どうして彼のことを考えると、なんでこんなに胸の奥が痛くなるのだろうか、と。

だが答えは出ない。ただ、空回りした思考がぐるぐると頭の中で

回り続けるだけである。

そう考え込んでいると、イリスはどんっ、と急に立ち止まった前の人にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい」

咄嗟に謝罪をし、再び歩き出そうとする。

だが。

「まてや、オイ」

彼女の肩に荒々しく手がかかり、頭上からなんともドスの利いた声が降り注いだ。

思わず振り返り、そして後悔。

そこには顔の半分に刺青をいれ目を血走らせてこちらを睨みつけてくる男と、その後ろに腰巾着らしき男二人が自分をニタニタとした笑みを浮かべて眺めていた。

「あ、あの」

「あーん？ てめえ、よくもぶつかってくれたなあー。おかげで俺の腕が折れちまったじゃねえかああああ！」

大音量の怒り声にイリスは「ひっ」と息をしゃくりあげ、思わず男の手を振り払って一歩下がる。

じわりと瞳が熱くなり、目の前の光景が涙で歪む。

しかし、逃がさないとばかりに男の手が伸びてきて。

「あ、アニキイ。こいつ、レーゼの野郎の所で暮らし始めたやつで  
すぜ？ 『剣聖』の女に手を出すのはやばいんじゃないんですかい  
？」

「ああーん？ 奏無<sup>うたなし</sup>しの野郎の女だとお？」

腰巾着の男の一人の言葉にいぶかしげな表情で振り返り、不愉快  
そうにそのゴツい顔を歪ませた。

そして「けっ」と脇に唾を吐きその顔をイリスに向けると、

「おいガキ、てめえ、マジで奏無<sup>うたなし</sup>しの野郎の女なのか？ ああ？」

顔を近づけてそう問い詰めてくる男に若干引きながら、イリスは  
首をかしげる。

何しろ、彼のことはさっぱり分からないのだ。

せいぜい、魔術士であり、表情をあまり表に出さず、トマトが少  
し苦手であることぐらいしか知らない。

だが、この目の前の男は色々と『知っている』ようだ、と、そう  
判断したがゆえに聞き返した。

「え、っと、その、奏無<sup>うたなし</sup>しって、レーゼさんのことですか？」

「おいおい知らねえのかよ」

彼女の疑問に男は嘲るような笑みを浮かべ、『骨折』したはずの

腕の肩をコキコキと回しながら言葉を続ける。

「あの野郎はな、まともに魔術が使えねえのさ。だから奏無し<sup>うたなし</sup>なんて呼ばれてやがる。ギルドの面汚しだぜ？」

その言葉に、後ろの腰巾着二人がゲラゲラと笑い始めた。

そんなあからさまに馬鹿にするようなその声色と笑い声にイリスは震わせていた体を止めて、ゆっくりと顔を男に向ける。

そして胸の内に湧き上がるのは、同居人が馬鹿にされたという純粹な怒りだ。

自分を救ってくれた人に対する侮辱が、彼女の胸の内の感情に火をつけたのだ。

「に、しないでください」

イリスはぽつりと、自然と出てきた言葉を口にする。  
だがその眩きが聞こえなかったのか、男は訝しげな表情で聞き返した。

「ああ？　なんだあ、ガキイ」

「馬鹿に、しないでください！」

刹那、大通りに響き渡ったのはイリスの叫びだった。

そして彼女は目には怒りの輝きを宿し、自らよりも大きいはずの



男を下から見上げるように睨みすえて言葉を続ける。

「レーゼさんは、あなたたちに馬鹿にされるような　そんな人じゃないです!」

確かに彼は　レーゼ・クライスはとても無愛想で、あまり話もしてくれなくて、トマトが苦手なのかもしれない。

だが彼は、恩人なのだ。

記憶を失い、頼るものがなかった自分に『居場所』をくれた人なのだ。

だから、と、さらに怒りを込めて、

「だから、馬鹿にしないでください。レーゼさんはあなたたちが思う以上に、凄い人なんです」

一歩も引かない姿勢で、イリスはそう言った。

その気迫に思わず男たちは後ずさり、周囲の様子を伺っていた人々も感心したような声を漏らす。

だが数秒後、男は返された言葉に怒りを感じ、顔を真っ赤に染めてイリスに腕を伸ばしてきた。

「このクソガキが、下手にでりゃ調子に乗りやがって」

ドスの籠った声にイリスは思わず後ずさりし、しかし、すぐに男を睨み付ける。

それは『負けない』と言外に表しているかのようで、その態度に

男は苛立ちを覚えると、次の瞬間いやらしい笑みを浮かべた。

「まずはこの『折れた』腕の落とし前をたっぷりしてもらわなきゃあなあ」

そう言っただけなのは、どう見ても健康にしか見えない左腕だ。

あまりにあからさまな言葉にイリスが反論しようとする。

だがそれよりも早く、男の左手がイリスの首を掴もうとして。

「ほぎゃっ!?!」

直後、視認できない速度で横合いから飛んできた何かがその男の側面を直撃し、奇妙な声を上げて横へ吹っ飛んだ。

そして後ろで控えていた腰巾着の男たちも、残像を残して飛来した何かに吹っ飛ばされる。

その光景はさながら透明な誰かに強烈な一撃を加えられたかのようで、驚きで「ざわり」と人々がざわめいた。

「あらあら、ごめんなさい。あまりに言っている事が馬鹿らしくかったから、思わず投げちゃった」

くすくす、と通り一帯に澄んだ笑い声が響き渡る。

それは凜と張った、しかし他人をからかっているようなそんな響きを持った声だ。

慌てて起き上がった男達は声がした方へと顔を向ける。  
イリスも反射的にそれに倣った。

そこに立っていたのは 右腕に買い物籠を引っさげ、左手には泥の付いたジャガイモを持ち、悠然と微笑んでいる女性だった。

真上にある太陽が彼女の陶器のように白い肌を照らし出し、薄紫の長髪に形取られた小さな顔には勝気そうな 釣りあがった群青の瞳。

整った唇に不敵な笑みを浮かべている。

イリスはその綺麗な女性をぽかんと見つめた。

すると彼女は視線に気付いたのか、にっこりと笑みを返す。それは安心感が体中に湧いてくる、そんな笑みだ。

「こんな可愛い女の子にぶつかって散々なことを言って、拳句の果てには『骨が折れた』？ うふふ、なんとも軟弱な野郎どもねえ」

そんな彼女は、とても愉快そうに だがまったく笑っていない目つきで男たちを睨み据えた。

それは背後に黒いオーラの的な何かを幻視してしまうほどの黒い笑みである。

すると男たちは顔を真っ赤にして怒声とともに立ち上がり、即座に彼女へと突っ込んでいった。

「このアマ！ 舐めんじゃねえぞおっ！」

「死んどけや！」

走る男たちの手の平に小ささまざまな色の小さな帯が円の形を取り、瞬時に消滅する。

すると、その手はまるで初めからそこにあったかのように一振りのナイフが握られていた。

（ま、魔術だ！）

イリスは内心で驚きの声を上げた。

記憶を失ってこちらで目覚めて、今という日まで魔術『らしい』魔術を見たことがなかったのだから仕方がないことなのだが、普通の人から見て、この程度で驚きの表情を見せるのは珍しいことである。

だからだろうか、ナイフを持った男たちに迫られる女性はそんなイリスの表情を見て微笑ましいものを見るような目で微笑み、

「ふふ、坊やたちは物質操作系魔術士かしら？　けど残念。そんな豆腐よりも柔な代物じゃ、私を殺せないわよ？」

ゆっくりと右手を前に突き出して、

『ターミネイト  
“強制終了”』

まるで謳<sup>うた</sup>うように告げられたたったそれ一言だけで、全員が手にしていたナイフが文字通り『崩壊』した。

ばらばら、と塵まで還元されたナイフ『だったもの』が風に乗って掻き消える。

「なあっ!？」

「あらあら、こんなことで驚いちゃった? 『世界樹』側からナイフの構成術式に割り込んで無効化しただけなのに」

セイレス・アーク マテリアルマスター

準二級の物質操作系魔術士が一年をかけてやっと会得できる技術をさも当然、といった様子でこなした女性はそう告げる。

だが男達はその言葉の意味に気づいていないのか啞然とするばかりである。それを眺めた彼女はさもおかしそうに口元に人差し指を当て、

「構成から見て、あなたたちは『ソーディア第四級』ってところかしら?」

まるで何かを確認するかのように首をかしげて男達にそう問う。

だが彼らは目の前の出来事が理解できていなかったのか未だに茫然としたままだ。

当然、イリスもそれに含まれていた。

その様子に彼女は満足したように頷き、

「このマイナ・セルタレイを殺したいのなら      アイゼンリッターを百体は持つてきなさい」

そして自信たっぷり、そう言い放った。

瞬間、男達の表情が一変した。

怒りで血が上り赤くなっていた顔が、一気に真っ青へと。

「……マイナ・セルタレイ？ ……………ま、まさか、『軍神』……？」

魔術士を志すものならば一度は聞いたことのある名前を口にし、息を呑む。

その様子にマイナは口元にかすかな笑みを浮かべ、ポキポキと指の骨を鳴らしながら言った。

「それで、骨を折っちゃった軟弱君はだあれ？ 私が徹底的に『直して』あげるわよ？」

「いえいえいえいえ『軍神』様！ あれはただの言葉の『あや』ってやつでして！ へへへ……」

男のうちの一人 イリスにichaもんをつけていた男だが慌てた表情で揉み手をしつつ、ゆっくりと距離をとる。

『軍神』はその名のとおり、存在そのものが『兵器』なのだ。

それに逆らおう者など、火薬がたっぷり詰まった部屋の中で火遊びに興じる輩レベルで存在しないだろう。

ゆえに、彼に倣うように他の二人もすり足で下がり始めていた。ちなみに当たり前だが、その顔は真っ青に染まっている。

「あらあら、そうなの？ じゃあ怪我人いないのね？ それじゃあ

「

そしてその言葉を待っていた、と言わんばかりに彼女は何も持っていない左手を振り上げ、

「とりあえず、人生やり直してきなさい」

「逃げろおおおお！」

全速力で逃げ出した男どもめがけ、いつの間にか握っていたジャガイモを全力で投球した。

「ぶべらあ！？」

「「アニキい！」」

「俺にかまうな！ 行けえ！」

マイナが投擲したジャガイモが男の一人に直撃してぶっ倒れる。だが彼は顔に闘志を浮かべて他の二人に叫んだ。

「なあに愉快的喜劇を繰り広げているのかしら？」

その上から、マイナは頭を踏んづけた。

「ぐえ」という声を無視し、汚物を見るような目で男を見下しながらぐりぐりと何度も頭部を足で踏み付け決る。

すると男は何やら幸せそうな顔で雄たけびを上げた。

「もつと！ もつと踏んでください！」

「死んでお星様になりなさい！」

刹那、彼女は残像を残す速度で足を振るった。ゴガンツ！ と人が出してはいけない音を響かせて男が宙に浮く。そしてマイナはそれめがけて全力の回し蹴りを見舞った。

「これで終わったと思うなよおおおお………」

典型的な悪役の言葉を残して空の彼方へと消えた男を見送って満足げに頷くと、彼女は今までのやり取りをぱかんとした顔で見っていたイリスの背後から近づき、首を傾げて聞いた。

「大丈夫？ 怪我はない？」

ふえ？ と可愛らしい声を上げて少女は振り向く。そこには母親のような優しい微笑を浮かべた『軍神』たる女性が、手を差し伸べていた。



## 第七話・苦悩

## 求めるものは（前書き）

魔術以外の要素、登場の回です。

もう少し詳しい説明は、次の回あたりで。

## 第七話：苦悩

### 求めるものは

「ん、イリスちゃんっていうのね？ 知っていると思うけど、私はマイナ・セルタレイ。よろしくね？」

そう言っただけで彼女はケーキを口に運び、幸せそうに目を細める。

その後、イリスを助けたこの女性は何故か『一緒に何か食べない？』と誘い、少女自身も断りきれずに気付けば広場の外れにある喫茶店のテラスに座っていたのだ。

はあ、とイリスはあいまいな返事を返し、思い出したように顔を上げる。

「あ、あの。もしかして、メルヴィスさんの……」

「ええ、そうよ。よく知っているわねえ。……あら？ もしかして貴女がメルの話していた噂の子？」

マイナは一気に言葉を紡ぐと、優雅に紅茶に口をつけた。

その一つ一つの動作が完璧に見えて、イリスは同姓なのに思わず見惚れてしまう。

「……メル？」

「私の夫、メルヴィス・セルタレイよ。長いからメルって略しているの」

可愛い呼び名でしょ？　と聞いてきたマイナにイリスは苦笑しながら頷いた。

「ふふつ、それにしても、さっきの啖呵はすごかったわね？」

「へ？」

イリスは『ぱちくり』という擬音が似合いそうなほどのまばたきをして、彼女の言葉に首をかしげる。

その小動物にも似た仕草にマイナはくすくすと笑って、

「馬鹿にしないで、って、レーゼ君のこと」

「あ、あれは、その、思わず……」

彼女の言葉でその時のことを思い出したのか、えへへへ、と恥ずかしそうにイリスが朱に染まった頬を掻いた。

実のところ、己があれほどまでに男たちに強く出れたことにイリスも驚いていたのだ。

保護者であるレーゼのことを馬鹿にされたのがよほど腹に据えかねたのかしら、と、ぼんやりとそうマイナは思考する。

「それで」

そして空気が若干和んできたところで、マイナが唐突に話を切り出した。

「イリスちゃん。貴方、何か悩んでいるでしょ？」

「ほへ？」

「やーねえ、惚けなくてもいいのよ？ お姉さんには何だってお見通しなんだからっ」

相変わらずな気の抜けた返事を返したイリスにマイナは手の平をぶんぶんと振りながら言葉を返した。

どうやら、ずいぶんとはっちゃけた性格のようだ、と、流石は『あの』メルヴィスのお嫁さんなことだけはある、と、そうイリスは彼女に対する認識を改めつつ、真剣な表情となって口を開く。

「……えっと、その、こういうこと、本当に相談してもいいのかわかりませんが」

そして、そう言葉を切り出した。

「メルヴィスの大将。なんか俺担当の書類が増えているんですが」

「ははっ、気のせいだよリユカリオ君。それは君が見た幻影さ」

ダルムヘイツの昼下がり。魔術士ギルド『ヴァルハラ』本部の最上階に存在する唯一の執務室では今現在、数多くの書類てきとの格闘が行われていた。

書類てきに立ち向かうのは『古エンシエントの到達者』ことメルヴィスと、リユカ

リオと呼ばれた青年 『第四階層情報部』 所属の魔術士、リュカリオ・ヘルゼリオスである。

茶髪金眼で、ギルド指定の青い制服に身を包んだ細身の外見を持つ青年だ。

顎にはここ数日多忙なお陰で無精ヒゲが生えており、精悍そうな顔には若干の疲労が浮かんでいる。

彼は普通の魔術士とは違う、いわゆる『特別な訓練を施された魔術士』だ。その本領は戦闘ではなく裏で動くための技術 暗部における仕事において初めて発揮される。

ゆえに、普段は情報収集や要注意対象の監視などをしていなければならぬのだが 『いつも通り』ボロボロになって倒れていたメルヴィスの横を通り過ぎていこうとした時に捕まり、無理やり書類整理をさせられているという状況に陥ってしまった。

「どーしてこうなったー！」などと頭の中の何かが叫んでいるが、ギルドマスター命令なので簡単に拒否するわけにもいかず、黙々と作業をこなしている。

（レーゼの旦那みたく、腕力で拒否するわけにもいかないからなあ）

内心ため息をつきながらそう独りごちり、リュカリオは増えたい書類一山分を押し返して口を開いた。

「……ほー。夢幻ってやつですかい。それじゃあこいつは存在しないものとして大将にお預けします。俺には荷が重いような気がするので」

「つれないねえ、リユカリオ君。そこは『ハハハハ！メルヴィス！そいつはトムさあ！』ぐらいの勢いでつつこんでくれなきゃ」

「……アンタは暗部の人間に何求めてんですかい」

彼が半眼になって聞いてみる。

すると問いかけられたメルヴィスは両腕をバツ！と振り上げ、まったくもって似合っていないポーズを決めながら言った。

「ユーモアってヤツだね！」

「そうはしゃぐのは構いませんが、外でやってくれませんか？鬱陶しいんで」

うざいなー死んでくれないかなー、などとリユカリオは物騒な祈りもとい呪詛を心の中で生産しながら、何故だかとてもなくテンションが高いメルヴィスを尻目に淡々と書類を片付ける。

この五年で、この人とどう接すればいいのか大体理解しているがゆえに出来る芸当というやつだ。

「ああもうまったく、もっと僕を構ってくれる人はいないものか……。これじゃあ仕事がかどらないじゃないか」

ギルドを預かる身として常識的にありえない言動を口にし、メルヴィスは机の上で何故かポーズを決める。

同時に彼の周囲がキラキラと光り始めた。

その様子を見て、『また』技術部の連中作っただらない装置の効果だと結論付けたリユカリオは「なに言ってるんだコイツ」といっ

た視線を向けるが、慣れた様子で視線を外し再び書類に目を落とす。

ポーズを決める青年とそれに目を向けることなく山積みになった書類を次々と処理していく青年という中々カオスな状況が出来上がった執務室だが、数分の後にそれは破られた。

「メル！ あんたの知恵とコネを貸しなさい！」

「む！ 何やつへぶお！？」

声と同時に飛び込んできた影にいち早く反応したメルヴィスだが、机の上に足をつくという不安定なポーズのまま動こうとしてそのまま床に落ちる。

そして部屋に飛び込んだものの勢い余った『誰か』は机と衝突し、何故かとんでもなく重いはずの机の方がひっくり返った。

「重いい……」

「メ、メルヴィスさんが机の下敷きにー！？」

息も絶え絶えに執務室へ足を踏み入れたイリスが目の中の惨事を見てそう叫ぶ。

そんな彼女に『誰か』ことマイナ・セルタレイは机にぶつかったのにもかかわらず、まったく痛がる様子も見せずに胸を張って口を開いた。

「大丈夫よ。仮にも私の夫なんだからこれの十倍は耐えられるわ！」

「す、すごいです！ さすがメルヴィスさん！」

「いやそこ本気にしちゃ駄目だから。あと誰か助けてくださいお願いします……」

マイナのあまりにも無茶な言葉に驚き感動しているイリスに対してメルヴィスがつっこむ。

そんな様子を部屋の隅に退避して見ていたリュカリオは最後の書類に目を通しサインをすると立ち上がり、

「では大将。俺はこれで」

「逃げる気かい！？ リュカリオ君！」

机の下でメルヴィスが悲鳴を上げる。だがその目は「テーマ逃げるのかコノヤロー」と言わんばかりに燃えていた。

だがそれを華麗に無視した彼は告げる。

「いえ、俺の分は終わったので」

後は大将の認証待ちしかありませんよ、と言い残しリュカリオは音と気配を殺してこの惨劇の場から立ち去っていった。

その光景を見てメルヴィスは押し潰された状態で器用にガクリと肩を落とす。

「部下に見捨てられたよへへ……。減給してやるっかなあ」

「馬鹿なこと言っていないで手伝いなさい、メル」

豪快に私怨全開な青年の呟きを無視してマイナは片腕一つで机を持ち上げ定位に戻して命令するように言う。

するとメルヴィスはゆっくりと立ち上がり、体中の骨をぽきぽき



と鳴らしながら聞き返した。

「……えーっと、それで僕は何をすればいいのかな？ マイナ」

「うふふ、流石は私の夫。聞き分けがよくて助かるわ」

「いやあ、マイナって一度言い出したら止まらないからねえ」

それだっ たら何も言わずに従ったほうが楽なんだよねー、と達観した表情で白髪青年は付け足す。

そんな彼の表情にイリスは「そ、そうなんですか……」と何かを悟ったかのように呟いた。

「……さて、僕は何をすればいいんだい？」

重い机をマイナが片手で直し、それに座りなおしたメルヴィスは表情を引き締め、改めて聞いた。だが服装は先ほどの転倒で乱れに乱れ、まったくといって良いほどに威厳が見当たらない。

そんな彼にマイナはふふん、と勝気に微笑むと、

「イリスちゃんのね、『コード特化能力』を開眼させてあげてほしいの」

「……えー？」

その言葉に半眼になったメルヴィスが疑問の声を上げる。

そして彼女の隣に座っているイリスに顔を向けて問うた。

「イリスちゃんは構わないのかい？」

「えつと……」

その問いかけに少女は首を傾げて少し逡巡し、

「特化能力<sup>コア</sup>って何ですか？」

メルヴィスはズドン！ と大きな音を立てて机の上に頭を打ちつけた。

「マイナ！ もしかしてだけど！ ぜんっぜん！ 説明してないよね！？」

勢い良く起き上がって聞いてきた己の夫に、マイナは顎に手を当てて「ええ」と頷き、

「この子が『力が欲しいんです』って言い始めちゃったから、ついノリで」

「その後、いきなりマイナさん『欲しいならくれてやる！』って叫んで、ここまでおぶられて連れて来られたんです」

すごい早さでしたー、などとイリスその時の感想をのほほんと呟いていた。

そんな二人をメルヴィスは呆れた様子で眺め、ため息と共に口を

開く。

「まったく……。それじゃアイリスちゃん、とりあえず特化能力<sup>コード</sup>について説明するね？」

そう言つと少女は頷き、ギルドマスターの青年は眼鏡をかけて机の下から黒板を取り出して壁に引っ掛けると、懷からチョークを引き抜いて指先でつまむように持った。

「毎度思つんだけど……。メル、貴方どこからそんなものを取り出してるの？」

「フッフ、企業秘密だよ」

マイナの素朴な疑問の声に怪しい笑い声で答え、メルヴィスは黒板に向き直った。

「さて、まずは“特化能力<sup>コード</sup>とは何か”について話すよ？」

カッカツ、と黒板に小さな丸を描き、その周りに炎のようなものを纏わせると言葉を続けた。

「特化能力を簡単に言い表すなら、『最も強い欲望を物質化する』能力<sup>チカラ</sup>つてところだね。

『最も強い欲望』つてのは、その人の魂<sup>ソウル</sup>が心の底 魂の深遠<sup>そこ</sup>から無意識の内に望んでいるものつて言つたほうが良いのかな？」

焰を纏つた円に矢印をつけ『魂』と書き込み、横にデフォルメされた人の絵を描く。

「例えば、その人が魂の底から『あらゆる物質を切り裂きたい』と願っていたとする。もちろん、この願いは無意識だ。普段からそんなことを考えていたらただの変態だからねえ。」

で、この『最も強い欲望』を特化能力<sup>コード</sup>として現実世界へと物質化させると、生み出されたそれ 例として、剣の形をしていたとしたら は『剣形状の切断特化能力』というものになるんだ」

その説明にイリスはほへー、と気の抜けた返事を返した。  
だが、あれ？ と首を傾げて、

「欲望を物質化するって……。できるんですか？ そんなこと」

「これが出来るんだよ。はるか昔の人たちが使っていた魔術の力を宿した道具 『アーティファクト』を使わなきゃ無理だけどね」

そう少女の疑問にメルヴィスは答えながら、だけど、と言葉を続けた。

「特化能力<sup>コード</sup>を開花させるには使うアーティファクトの性質上、心の内の全てを晒す必要がある。つまり、自らの醜い部分さえも相手に見せることになってしまふんだ。それでも……」

君はこの能力<sup>チカラ</sup>を望むかい？

ただ、静かにメルヴィス・セルタレイは問いかける。

投げかけられたその言葉に、イリスはただゆっくりと。

## 第八話：追文

### 遺跡の奥底で

『魔奏都市』ダルムヘイツより南東部　大陸横断列車に乗って  
四時間少々のところにその都市は存在する。

見渡す限りの白亜、と表現すればいいだろうか。少なくとも正反對の色である黒は存在せず、他の色もあまり見当たらない。

ありとあらゆる建物が白く塗装されており、そのいくつもの建造物の天辺には青い十字が見えた。

その光景やこの都市自体の『役割』にちなんで『白癒都市』イザークという名称を持っている。

そんな白い都市の中を、レーゼはギルド支部へ向けて歩いていた。

彼の周囲では人々がせわしなく行き交い、その大半が白衣に身を包んでいる。

彼らはいわゆる『医術士』と呼ばれる存在だ。

胸に吊り下げられたプレートを見るだけでも内科・外科・耳鼻科・皮膚科・産婦人科など、驚くほど多種多様な医術士が近くのカフェテラスでは意見を交わしている。

さらにある者はガラスケースにべったりと張り付いて、中に飾られている最新鋭の医療器具を物欲しそうに眺めていたり、こけて怪我をした少年をその場で治療したりしていた。

この都市の役割は周囲を見れば分かるように、たった一つのことである。

それは、医術の発展だ。

魔術では個人の体の奥深くまで『治療』することが出来ない。出来るのは皮膚表面と少しだけだ。

その上、『世界樹』<sup>ユグドラシル</sup>側から見た人体構成情報は異常といっているほどの密度で構成されており、手出しができなくなっているほどなのである。

そのため、本格的な怪我や病気の治療のためには外科技術や内科技術を発展させる必要があった。

その考えの下、生まれたのがこのイザークというわけである。医術士を志すものならば絶対に来なくてはならないと言われているほどだ。

事実、ここは登竜門のような存在である。

「はあ」

レーゼは町の中を歩きながらため息をついた。今朝のことを思い出したからだ。

「まったく、俺という奴は……」

そう呟き、空を見上げる。

思い出すのは、朝の出来事。

起きれば同居人である少女が食事を用意して待つており、自分はそれを食べて軽く言葉を交わして家を出たというなんとも冷たいやり取りだ。

「……うん、最悪だな」

朝の自分の態度を整理して、そう呟く。  
保護者として、あのような態度はいかななものか、と。

（だがなあ）

あの少女の顔を見ると、なぜか言葉が霧散するのだ。  
育った場所のお陰で子供と接するのには慣れているつもりである。  
だが、向き合おうとすると、心のどこかでそれを拒絶しようとして  
しまう。

「……度し難い、な」

冷静に己の心情を分析し、そう結論付けると歩みを速める。

そして数分後、たどり着いたそこには巨大な建物がとてつもない  
存在感をかし出しながら鎮座していた。

地上三階建てのその巨大な建物の外壁は都市と同様に純白に染め  
上げられており、太陽の光が反射して眩しく見えてしまうほどであ  
る。

「いつ見ても、白いな……」

何かを確認するかのようにそれを見上げ、一言。

落書きでもしてやろうかと思うこともあるが、この都市の『主』  
に文句を言われるのは嫌なのでやめておく。

『都市の主』

いや、ギルドマスターがこの都市にはいる。

流石にメルヴィスほどにぶっ飛んだ性格はしていないが。

(十分、おかしいと思うがな)

そう思いつつ、両開きで木製の古びたギルド正面入り口の両扉を押し開く。

「ぬっ?」

唐突な声に思考から意識を上げると　そこには肉の壁があつた。

「うおわっ!?!」

思わず悲鳴に近い声を上げたレーゼは慌ててあとずさる。

そこには筋肉の塊　もとい、巨大な筋肉男が立っていた。

鋭い、というか睨んだだけで人を射殺せそうなほどに凶悪な面構えの男である。頭はつるりと禿げ上がったスキンヘッドで、なぜか上半身は裸のままだ。

そして極めつけに、まるで自分の肉体を自慢するかのようなポーズをとっている。

傍から見たら変態　いや、確実に変質者だ。

少なくとも、胸板の盛り上がった筋肉をピクピクと動かしながらポーズを決めているこの男を見て『紳士』だとか思う輩はいないだろう。

だが近くを歩いていたものはそれを見ても「あー、またか」といった表情で通り過ぎていくだけだ。



セルセロス・ハルガー。それがこの男の名前である。

そしてこの男こそがギルドマスターの一人、『ジェントルマン 破碎紳士』の二つ名を冠する男であった。

「……何をしているんだ？ セルセロス」

ギルド支部の入り口扉真正面で腕の筋肉を誇るポーズをとっているギルドマスターにレーゼが思わず問いかける。

「うむ。実は近日『マッスル 筋肉自慢コンテスト』があるらしくてな。それの調整だ」

低い声でセルセロスが言い、同時に今度は胸板を強調するかのようなポーズを取った。

筋肉が盛り上がり、なんとも形容し難い光景がそこに広がる。

見ての通り、セルセロス・ハルガーはつまるところ、こんな性格をしていた。

普段はまさに『紳士』といった言動や行動をしているのだが、筋肉のことになると性格が変わる。

簡単に言えば、『自分の世界』に入ってしまうのだ。それも、いくら周りが呼びかけても答えないほど真剣に。

街の通りの中央でそれが始まった時は、既に災害といつていいほどの被害を巻き起こしたぐらいだ。

やがて災害という名のポーズに飽きてきたのか、セルセロスは上着をさつと着込むと、

「それで、今日は何をしにきたのだ？」

「仕事だ、仕事」

問うてきたセルセロスに、レーゼは投げやりに言葉を返した。

「ふむ……。むう、あれか。メルヴィスから先ほど聞いたぞ」

納得したように大男は頷き、中へと入るように視線で促す。

言われるまでもなく、さっさと足を動かしてギルド支部のロビーへと入った。

中はギルド本部と比べ物にならないぐらいにこじんまりとした空間だ。

小さな長机には二人の受付嬢が眠たそうに半眼で舟を漕いでおり、なんとも平和そうな光景が見える。

「……相変わらず、繁盛してないな。ここだけは」

「仕方があるまい。ここらは遺跡も少なく、平和そのものだからな」

だが、平和はいいことだ、とセルセロスは満足そうに頷き、上着のポケットから丁寧に折りたたまれた紙を一枚取り出した。

仕事の内容が書かれた紙なのか、セルセロスはこつい手をこれまたこつい顎に当てながら唸る。

「ふーむ、『<sup>セカンド</sup>追文』の注文か。確かに、この近くの遺跡　アルテム遺跡でそれを持った機兵を見た、という報告はあったが……調査では見つからなかったぞ？」

『セカンド追文』とは、簡単に言ってしまうえば通常の彩奏珠レウィオスの上位互換である。

世界の根幹たる『ユグドラシル世界樹』への接続権限はもちろんのこと、守護機兵が装着すれば知能も桁違いに跳ね上がる。

だからこそ、普通の魔術士はこれを持った守護機兵に戦いは挑まない。リスクがあまりにも大きすぎるからだ。

そもそも、『第三級』の魔術士が百人束になってやっと対等に戦える化け物に戦いを挑む馬鹿など、この世界ではほんの一握りしかない。

その馬鹿の一人が『第一級』の力を持つ魔術士、レーゼ・クライスその本人なわけなのだが、本人は大して気にした様子もなく、

「分かっているさ。それに、見つからなかったら見つからなかったで、別の遺跡を探す」

ここが発見報告の中でも一番近いから来たんだよ、と付け足す。すると巨漢なギルドマスターは納得したように唸り、言った。

「あい分かった。では遺跡探索許可印だ。好きなだけ暴れてくるがいい」

「暴れたらマズイだろうに。というより、ギルドマスターのお前が言うなよ」

呆れた様子でレーゼが呟くと、差し出された書類を受け取り、中身を確認する。

それら全てが遺跡の内部構造や存在する機兵の種類と数などが書

き込まれた重要書類だ。

それを斜め読みして、数値がいくつか増えていることに気付いてレーゼは声を上げる。

「……ずいぶんと、増えているな」

「うむ。まったく、どこから湧いて出てきているのやら。困ったものだ」

彼らが言っているのは守護機兵の数だ。

最近計ったものらしく、過去のデータと見比べても不自然と言っているほど増えている。

レーゼはやりきれない様子で言った。

「最近の説では『パレード』から魔術的に転送されている、というのが主流らしいが」

「その『パレード』も、製造ラインは全て潰されているのに各地には機兵が増え続けているのだがな。十中八九、発見されていない製造ラインがあるのだろう」

「だろうな……。さて、俺は行くぞ」

資料に載っていた全ての内容を頭に収めたレーゼはそれを差し出すように返す。

「『<sup>セカンド</sup>追文』など、せいぜい世界政府の天候予測演算装置ぐらいにしか使わんのになあ。一体どこからの依頼やら」

やれやれ、といった表情でセルセロスが首を振り、返された資料を懷にしまいながら、

「ともかく、気を付けるがいい。お主は一応『<sup>エクス</sup>第一級』だが、『<sup>セカ</sup>追文』は強いからな」

「ああ。死なない程度にやるさ。さすがに俺だって命ぐらいは惜しい」

冗談半分で言葉を返し、青年は歩き出す。

「武運を祈る」

そんな低い声を背に、支部を出た。  
ふと思い立って、空を見上げる。

そこには、眩しいほどの蒼天だけが広がっていた。

ばさり、と何かが舞う音がヴァルハラ本部の執務室の中で響いた。

「……これは、驚いたね」

「とても綺麗……」

『それ』を見て、メルヴィスとマイナは驚嘆の声を吐く。

少女は己の背にある『もの』を驚いた様子で眺め、

「これが、私の特化能力……ですか？」

「うん。そうだよ。まさか、初めから能力に目覚めていたとは思わなかったけどね」

驚きの感情から抜け出したメルヴィスはそう答え、呟くように言葉を付け足す。

何故、こうなったのを説明するには、数十分ほど時間を遡らなければならない。

メルヴィスが特化能力に目覚めさせるための『アーティファクト』  
『リバースソウル顕現心器』をギルドマスター権限で普段納めている場所から持ち出し、決意を固めたイリスに使ったのが二十分前。

そしてその五分後、結果として出たのは『能力：既に有り』の1文だけ。

それを疑問に思ったメルヴィスは試しに顕現心器のもう一つの力を発動させ。

「良い言葉だったねえ」

少女が『それ』を背に生やす要因となった言葉を思い出し、うんと納得したように頷く。

それを聞いた少女は首をかしげ、自らの特化能力コードを興味津々といった様子で動かしながら聞いた。

「ええと、契約解放文……でしたっけ？」

その言葉にメルヴィスは全長三十cmほどの薄く黒い長方形の物体　アーティファクト『リバースソウル顕現心器』をばしと叩きながら答えた。

「コード特化能力を顕現化させるための詠唱だね。いやあ、顕現心器に解放文が分かる機能があってよかったよ」

その言葉にイリスは苦笑しながら頷く。そしてもう一度翼を動かし、

「これで、レーゼさんの役に立つ事ができるんですね」

そう、感慨深く呟いた。

それを聞いたメルヴィスは首をかしげ、問いかけを投げかけた。

「……そういえば、なんでイリスちゃんはそこまでしてレーゼ君にこだわるんだい？」

「私はあの人の役に立ちたいんです」

私を助けてくれた人ですから、と愁いの表情で少女が言葉を返す。そして「それに」と言い、

「何故かは分からないけど、あの人はもしかしたら　」

私の知っている人なんじゃないかと、思っんです。

そう口にしかけて、

「え？」

突如として、目の前の光景が変わった。

それは漆黒の空間。何も見えない、闇に包まれた場所だ。

いや、違う。イリスは瞬時にそう悟った。

元は明るい場所だったであろうそこは、何か巨大な影が光を遮っているためだ、と。

なんでそんなものが見えるのだろうか、と混乱する。

そこで、視界が再び切り替わった。

あ、とイリスはそれを見て声を上げる。

なぜなら、彼女の視界の目の前には 周囲の光を遮るほどの巨大な何かを目の前に、額から血を流しながら膝を付き、今にも倒れそうなレーゼ・クライスの姿が見えたからだ。

それを理解したその次の瞬間、これまた唐突に視界が元に戻る。

驚きの連続で息を詰まらせていた少女はそれに目をぱちくりとさせて頭を振った。

そして不思議そうにこちらを見ているメルヴィスとマイナを視界に納めると、

「ごめんなさい！ 行くところが、出来ました！」



そう謝りながら叫ぶや否や、窓を押し開いて、

「え、あ、ちょ　！」

「えーい！」

メルヴィスの制止の声も振り切って少女は気合の声を上げると共に、特化能力<sup>コード</sup>を動かして蒼い虚空へと飛び立っていった。

ばさり、ばさりと瞬く間に虚空の彼方へと飛んでいった少女を呆然とした表情で見送った二人は窓の外を眺める。

そしてメルヴィスが額に手を当て、言った。

「……まさか、本当に飛んで行っちゃうとはねえ」

「確かに特化能力<sup>コード</sup>は特化しているものとは別に、その形の役割を再現するけど……」

マイナも呆れた様子でため息を付き、そう口にする。

彼女の言う通り、特化能力<sup>コード</sup>は長剣ならば長剣としての機能を果たしつつ能力を体现する。

つまり長剣の持つ『斬る』や『相手の攻撃を受け止める』という機能を保ったまま、力を使えるのだ。

だが能力に特化しすぎるが故に、必要最低限の機能以外の事例えば長剣のそれを『投擲』などしてしまえば、特化能力<sup>コード</sup>自体が消滅し、使用者には精神的なダメージがフィードバックされてしまう

というデメリットが存在する。

（イリスちゃんのは　だから……。飛ぶことも可能ってわけだね）

そこまで考えて、メルヴィスは疑問の声を上げた。

「そういえば、イリスちゃんはどこに向かったんだろっねえ」

「……あの方向は」

彼の言葉に、マイナが思い出したように呟く。

「メル。私も行くところが出来たわ」

「へ？」

そして鋭く眼を細め、

「あの子が向かったのは　」

少女が向かった先に視線を向けて、ただ一言、言葉を続けた。

「　多分、レーゼ君のところよ」

## 第九話：対峙

### 単眼の巨神

その遺跡は、イザークよりさらに南に二時間ほど歩いた先にある草原の上、林の近くに存在する。

九十年前より始まった『遺跡災害』の最初期に『出土』したその遺跡は、今もなお長大な門を地上に晒しており、周囲には破壊されて風化した守護機兵ゴレムの残骸が散らばっていた。

遺跡の『門』<sup>ゲート</sup> その外見としては、円を四分の一に分割したかのような僅かな湾曲の分厚い壁である。

元は純白であったであろうそれはあらゆる場所が土で汚れており、あちこちにはひび割れや欠損があった。まるで古代都市の城壁の一部のようだ。

そしてその下部の真ん中辺りには、標準的な大人が五人横に並んで入れそうなほど大きさを持つ正方形の入り口がぽっかりと開いており、まるで中へと誘っているようにも思えた。

今その内部で、何かが争うような音が響いていた。

轟、と遺跡内部特有のよどんで停滞した空気を引き裂きながら、鋭い槍の切っ先がレーゼの顔に迫る。

それをレーゼは身を捻って回避すると、深い溝が刻まれた長剣をその腕の下に滑り込ませ、瞬時に掬い上げた。

「は……あぁっ！」

裂ぱくの声と共に澄んだ音が響き、固い装甲を誇るはずの腕は滑らかな切断面を見せ、中から火花と色とりどりのコードと歯車を臓腑がぶちまけられるように地面へと落ちる。

すると槍を持っていた守護機兵は、己の武器を腕ごと失って動揺したのか明らかに動きを鈍くした。

その隙を見逃すレーゼでもなく、そのまま旋廻するように体を捻りその手の剣を加速させ、守護機兵の胴を横一文字に叩き斬る。

昔の冒険活劇に出てくるような甲冑に身を包んだ守護機兵『ランサー騎槍兵』は制御系が上半身にあつたのか、残った下半身はひざを付くようにしてその動きを停止させた。

それを一瞥し、油断なく辺りを見渡す。  
そしてこれが最後の相手と言う事を確認し、ゆるゆると息を吐きながら長剣を鞘に収めた。

彼の周りには、合計十体の『ランサー騎槍兵』が同じように胴体や頭部などを切断され、転がっていた。

「……いかな。少し油断したか」

レーゼはそう呟き、額の汗をぬぐう。

始めは、ここまで派手に戦う気はなかった。  
元々、この遺跡に来た目的は『セカンド追文』の彩奏珠を手に入れるためだ。

各地で定期的に行われる守護機兵掃討作戦のように、遺跡内部の守護機兵が全滅するまで戦っていたら数日は掛かるだろう。

ゆえに、巡回している守護機兵<sup>ゴーレム</sup>をうまくやり過<sup>ランサー</sup>ぎしながら進んでいたのだが、遺跡を六割ほど踏破したところで騎槍兵<sup>ランサー</sup>の集団とばつたり出くわしてしまったのだ。

そこからは崩しに戦闘に入り、そして今先ほどようやく十体の騎槍兵<sup>ランサー</sup>を倒しきったのである。

「集中力が切れているな。これが師匠にばれたら、色々と大変なことに……」

過去の仕打ちを思い出しかすかに顔を青くしながら、レーゼは頭を振ってその悪夢を追いつけ、再び歩き出す。

戦闘の音を聞きつけた他の守護機兵<sup>ゴーレム</sup>がいつ来るのかは分からないので、早くそこから離れることに越したことはないのだ、とどこか言い訳をしながら。

そして数十分後、戦闘した場所から十分に離れたと判断したレーゼは頭の中に叩き込んできた資料の内容を今一度思い出す。

この遺跡の守護機兵<sup>ゴーレム</sup>の構成は騎槍兵<sup>ランサー</sup>と魔術士型<sup>キャスター</sup>のみとなっており、比較的大陸の中心に近いのにもかかわらず守りにおいて他の遺跡とあまり変わらない。

だからこそ、あまり戦闘に向かない『医術士』たちが集う『白癒都市』という大都市を近くに立てることができたのだ。

「それにしても、本当にここに『追文<sup>マカンド</sup>』持ちの守護機兵<sup>ゴーレム</sup>はいるのか？」

レーゼはぼやく様に呟いた。

『セカンド追文』はレヴィオス彩奏珠の上位互換である。

そのせいか希少であり、それを装着しているゴレム守護機兵は珍しいいわばレアな存在となっている。

今回のこの依頼とて、ここの遺跡で『見かけた』という未確定情報のみなのにどこからともなく『入手依頼』が届くほどだといえ、その希少性が分かりやすいだろう。

無論、ここの遺跡で見つけられなかったらここ周辺一体を探索しでも見つけ出さなければならぬだろう、とレーゼは思考する。

ギルドは信頼が第一なのだ。そう簡単に「見つかりませんでした」では済まされないのである。

「……我ながら、厄介なものを引き受けてしまったな」

その依頼を引き受ける原因を作った己のメルヴィス上司のことを思い出し、眉間に寄った皺を揉み解した。

そして二時間後、無難に守護機兵たちをやり過ごしながらレーゼが辿り着いたのは、お椀をひっくり返したような形をしているドーム状の大広間だった。

天井に走る幾重もの継ぎ目と汚れ具合、隅にうず高く積もった埃が来訪者がいないことを表している。

「確か、ここは大広間だったな……」

この二時間で『セカンド追文』のレヴィオス彩奏珠を見つけられたかったことから、

若干の苛立ちを浮かべたレーゼは地図を脳内で展開しながら呟く。

その時だった。ズンツ、と床が空間ごと揺れたのは。

腹の底に響くような音が鳴り、ぐらりとレーゼの体が傾ぐ。

「くっ!？」

慌てて踏ん張り、何とか体勢を立て直し、

「何が  
」

何が起こった。そう言いかけて、直後に言葉を失った。  
大広間の中心部。その地面が、盛り上がっていたのだ。

そう、まるで何かが姿を現そうとしているかのように。

そして次の瞬間、足を掬うような大轟音がレーゼを襲った。  
思わず耳を塞ぎ、出口近くまで跳び退く。

前を見れば、盛り上がっていたはずの地面には大穴が開いており、  
それを覆い隠さんばかりの巨大な『何か』が立っているのがレーゼ  
の瞳に映る。

長剣の柄に手を伸ばしながら、レーゼは『それ』を見上げた。

『それ』は守護機兵だった。

ただし、全てが三倍増しの、ではあるが。

見上げんばかりの巨体は鋼色ではなく艶のある漆黒で、ナイト騎士型の鎧兜にも似た頭部には角のようなものが装飾されている。

両手には刃の分厚い剣が二振り。

バスタード・ソードと称されているそれには血らしき赤錆がこびりつき、今まで殺した数を物語っている。

そしてその顔のご真ん中には、濃青色の宝玉がきらりと光っていた。

「なぜ『ギガース単眼巨神型』が……！？」

そのレーゼの驚愕の声に答えるように、ギガース単眼巨神型と呼ばれた守護機兵は緩慢な動きでバスタード・ソードを掲げ 無造作に振り下ろした。

レーゼは咄嗟に横へ跳び、回避する。

目標を失って地面に直撃した刃 というより、もはや鈍器だ  
は、土砂を跳ね上げて再びその姿を晒した。

『侵入者を発見。直ちに排除します』

ギガース単眼巨神型のみが持つ特性、『音の操作』によって放たれたノイズ混じりの無機質な声がレーゼの耳朵を打つ。

「こいついう相手は、苦手なんだがな……！」

苦々しい表情で青年は呟く。



レーゼは魔術士でありながら魔術が扱えない。

いや、その表現は正しくないだろう。

正しくは、たった『二つだけ』の魔術が使える。

そのうちの一つが魔術の初歩中の初歩である、魔力<sup>マナ</sup>を用いた『身体能力<sup>クイックフースト</sup>の瞬間強化』と、なかなか微妙なものなのだが。

『身体能力<sup>クイックフースト</sup>の瞬間強化』。この魔術はその名のとおり瞬間的に強化するものであって、永続的に脚力や腕力を強化するわけではない。

だからこそ、レーゼはこの手の巨大な敵は苦手であった。

それは単純に、攻撃が通りづらいという理由のためだ。

何せ相手は巨大で、なおかつ分厚い装甲を持っているのである。

魔力<sup>マナ</sup>を刃に被せることによって切れ味を強化させているとはいえ、敵の装甲や動力を貫けなければ意味が無い。

だがしかし、レーゼが巨大な敵をもっとも苦手とする最大の理由は。  
。

「ぐっ!?!」

薙ぎ払われるように迫るのは鈍色の刃。

それは単眼巨神型<sup>ギガス</sup>が左手に握った剣から繰り出された一撃だ。

レーゼは苦しそうな声を上げながら『身体能力<sup>クイックフースト</sup>の瞬間強化』を使い、脚力を瞬間的に強化。

そして背後に跳ぶことで、地面スレスレで迫る『死』から回避する。

目の前を巨大な刃が横切り、それから生まれた突風が彼の肌を這い回る蛇ように撫でていく。

「まったくもって、この攻撃範囲は嫌になるな……！」

ぜい、と息を少し切らしながらレーザーは長剣を構えた。

そのあまりの攻撃範囲ゆえに『クイックフースト身体能力の瞬間強化』を用いた回避がとても難しい、というものだった。

ゆえに、彼にとってこの現状はとても好ましくないものであった。

普段単眼巨神型や巨人型を狩る時は、アシレイなどといった遠距離からの援護ができる魔術士と共に行動していたのだからなおさらである。

しかし。

「やるしかない、か」

彼は己の焦りをくだらない物のように吐き捨て、苦笑を浮かべた。

レーザーにも『エクスデス第一級単独探索許可書所有者』としての自負があり、矜持がある。

そして何より、家で待っていてくれるはずの少女のためにも、負けるわけにはいかなかった。

レーゼは目の前の単眼巨神型がゆっくりと動き出したのを確認しながら、思考する。

あの子は孤独だ、と。

正体不明の結晶に閉じ込められ、目を覚ませば記憶を失っており、自分が何者かさえも思い出せない。全てを失ってしまうという『絶望感』を、レーゼは誰よりも知っていた。だからこそ、彼女を本当の意味で『一人』にはできない。

自ら避けている自分がそう思うのもなんだが、と、内心でそう呟くと、レーゼは思考を切り替えた。

目つきが一瞬で鋭くなり、感覚が研ぎ澄まされてゆく。

脳裏によぎるのは、今までの守護機兵ゴレムとの戦いの記憶。そして培ってきた技術の全て。

その中から使える動きや作戦のみを選択し、確実に『勝てる』レベルにまで戦術を組み上げてゆく。

かかった時間はたったの一秒。それは『身体能力の瞬間強化』とは異なる、十年にも及ぶ自己鍛錬によって会得したものだ。

「さて  
」

やがて、青年は涼しい顔で告げる。

今もなお、『侵入者』を叩き潰さんために両手の刃を振り上げて

いる巨大な守護機兵<sup>ゴレム</sup>に向かって。

「 往<sup>ゆ</sup>くぞ」

そして次の瞬間、地を蹴った。

## 第十話：切札

### 目覚める剣

戦いは、レーゼが想定していたものよりも順調であった。

ギガース  
単眼巨神型が縦に片方の剣を振るえば、脚部に『クイックフー  
強化』をかけて横に跳ぶことでそれを回避し、目標を失って床に突  
き立った刃を足場にして装甲へと到達し、長剣を振るって硬い表面  
を削る。

あわよくば、サイドアーム副兵装である魔力銃で頭部の彩奏珠を狙い撃ち、一  
撃必殺を狙う。

いわゆる典型的な一撃離脱戦法だ。  
ヒットアンドアウェイ

だがその単純さゆえに、この手の守護機兵には絶大な効果を発揮  
する。  
ゴレム

確かに守護機兵は『魔術士』と戦えるほどの知能を持っている。  
しかし逆に言えば、それだけなのだ。

魔術士とは一般的に、森羅万象を操るものたちのことを指す。  
ゴレム巨大な守護機兵はそれを軽々と防ぐほどの防御力を持つ、いわば  
『盾』の役割に近い局地戦用の存在だ。

確かにレーゼは魔術士ではあるが、森羅万象を操れるわけではな  
い。むしろ『身体能力の瞬間強化』と経験と知識を生かして戦うと  
ころから、『戦士』ウォーリアに近い。  
ギガースだからこそ、単眼巨神型の『盾』としての役割は、レーゼにとっ  
てただの『壁』でしかなかった。

『壁』は分厚い。だが決して壊れないわけではない。

レーゼは深い溝の刻まれた剣を振るう。その『壁』を切り崩すために。

「はあっ！」

裂ばくの声と同時に、本日三十度目の斬撃が単眼巨神型ギガースの装甲を切り刻む。

それと同時に、まるで切り分けられたホールケーキのように装甲の一部が剥がれ落ちた。

ガラガラと、瓦礫のごとく地面へと叩きつけられた元・装甲が粉碎される。

その音を真下に聞きながら、レーゼは出現したときよりもでこばこになった表面装甲を足場に、脚部の『身体能力の瞬間強化』クイックブーストを重ねがけしてからさらに跳ぶ。

目指す場所は頭部。ユグドラシル 世界樹から守護機兵に知性と知識を提供する知能ユニット レヴィオス 彩奏珠。

「見えた……！」

やがてレーゼの瞳に濃青色の宝玉が写った。思わず眩き、長剣を握む手に力が入る。

しかし、あと数秒で到達するといったところで、唐突に声が響いた。

『危険感知。緊急作動機構システム、発動します』

それは単眼巨神型の彩奏珠<sup>ギカース</sup>から放たれたもの。  
そしてその声が意味するものは。

「　　がつ！？」

理解するよりも早く、レーゼの頭が弾けた。  
いや、弾けたとそう勘違いするほどの痛みが、レーゼの頭を襲ったのだ。

まるで脳を針でめつた刺されるような鋭い頭痛が断続的に起こり、  
視界に無数の靄がかかる。

『ケイおティック・のイズ、発射二成功』

何だこれは、と、考える暇もなく、狂いそうなほどの痛みが脳み  
そをかき回す。

言っていることがよく分からない。体が言う事を利かない。目が  
回る。吐き気がする。おかしくなる。自分の頭の中の『何か』がお  
かしくなる。おかしくなるおかしくなるオかしクなるオカシクナル  
！

『迎撃成功。続いテ、対象の殲滅ニ移リマス』

かひゆ、と擦れた吐息がレーゼの耳朵を打った。  
それを聞いて、彼は思考する。

いつたい誰のものだ、と。

そう思考してから、ようやくレーゼは『理解』した。今は、己の発したものである、と。

『理解』してしまえば後は簡単であった。いつの間にかぼやけていた視界はようやく元に戻り始め、そこで己の体が倒れている事に気付く。

どうやら彩奏珠<sup>レウイオス</sup>に到達間近で落ちてしまったらしい、と状況を整理しながら、未だ鈍痛が響く頭部を押さえてのろのろと立ち上がった。

直後、頭上から風切り音。

それは空気を引きちぎるものに近い異音だ。

その音が聞こえた瞬間、レーゼは頭が動くよりも早く体が回避の動作へと入っていた。

「ぐっ！」

落下時のダメージが残っているためか、無意識のうちの回避行動に全身の骨がぎしぎしと軋む。

しかしそれを無理やり無視して、レーゼの肢体は左方向へと全力で跳んだ。

瞬間、轟音。

遺跡全体を揺るがすほどの衝撃と音が、それなりに大きいこの広場に響き渡ったのだ。



そしてそれは、レーゼを狙った単眼巨神型ギガースの剣が床に叩きつけられたせいである。

「そうそう休ませてはくれんか……！」

うめき声を上げながら、レーゼは傍から拾い上げた長剣を構える。その鋭い瞳は次の攻撃に移らんとしている単眼巨神型ギガースへと向けられていた。

「しかし、さっきの攻撃は一体　　ッ!？」

どう対処すべきか、と青年は鈍痛の残る頭をフル回転させようとするが即座に口をつぐんだ。

単眼巨神型の彩奏珠から声レヴィオスが響いたからだ。

『けイオてイック・ノイズ、再度発射開始』

「　　、があ……！」

頭の中がかき回されたような激痛が、再びレーゼを襲う。

しかもそれは先ほどのものよりも強烈で、一瞬にしてレーゼの意識を混濁させるのには十分なものだった。

ぐらり、と青年の体が揺れる。その様子から、もはや意識はないも同然である。

だが倒れようとした寸前に、レーゼの腕が動いた。

動いたのは、右腕。ずっと昔から共にあった、柄元から切っ先にかけて深い溝の入った愛剣を握った腕だ。

ガシュッ！ と、硬質な音が響く。  
それは長剣の刃を石造りの床へと突き立たせた音。

その音に、ギガース単眼巨神型はレヴィオス彩奏珠の機能の一つである視覚を動かし、音源へと向けた。

そこには、体をぐらつかせながらも立ち続けている　ただ一人の男がいた。

レーゼは消えかかっていた意識をどうにか取り戻していた。

一度食らったものである。『来る』と分かれば、簡単な魔力による防御ぐらいは思いつく。それがレーゼという男であった。

だからこそ白濁した思考の中でも、レーゼは『考える』。  
自らを襲った敵の攻撃とは何か、と。

ギガース単眼巨神型はそれを『ケイオティック・ノイズ』と呼んでいた。  
ノイズとは雑音のことだ。それぐらいは分かる。

だが、たかが雑音で『ここまで』の威力を出せるわけがない。音を操る『セイレス・アーク準二級魔術士』の知り合いなら一人かいるが、そんな彼で

もこれほどの一撃を訓練で放ったことはなかった。

そもそもダメージの方向性が違いすぎるのだ。

『肉体表面』ではなく『頭の中』のみに絞った一撃など、まさしく空間そのものを操る『空間系魔術士』<sup>エウ・クレイデス</sup>でも出来ようもない。

ならばいったい『何を使った』攻撃か、と、そこまで思考したとき、はたとレーゼは気づいた。

『何を使った』。確かに単眼巨神型は『何か』<sup>ギガース</sup>を使った。それは音ではない『何か』だ。

ああ、と、彼は思考の中で首を縦に振る。表面だけの言葉に惑わされてどうする、と。

「なるほど、な……」

今までの思考をたった『一秒』で終わらせたレーゼは、けほつ、と痛む頭を片手で抑えながら呟く。

「ノイズは、古代語では『雑音』ではなく、『乱れ』を意味する。つまり奴の攻撃は、界魔力<sup>オド</sup>そのものを限定的に乱すもの、というわけか」

世界には魔力の波長と呼べるものが存在する。それは界魔力<sup>オド</sup>によって構成された、一種の『波』だ。

それは時に激しく、時に緩やかに、まるで母なる海にたゆたっている波のように、常に変化をしながら魔力<sup>マナ</sup>を宿す全てのものへと干渉してきた。

血肉をもつて生きる存在にはすべからく魔力<sup>マナ</sup>が宿っている。そしてその中でも人間という種族は、とびぬけてその保有量が多かった。だからこそ、人々は古より界魔力<sup>オド</sup>の波に干渉されて、それを当たり前のように享受しながらこれまで生きてきた。

界魔力<sup>オド</sup>の波が激しく揺れれば、敏感な人間ならば気分が悪くなるし、たいていの人間は魔術や体調の調子がよろしくなくなる。

逆に、界魔力<sup>オド</sup>の波が緩やかならば、多くの人々は調子がよくなる。

単眼<sup>ギガース</sup>巨神型の放った『ケイオティック・ノイズ』とはつまり、そんな界魔力<sup>オド</sup>の波を極限まで、そして局地的に激しく揺らしたに過ぎない攻撃だったのだ。

だが、それはもはや気分が悪くなる程度ではすまないほどの高威力なものだった。

レーゼ自身がその威力を体感しているからこそ分かる。もう一度『アレ』を食らえば、本当に頭が弾けるかもしれない、と。

ゆえに、レーゼは『奥の手』を使うために長剣を構えた。

『ケイオティック・ノイズ』が放たれるよりも早く、単眼<sup>ギガース</sup>巨神型を破壊するために。

そんな彼の気配を感じ取ったのか、単眼<sup>ギガース</sup>巨神型は両手の剣をゆっくりと振り上げ。

「っ！？」

側面より唐突に飛来した大人一人分ほどもある火球を避けるために、思い切り後ろへと跳んだ。

「こいつは……！」

レーゼの目の前を、膨大な熱量を内包した赤い砲弾がぎりぎりのところで通り過ぎてゆく。

それを横目で追いながら、着地したレーゼはうめき声を上げつつも顔をそれが飛んできたほうへと向けた。

この広大な広場へと通じるもう一つの通路。そこから、古い絵本に出てくる魔法使いのような容姿をした一体のゴーレムが、全身を晒していた。

『それ』の頭部はとんがり帽子をあしらったような兜が被さっており、体は簡素な灰色の装甲に覆われている。そして頭部と思われる場所に位置する、楕円の中心部には、真ん中に空色の縦線が引かれた親指大の青い宝玉が装着されている守護機兵だ。

「セカンド追文付きの、キャスター魔術士型……！」

最悪のタイミングで現れたそれを見て、レーゼは苦々しく呟いた。そう、まさしく『最悪のタイミング』だったのだ。勝利の天秤がどちらに傾くのかさえ分からなかったこの場において、少なくともレーゼには天秤を己のほうへと傾けるだけの『奥の手』があった。

だが、それは単眼巨神型と一対一の時だった場合『のみ』だ。そこに別の存在　守護機兵が入ってくるのなら話は別である。

それは単純な戦力差の話だ。

一対一の場合、レーゼは単眼巨神型キガースの動作や拳動から次の攻撃を予測し、『奥の手』を使うタイミングを的確に決められる。しかし魔術士型キヤスター、しかも追文付きセカンドがそこに加わると、注意しなければならぬものが二つに増える。

つまり、『奥の手』を使うタイミングが計りきれず、追い詰められていると言ってもいい状態であった。

どうする。魔術士型キヤスターを先に破壊して追文セカンドを回収するか、あるいは怪我を負うことを承知で『奥の手』を使うか……！

ギリリツ、と高速思考を繰り返しながら歯を食いしばる。  
二者択一の選択肢。どちらを選んだとしても、手痛い反撃が襲ってくるだろうということだけはレーゼには分かっていた。

ゆえに。

「起きろ『アルゼス』！」

レーゼは選択した。傷を負ってでも、目の前の単眼巨神型そんざいを破壊することを。

瞬間、魔術士型キヤスターの長杖から紅蓮の球弾が放たれる。

それはそこら辺の岩石さえも軽々と燃やし尽くしてしまうほどの熱を秘めた魔力の塊だ。

レーザーは無理やり体を捻ってそれを避けようとする。だが意識をギガース単眼巨神型に向けていたため、反応が極端に遅れた。

だから必然的に狙い澄まされたその炎の玉は、レーザーのわき腹へと直撃する。

「……………ぐッ！」

まるでハンマーを叩きつけられたかのような衝撃に足がぐらつき、全てを焼き尽くさんとする紅蓮の炎が襲った。

だがその直後、まず外套に燃え広がるようにしていた炎が水をかけられたかのように掻き消えた。

対魔術の効力を持つ仮想金属<sup>マキタイト</sup>を繊維状にして織りこんだ彼の外套が、その役割を見事に果たし魔術的な炎を消し去ったのだ。だがあくまで消し去ったのは炎のみ。自然発生した熱だけは吸収しきれず、レーザーのわき腹に中度の火傷を残す。

しかし、その痛みを無理やり意識から外し、レーザーは己の体内の魔力<sup>マナ</sup>を操作する。

全ては『奥の手』を使うために、青年はまるで湯水のように魔力<sup>マナ</sup>を『アルゼス』と呼んだ長剣へと注いだ。

『音声認識確認。輝奏剣四型<sup>きそうけん</sup>・アルゼス、起動します』

そしてその直後、かすかに雑音の混じった女性のようにしかし無機質な声が、レーザーが握っていた長剣の柄元に象嵌された蒼天色の宝玉から響いた。

## 第十一話：顕現

## 最強の盾の少女

『音声認識確認。輝奏剣四型・アルゼス、起動します』

女性のような、少年のような、そんな甲高い　しかしかすかに雑音が混じった声が響く。

それはレーゼが手にしていた剣の柄元に象嵌された、蒼天色の宝玉から放たれたものだ。

己を『輝奏剣四型・アルゼス』と名乗ったそれは宝玉全体に細かい光の筋を走らせ、まるで次の指示を待つ執事のように沈黙する。

「……っ。アルゼス、術式解凍！」

レーゼはわき腹のじくじくとした痛みをあえて無視しながら、そう長剣の宝玉へと命令する。

それは彼が保有する『力』を解放するための言葉。全てを破壊する時のみに放つ、唯一の言の葉。

『コマンド  
命令確認。術式解凍、開始します』

するとそれに『アルゼス』は淡々と答えた。

まるで長年連れ添ってきた相棒のように、しかしひどく機械的な声色で。

だが、その言葉と同時に、レーゼの足元に細長い影。



「ちっ！」

それは単眼巨神型ギカースが振るった長剣による一撃だ。  
風を引き裂き、ひき肉にせんと迫る刃をレーゼは舌打ちをしながらサイドステップで避ける。

そしてその瞬間、レーゼの体を雷撃が貫いた。

「が、あっ！？」

それを放ったのはもちろん追文付きの魔術士型セカンドだ。

いくら対魔術の仮想金属マギタイトを織り込んだ外套であっても、全身を這い回る電撃を全て散らせるわけではない。

ゆえに、いくらかの雷撃がレーゼの肉体を焼き、全体の筋肉を硬直させた。

あと少しというところで……！

レーゼは片膝を突きながら内心でそう呻く。  
そう、あと少して『奥の手』が発動できるのだ。放てば確実に『勝てる』ほどの威力を持った『奥の手』が。

だが先ほどの雷撃によって全身の筋肉は完全に硬直しており、立つことすら叶わない。

しかしレーゼは歯を食いしばって、体を動かそうと全身に力を入れる。

彼の目に宿っているのは強い意思だった。

それは『生きよう』としているものの、強い意思。ただそれ一つだけ。

レーゼは知っている。現実はいつだって無常だ。奇跡は起こらないからこそ奇跡であり、起こらないものにすがっても何の意味もないことを。

だからこそ、自らで動き、生きるために抗わなければならない。それは単なる、生にしがみつく醜い『足掻き』などではない。奇跡ではないが、奇跡に近い『何か』を起こすための行動だ。

ミシリ、と硬直していた筋肉が弛緩しはじめる。だが直後にレーゼの税新を駆け巡ったのは身を焼かれるような痛み。

「ぐつ、くつ、ぬうううう……！」

みしみしと、動かない体を無理やり動かす痛みにも耐えながらも、青年はゆっくりと立ち上がる。

そんな彼の行動を警戒するように眺めていた二体の守護機兵は再び動き出した。

今度こそ、完全に『敵』を抹殺するために。

魔術士型ウィザードが杖を振り上げ、不可解な文字が挟まれた茶色の帯を中に展開し、単眼巨神型メガースがもう片方の剣を振り上げる。

一方のレーゼは思いのほか深く突き刺してしまった『アルゼス』を力の入らない腕で何とか引き抜こうとしていた。

だが、動くのは守護機兵たちのほうが早かった。ゴーレム  
ウィザード魔術士型はとどめの雷撃を杖の先から放ち、メガース単眼巨神型が残像を

残す勢いで剣を振り下ろしたのだ。

「……までか……！」

刹那、自らの敗北と死を悟ったレーゼは呟き、迫る刃を睨みつけた。

彼の脳裏に浮かび上がるのは今までの思い出  
が駆け巡ってゆく。

いわゆる走馬灯

そしてその記憶の最後を飾っていたのは、最近保護した一人の少女の笑顔。

すまない、イリス。

レーゼは心の中で謝った。ただ家で待っているであろう少女に向かって。

一人にしてしまうということに。よくしてやれなかったということ。

「だめええええええええええ」

!

直後、一人の少女の叫び声が、波打ったような静寂の空間に響き渡った。

レーゼはゆっくりと目を開いた。

目の前に広がっていたのは、ただ白く、一切の穢れのない純白の壁があるというものだ。

そこでふと疑問に思う。

なぜ俺は死んでいないのか、と。

そしてはたと気づいた。体へ意識を傾けると、引きつるような痛みがいまだに残っている。

『感覚』があるということは、生きているという証拠だ。

どうして、とレーゼは呟く。少なくとも、あの二つの攻撃に耐えられるほど、己の体は化け物じみていない、と。

「よかった、間に合ったあ」

とても聞き覚えのある声が、背後から響いた。

とつさにレーゼは振り返り、その姿を認めて呻くように『彼女』へ問いかける。

「……なぜここにいる、イリス」

その言葉に、自宅で帰りを待っていたはずの少女　イリス・レ

ミナートはにこりと微笑むと、

「私は、レーゼさんに助けられました。だから、今度は私が助ける番です」

そう言つて、彼女はレーゼを覆っていた『もの』をゆっくりと動かした。

それは白く大きな翼だ。純白の、汚れ一つない、まるで天使のような。

それがイリスの背から衣服を貫通するように生え、レーゼを囲っていたのである。

「これは……」

イリスは周囲から翼を退かし、背中折りたたむ。

その光景はこの世のものとは思えないほど幻想的で、レーゼは思わずそう呟いていた。

「プロテクトコード 防御特化能力、リヒトクラール。そういう名前、らしいです」

えへへ、とうれしそうにはにkind彼女の言葉に、青年は理解する。

「プロテクトコード 防御特化能力。つまりは守護に特化した『最強の盾』というわけか。」

それ以前に、どういう成り行きでそんな能力を得たのかは気になったが、ひとまずその疑問は心の奥へとしまいこんだ。

「まったく、家で待っていると云ったはずなんだがな」

その代わりに、まったく、といった表情でレーゼが言った。だが声色は責めるようなものではなく、どちらかといえば呆れているものに近い。

だがイリスはその言葉を生真面目に受け取ってしまったようで、顔に反省の色を浮かべ、

「あ、あう。えっと、その……迷惑、でしたか？」

そのまま、上目遣いでレーゼに聞いた。

それは『その手』の趣味の人間ならばまともに見れなくなるほどの、可愛らしい動作だ。だがレーゼはその時、イリスの出現によって動きを固めている守護機兵<sup>ゴレム</sup>に意識の大半を飛ばしていたため、あまり気にした様子もなく首を振った。

「いいや」

「ふにゅっ」

そしてレーゼは、くしゃり、とその金糸のような美しい髪をひと撫でして、久しぶりに穏やかな表情を浮かべて言った。

「助かった。ありがとう」

「あ……、はいっ！」

礼を言われるとは思っていなかったのか、その言葉と表情にイリスは一瞬だけ惚けるが、すぐに元気な声で答えた。  
その顔に、太陽のような満面の笑みを浮かべて。

それを見て、レーゼも胸の内側が少しばかり暖かくのなるのを感じていた。

そして思わず頬が緩むが、見られたくないと感じた彼は顔を背けて巨大な守護機兵<sup>ゴレム</sup>へと向けながら、イリスへ告げる。

「さて、一仕事と行こうか。イリス、すまないが手伝ってくれ」

「わかりました！ 精一杯、護らせていただきます！」

グツ、とガッツポーズをして気合を入れるイリスに、レーゼはかすかな苦笑をもらした。

男が少女に護られるというその状況に、なんともいえない情けなさこそばゆさを感じたからだ。

だが、それでもレーゼはその言葉を拒まない。

それが彼女に対する今までの無愛想な対応への謝罪だと理解していたがゆえに。

「『アルゼス』、命令入力<sup>コマンドアクセス</sup>」

『確認。命令<sup>コマンド</sup>をどうぞ』

対象の認識を終えた守護機兵<sup>ゴレム</sup>が、ゆっくりと動き出す。

だがレーゼはそれに構うことなく、ただ静かに、淡々と『アルゼス』と言葉を交わした。

『任せた』からだ。あの少女に、この身を護ってもらうことを。なぜかは彼自身にも『わからない』。しかし、まるで初めから知っていたかのように、『彼女になら任せても大丈夫だ』と、心のそ

これから納得できたのだ。

ゆえにレーゼは、己が握る長剣『アルゼス』に告げる。

それは『奥の手』を解放するための言葉。

それはすべからく立ち塞がる敵を殲滅するただけに存在する『力』を解き放つ文章。

それははるか古より存在し、いまや知るものはほとんどいない、  
たった一つの奏<sup>うた</sup>。

「神聖なる四つ文字の契約にて、ここに解放す      “テトラス・テ  
ユクス・グラマトン”」

『解放文章確認。殲滅魔術式      アイン・ソフ・オウル、アンロッ  
ク』

そして彼の言葉<sup>うた</sup>に、『アルゼス』は応えた。

返答はその声と一つの動作。バシュッ！ という鋭い音と共に、  
刀身を端から端へと刻まれていた深い溝から左右に開き、その内側  
を晒したのだ。

その内部の様子を表すとすれば、『複雑精緻』というのが正し  
いだろうか。

まるで音叉のようにみごと半分に分かれた滑らかな刀身の内側には、  
直線と直角線のみが複雑に絡み合った『回路』が刻まれていた。

それは魔術に詳しくない人間ならば、ただの線の集合体にしか見  
えないだろう。



だが魔奏珠<sup>テリオス</sup>や彩奏珠<sup>レヴィオス</sup>に詳しい専門家ならば、それを見た瞬間こう言うに違いない。

それは魔奏珠<sup>テリオス</sup>内部に刻まれている『魔奏回路<sup>サーキット</sup>』そのものではないか、と。

しかしそれを指摘する者はこの場におらず、ただ状況は進展してゆく。

二体の守護機兵<sup>ゴーレム</sup>は、再び攻撃の準備を整えつつあった。

## 第十二話：決着

## 最強の矛の青年（前書き）

遅くなりました。もう少いで二章も終わりです。

## 第十二話：決着

### 最強の矛の青年

時は、イリスがレーゼの元にたどり着くより数時間ほどさかのぼる。

イリスが何かに突き動かされるようにアルテム遺跡へたどり着いたのは、『ヴァルハラ』本部から飛び出してから1時間後のことだった。

本来ならば大陸横断列車で四時間半はかかる距離を、直線に『飛ぶ』ことによつて一気に短縮したのである。

まさしく驚異的なスピード。人ではありえないそれを成したのは、彼女の保有する『特化能力<sup>コード</sup>』によるものだ。

「ここ、かな？」

イリスはそう呟き、首をかしげて遺跡の『門』を見上げた。

『門』を見るのはこれが初めてである。話だけは聞いていたが、これほど大きいものとは思わなかった。

そう思考しながら、ぼつかりと開いた入り口に顔を向ける。

イリスがここまでできたのは、ただの直感に近い。

メルヴィスの執務室内でレーゼが今にも倒れそうになっていた白昼夢を見た直後に、脳裏に浮かんだのだ。それもこの地点が明確にある。

それを直感と呼ばずになんと呼ぼうか。少なくとも、イリス・レミナートにとって、それは『直感』であつたのだ。

彼女は過去を知らない。過去を持たない。ゆえに、己の意思で確信する。これこそが『直感』である、と。

だからこそ、イリスはここまでできた。恩人の制止を振り切り、新たに得た『能力<sup>コード</sup>』の力を使って。

そしてもう一度だけ、少女は『門』を見上げた。

最初に見たときよりも強い意思を、その瞳に込めて。

「レーゼさん、いま、助けに行きますからね……！」

彼女が『門』内部へと足を踏み入れたのは、その数分後だった。

カツン、カツン、とイリスの足音が、石造りである遺跡の通路に響き渡る。

彼女が今歩いているのは、そんな通路の中でもひととき大きなものである。壁には一定間隔で水に浸されると光る鉱石　水光石<sup>アクアタイト</sup>が収められた容器が配置されており、明かりには困らない。

それを見て、ここは人の手が入っているのだということをイリスは理解していた。

『出土』した遺跡を調べる際、踏破した場所には必ず水光石<sup>アクアタイト</sup>入りの容器を設置する。これは遺跡調査の基本だ。

さらに言うなら、この光は守護機兵をある程度遠ざける効果を持っているという。つまり、これが設置されているということは、あ



刹那、イリスは悲鳴をあげた。まさしくそれは悲痛の叫び。大切なものが失われることへの恐怖。その感情のみが集約した、あまりにも痛々しい悲鳴。

そして少女は無意識のうちに前へと飛び出していた。

間に合わない？ そんなことは知らない。無謀だ？ そんなことは分かりきっている。守れはしない？ 守る。いや、守ってみせる。今度こそ。

脳裏を掠める自問自答さえも押しつけ、ただ『守りたい』という願いを胸に秘め、イリスは叫ぶ。『己が力』を解き放つために。

「今ここに、みこと命司る翼を授けたまえ “ヒトクラール大いなる福音”！」

瞬間、少女の背中から純白の双翼がうねるように生まれた。その容姿も相まって、イリスは誰がどう見てもまさしく天使のようである。

そしてイリスは『飛ぶ』。レーゼとこちら、彼我の距離を一瞬にして詰めるために。

距離にして数十メートル。走れば数秒かかる距離だ。だが全力で『飛べば』、数秒すらもかからぬ距離。

ギガース巨大な石像が大剣を振り下ろし、ウィザードレーゼの陰に隠れて見えなかったとんがり帽子の石像が雷撃を撃ち放つ。

「　　ッ！」

あと数秒でその二つの攻撃はレーゼへと直撃し、彼を物言わぬ肉塊へと返るだろう。

だがそれよりも早く、イリスはレーゼの背後へとたどり着き、絶対的な防御力を持つ双翼を展開。穢れひとつないそれによって全てを包み込んだ。

そしてその直後、翼に伝わってきたのは柔らかな感触。予想していたよりも小さな衝撃だった。

それを感じて、やっとイリスは一息ついた。

「よかった、間に合ったあ」

レーゼが驚きの表情で振り返る。そんな彼にイリスは微笑みを向ける。

その瞬間から、二人の『道』は白翼の元に交差した。

時は戻って現在。

状況は確実に動いていた。

「神聖なる四つ文字の契約にて、ここに解放す　　“テトラス・テ  
ユクス・グラマトン”」

『バスコード解放文章確認。絶対殲滅魔術式　アイン・ソフ・オウル、アン  
ロック』

レーゼの声と共に『アルゼス』は剣の刃部分を音叉のように割り、  
その間にイリスを脅威と見た単眼巨神型ギガースが両の大剣を振り上げ、二  
人もと叩き潰そうとしてきたのだ。

だがそれはさせないと、イリスはまるでもう一本の腕があるかの  
ように己の意思のままに動く純白の双翼　プロテクトコード 防御特化能力、リヒト  
クラールを振るい、その場から一歩も動かずレーゼを包み込む。

瞬間、単眼巨神型ギガースによる剛の二撃が白翼にぶつかり　しかし何  
の音を立てることもなく、二振りの剣は『停止』した。

そう、『停止』したのだ。弾くわけでもなく、無理やり受け止め  
たわけでもなく、ただ翼に触れさせただけ。

たったそれだけで、全てを砕くほどの威力を持つ単眼巨神型ギガースの攻  
撃は無効化されていた。

「レーゼさんには、指一本触れさせません」

これこそがイリス・レミナートの特化能力コード　防御特化能力、リ  
ヒトクラールの力だ。

運動量、熱量、質量、エトセトラ、エトセトラ。それらありとあ  
らゆる『ベクトル』を無効化し、どんな攻撃だろうと『ゼロ』にす  
る。

ベクトル操作ではなく、ベクトル消滅。その力はまさしく『無敵』



。防御というものを極限まで『特化』させたがゆえの力である。

「イリス、あと十秒だけでいい　耐えてくれ」

そんな彼女の活躍に、かすかな笑みを浮かべながらレーゼはそう告げた。

頼もしいと、そう思ったからだ。

そしてレーゼがイメージするのは、錆びつき、穴空きだらけでまともにかみ合わず、まったく動かない『<sup>ギア</sup>歯車』の大群。

そこに己自身を歯車としてはめ込み、イメージ内の完成した『<sup>ギ</sup>歯車<sup>ア</sup>』をゆっくりと動かし始める。

回れ、廻れ、<sup>トラ</sup>永久に、<sup>トラ</sup>永遠に。

イメージの中に投じるのは一つの眩き。

回れ、と錆だらけのそれに告げ、廻れ、と金切り音を上げるそれに命令する。

直後、レーゼの足元から莫大な蒼色の光があふれ出した。

それは彼自身が保有する魔力を視覚化したものだ。すなわち、レーゼが魔術士であるという明確な証拠である。

「さて　」

彼が言葉を放つと同時に、足元から湯水のごとく溢れ出ていた蒼色の魔力が一瞬にして、長剣　『アルゼス』に象嵌されている蒼天色の宝玉へと集束し始める。

瞬間、ぎちり、と何かが軋む音が響き渡った。

否、違う。ぎしり、ぎしり、と音を立てながら、空間が、『世界』そのものが『軋んでいた』のだ。

それはレーゼの持つ『アルゼス』からではない。レーゼ自身を中心として、『軋んで』いるのである。

「今までのお返しだ。ありがたく受け取れ」

そしてその青年の呟きと同時に、構える。

それは切っ先を地面に向け、刃を水平に寝かした、いわばなぎ払うための構えだ。

その動作と同時に音叉のごとく割れた刃と刃の狭間に、レーゼと同様の魔力光が満ち始めた。

人が扱うにはあまりに『多すぎる』その魔力量に何か危険を感じ取ったのか、二体の守護機兵<sup>ゴレム</sup>の攻撃が激しくなる。

しかし。

「護つて、リヒトクラール！」

凜とした声が響く。少女の声と共に、翼が動く。

彼は絶対的な盾に包まれている。その盾の前に、あらゆる攻撃は通用しない。

だから、レーゼはひたすらに集中することに意識を傾けた。意識という名の水面がいつさいの波紋さえなくなるほどの、凄ま

じい集中。そうでもなければ、今から解放しようとしている『魔術』は御しきれないのだ。

そう、『魔術』。レーゼが放とうとしているのは紛れもない魔術だ。

確かに、レーゼは魔術を扱えない。『奏無し』<sup>うたな</sup>と呼ばれてしまうほどに。

だがそれは、『通常の魔術』の場合である。

今、この場で解放されつつあるその『魔術』は、魔術士が扱う森羅万象を操るような『それ』ではなく、レーゼだけが扱える、特別にして絶対の魔術。

魔力制御が少しでも乱れれば、己を滅ぼしかねない諸刃の魔術。<sup>チカラ</sup>

その名を、『アイン・ソフ・オウル』といった。

「我、ここに『最強の矛』を解放せん 全てを貫き、滅ぼしつくせ！」

レーゼが最後の詠唱を終えたその瞬間、刃の狭間に閉じ込められていた蒼の光が爆発的な閃光を放ち、多大な魔力の発生によって生まれた暴風と共に広場を満たしてゆく。

そしてその中で、レーゼは全身を襲う倦怠感に絶えながら仕上げの術式制御を行っていた。

全身の血を残らず吸い取られていくかのようなその感覚に、思わず後ろへ倒れこみそうになるが氣力を振り絞って耐える。

魔力は第二の血液といっても過言ではないため、その表現は正しいと言えるだろう。

（何度、使っても……この感覚だけは、慣れんな……！）

術式制御の合間にできた余裕のあるコンマ1秒、それを消費してレーゼは心の中でそう呻く。

それは苦痛を表す呟きではなく、単なるぼやきだ。

だがその呻きの直後、背中に暖かい感覚が生まれた。

レーゼは振り向かずとも、その暖かい感覚が何なのかを『理解』する。

イリスの小さな手のひらが、レーゼの背を支えているのだ、と。

そつと背後を振り返り、レーゼは己を支える少女の顔を見た。美しく整ったその顔に浮かぶのは『心配』、ただその一つだけだ。

それを見た瞬間、レーゼは苦笑をもらした。どうやら先ほどの『ぼやき』を彼女はどうやってか感じ取っていたらしい。

不思議な少女だ、と青年は思考する。だが、不思議と別段それを奇妙だとは思わなかった。

だからこそ、レーゼは少女へと頷きを返す。込めた意味は『大丈夫』。

ひどく簡素だが、力強さがこめられたそれを見て、イリスが微笑を浮かべる。

互いの心が通じ合う。それはひどく心地よく、心のどこかが暖かくなったのをレーゼは感じていた。

そして閃光は急速に刃へ集束し、一種の静寂が訪れ

「放つ  
アイン  
あまねく万象滅ぼす極光！  
ソフ  
オウル」

イリスが最高のタイミングで翼をどけると同時に、レーゼは刃を横薙ぎに振るう。

そして、光の濁流が生まれた。

「つ！？」

その光景に、イリスは声にならない叫び声を上げる。それほどまでに、『それ』は壮絶な光景だったからだ。

彼女の目に映ったのは、まさしく『濁流』だ。まるで川の水が海へと下るように、アルゼスから放たれた極光はうねることすらせず、ギガス全てを飲み干さんばかりの勢いで巨漢の守護機兵へと直撃する。

その瞬間、バガン！という、まるで鉄槌が金属そのものを砕いた

ような衝撃音と共に、表面装甲が光の粒子となって『消滅』した。  
そう、『消滅』のだ。なんの抵抗もなく極光はその分厚い装甲を  
『光の粒子』へと分解させたのである。

そして極光の勢いはまだ止まらない。

それは表面装甲を消し飛ばすとそのまま内部機関を無作為に破壊  
しながら、背中を装甲ごとぶち抜いて天井へと達していた。

生半可な攻撃では傷一つすら付かないはずのその『遺跡』の  
天井も、じりじりと直撃している部分が消滅していつていることか  
ら『アイン・ソフ・オウル』の威力が分かるだろう。

そして、ぐらり、とそのあまりに凄まじい攻撃と衝撃に、<sup>ギガ</sup>単眼巨  
<sup>イス</sup>神型の巨体が後ろへ傾く。

『しししシステムえうあアアアアー。魔術にヨる、こ、ここ、  
コウ撃を確二ん。めいんシステムにそん、そんそんそんソんシ  
ヨウあり。システムダウン。復旧不可能。復旧ふかの……』

やがて<sup>ギガース</sup>単眼巨神型は未練がましくザリザリと不愉快な雑音が混じ  
った無機質な言葉を吐き続け、唐突にブツンという音とともに動作  
を停止させた。

「『アルゼス』！ 術式、停止……！」

『了解。アイン・ソフ・オウル、ロック』

レーゼはそれを見届けた瞬間、息を乱しながらも『アルゼス』へ  
の魔力供給をカットしてそう命令した。

『アルゼス』はその言葉に従い、『アイン・ソフ・オウル』の術

式そのものを停止させ、封印する。

それと同時に、ガシュツ！ という音と共に音叉のように割れていた『アルゼス』の刃が再び一つに戻った。

『アルゼス』の切っ先から極光がゆるやかに収まり、元の明るさを取り戻した広場に残っていたのは、胴体到大穴を明けて完全に機能停止している単眼巨神型と、目の前で起こったことを処理しきれずに動作を停止させている魔術士型と、『アイン・ソフ・オウル』に根こそぎ魔力を持っていかれ荒く息をついているレーゼ、そしてぱちくりと目を瞬かせているイリスだけだった。

### 第十三話：開演

奏くウタ>わない青年と奏翼くソウヨク>の少女（前書き

お待たせしました、ようやく第二章完結です。

次の第三章では、さらに世界が広がり、明確な『敵』も登場しますので、お楽しみに！



### 第十三話：開演

奏くウタ>わなない青年と奏翼くソウヨク>の少女

「す……すごいです！ レーゼさん！」

『アイン・ソフ・オウル』の極光。その一撃によって訪れた静寂を最初に打ち破ったのは、イリスのそんな感銘の声だった。

それを聞いたレーゼは気恥ずかしさを誤魔化すように頬を掻き、

「俺はこの『力』をすごいと思ったことはないが……」

額の汗を腕でぬぐうと、言葉が続ける。

「イリス。改めて、ありがとう。君がここに来てくれなかったら、俺は」

死んでいた。

ゆえにレーゼはそう心からの感謝の言葉を告げ、金糸のように美しい髪の上へとぼふんと手を乗せた。

「はうつ。……あ、え、うつ……」

対してイリスは恥ずかしさに頬を桜色に染めて言葉を詰まらせていた。

それは彼女にとって、『記憶』のある限り初めての、心の底からの感謝の言葉だったからだ。

「えっと、その、あの……」

そしてイリスはまだ桜色に染まっている頬に両手を当て、どう返

せばいいのか分からずにただ戸惑いの声を上げた。

しかしそれは仕方のないことだった。何せ少女は『記憶』という名の過去を『喪失』しているのである。

どの言葉に対しどの言葉で返せばよいのか、それを意識的に行えなどと、無理があるだろう。

レーゼはそんな彼女の様子を見て、まるで子供を見守る父親のような笑みを口元にかすかに浮かべた。

「イリス」

「ひゃ、ひゃい!？」

そして顔が少女と同じ位置になるように片膝を突くと、

「そういう時は、『どういたしまして』、だな」

しっかりと、澄んだ碧眼を見てそう告げる。

「あ……」

彼の言葉にイリスが目を見開き、やがてはにかむような笑みを浮かべて、元気な声で言った。

「どういたしましてっ」

そんな彼女の言葉にレーゼは頭を軽く撫でることこたえと、立ち上がってある方向へと顔を向けた。

彼の視線の先。そこにはゆっくりと動きだしている追文付きの魔術士型がいた。

それを見据えながら、レーゼは『アルゼス』を握る手に力を込める。

単眼巨神型を撃ち倒したことにより、戦いの山場はもはや越えている。あとは本来の『仕事』を済ませるのみ。

そう思考し、魔術士型へと一歩踏み出した。  
だが、その直後、目の前で起こった出来事にレーゼは足を止めた。  
いや、止めざるを得なかった。

魔術士型の背後にある通路の暗がりからぬつと現われた、陶器のように白い両手が、その後頭部と右肩部をがっちりとホールドしたからだ。

「……は？」

「ふえ？」

レーゼの呆然とした声にイリスも反応し、そちらへと顔を向ける。  
同時に魔術士型は己の後頭部と右肩部の拘束を振りほどこうとするが、押さえつける力が大きすぎるのか、動けずにいた。

その光景はまさしく非現実的なものであった。

確かに魔術士型は守護機兵ゴレムの中ではもっとも非力であるが、それを腕力のみで押さえて動けなくするなど、ありえないことである。魔力や魔術があるからこそ守護機兵ゴレムに対抗できるのであって、腕力のみでは傷一つつけることすら出来ないはず、なのだ。

だがその『非現実』を成している白い両手の指は魔術士型キャスターの薄い装甲にゆつくりと食い込み、やがてメキ、メキ、と、硬質なものがひび割れるような音が響き始め、その装甲に亀裂が入り始める。そして数秒の後、耳の奥に響く破砕音と共に、ついに魔術士型キャスターの首が、まるで人形の首を千切るように簡単に引きちぎられた。

「こんなの到手こずるなんて、珍しいじゃない？ レーゼ君」

肩を掴んでいた白い片手が開かれ、制御系を失った守護機兵ゴレムだった『もの』が甲高い音を立てて崩れ落ちる。

それと同時に聞こえてきたのは、レーゼにとっても、イリスにとっても、とても聞き覚えのある声だった。

「マイナさん？」

「ええ、ちょうど一時間ぶりねえ。イリスちゃん」

イリスの呼びかけに優しい声色で答えながら暗がりから一人の女性性が姿を現す。

陶器のように白い肌と、薄紫の長髪に縁取られた小さな顔には釣りあがった群青の瞳があるが、今は柔らかない表情を浮かべていた。

ただし、片手は引きちぎった魔術士型<sup>キャスター</sup>の頭部を鷲づかみにしており、それを成したところ彼女　マイナ・セルタレイが軍神であることを示していた。

軍神とは『規格外』の塊だ。常人が出来ぬことを彼らはたやすく実行し、成してしまう。

ゆえに、魔力でのみダメージを与えられるはずの守護機兵<sup>ゴーレム</sup>の装甲を引きちぎるぐらい、容易なのだろう。

「いきなり飛び出していくから、慌てて追いかけてきたのよ？」

「……やはり、ここまで走ってきたんですか？」

マイナの言葉にレーゼは疲れた様子で問いかける。

その話を横で聞いていたイリスは首をかしげ、疑問の声を上げた。

「走って……？」

「ええ。時間が惜しかったから、一直線にここまで来ちゃったわ」

「へ？ えつと……、えー？」

ふっふーん、となぜか誇らしげに胸を張っているマイナの言葉を理解しきれないのか、イリスはただ小鳥のように首をかしげる。

隣に立っていたレーゼは彼女の様子を見て、鞘に『アルゼス』を収めながらフォローするように口を開いた。

「イリス。この人を『普通』と思わないほうがいい。マイナ女史は全てにおいて『規格外』だからな」

「はあ……」

彼の言葉に納得したのかしてないのか、イリスは曖昧な表情のままで頷いた。

レーゼはその様子に苦笑しながら、ぽんぽん、と少女の頭に軽く手を乗せる。

マイナはそんな二人の様子を見ながら、口元にかすかな笑みを浮かべた。

どうやら目の前の少女の悩みは取り除かれたようだ、と、そう思考しながら。

「さあて、二人とも無事なようだし、私は帰るわね？」

この追文は私が変わりに報告しておいてあげるわ。  
セカンド

そして用事を済ませたマイナはそう言い残し、片手に魔術士型キヤスターの頭部を鷲づかみにしたまま、再び通路の暗がりの中へと消えていった。

「……行っちゃいましたね」

「まったく、あの人は……」

ぽつん、と取り残されたイリスが呟くように言った。

それに同意するようにレーゼは頷き、しわの寄った眉間を親指と人差し指で揉み解す。

やがて静寂が再び遺跡内を満たし始めたころ、唐突に蒼髪の青年は出口へ向けて歩き出す。

同時に驚いた表情をしているイリスへ顔を向けると、片手を差し伸べて口を開いた。

「さあ、イリス。帰ろうか。俺たちの家に」

「あ　はい！」

そして、そんな元気な声と共に、少女は青年の後を追った。

ざりざりと、耳を澄ませなければ聞こえないほどの、かすかな雑音がダルムヘイツのギルドマスターの執務室に響いていた。

その不愉快な音を発しているのは、執務機の中央に置かれている全長30cmほどの薄く黒い長方形の物体　アーティファクト『リバースソウル顕現心器』である。

「……どうなっているんだ？」

『リバースソウル顕現心器』が虚空に映し出している、手のひらに収まる程度の大きさを持つている薄く透明な正方形な板　『情報投影板』を指先で操りながら、『エンシェントマスター古の統率者』にしてギルドマスターたるメルヴィス・セルタレイは、顎に手をあてながら、一人そう呟いた。

顔は普段のような柔和なものではなく若干の険が混じっており、

それが彼の感情を物語っている。

メルヴィスが行っているのは『<sup>リバースソウル</sup>顕現心器』の力を利用した、<sup>コード</sup>特化能力の『情報検索』である。

『<sup>リバースソウル</sup>顕現心器』はアーティファクトとしては珍しく、複数の力を有している。

一つ目は無論、<sup>コード</sup>特化能力を開花させるための力。二つ目は<sup>コード</sup>特化能力を解放するための『契約解放文』を伝える力。そして三つ目は、今まで開花させた<sup>コード</sup>特化能力の情報を検索する力だ。

メルヴィスは其三つ目の力を使い、イリスの<sup>コード</sup>特化能力について調べていたのだ。

別に大それた理由などない。

ただ、彼女の記憶の糸口が見つければいい。そんな考えで『<sup>リバースソウル</sup>顕現心器』の検索機能を実行したのである。

だが。

「ない」

顎に手をやり、メルヴィスが疑問の声を呟く。

そう、『無い』のだ。

どのような条件で絞ろうとも、全体を見直しても、『<sup>プロテクトコード</sup>防御特化能力・リヒトクラー

ル』などという名の<sup>コード</sup>特化能力は、『<sup>リバースソウル</sup>顕現心器』内に登録されていなかった。

<sup>コード</sup>特化能力を開花させるには『<sup>リバースソウル</sup>顕現心器』が必須であり、開花させ



ると同時にその能力名その他もろもろが自動的に登録されるようになってる。

これは世界統一政府側にも設置されている、兄弟機であるもう一つの『リバースソウル顕現心器』も同様であり、この二つは情報を共有しているのだ。

つまり、特化能力コードを有するものは必ず『リバースソウル顕現心器』に登録されているはずであり、情報の検索などたやすいはずなのだが。

「うーん、やっぱり無いなあ」

メルヴィスはポチポチと横に長い透明な板に、手馴れた手つきで指を滑らせながら、条件をより深く、今までとは違うキーワードで検索してゆく。

検索結果：0件。ノンヒット 契約解放文：1件。ヒット その他の情報：0件。ノンヒット

ポチポチ、パチパチ、と、ただひたすらに。

検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット

何かに取り付かれたかのように、一心不乱に。

検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット 検索結果：0件。ノンヒット

それはまるで壊れてしまった機械のごとく、同じことを繰り返す。

[illegible]

「メルヴィスの大将？」

「  
…  
ん  
ん  
|  
?」

唐突に頭上から響いた訝いぶかしげな声に、メルヴィスは手を止めた。そして顔を上げ、声の主を確認する。

「何をやってんですか？」

『リバースソウル  
顕現心器』

「なんか持ち出して」

執務机の前に気づかぬうちに立っていたのは、片手に書類の束を持った『第四階層情報部』のリユカリオ・ヘルゼリオスだった。

そんな彼の言葉にメルヴィスは我を取り戻したかの、いつの間にか攣りそうなほど酷使していた指から力を抜き、まるで抜け殻のように力の抜けた体を椅子にもたれさせながら気の抜けた声で返す。

「あ……、ああ、ちよつと、ね。……」  
『調べモノ』  
「ってやつかな」

「はあ、それは構わないんですが。追加の仕事です。ここからここまで、認証のサイン、お願いします」

リユカリオはメルヴィスの様子を対して気にすることも無く

普段の行いがアレすぎるためであるが 手にしていた書類の束をばさりと執務机の上に置いた。

その量はざつと50枚程度。普段メルヴィスが処理している量からすれば10分の一にも満たないだろう。

だがその内容は、普段のものよりも10倍は濃かった。

正確に表すのなら、書き込まれている文字が小さすぎて、虫眼鏡でなければ読むことすら困難なレベルなのだ。

「……………。マジで？」

「ええ、本気と書いてマジです。あなたの奥さんが『踏み台』にしたモノの損害リストですからね。とつととお願ひします」

それを見て、メルヴィスは呆然とした声を上げた。

今から一時間ほど前、彼の妻 軍神マイナ・セルタレイが、この部屋から『飛び』出していったとある少女を追うために『跳んで』いったのだが、その際に彼女が『足場』にしたものがごとく被害を受けたらしく、この書類全てにそういった『実情』が記されていた。

目を凝らしてよく読めば、『北区の民間建造物の屋上にて軍神の『跳躍』を確認。飛び散った衝撃波により周囲に被害発生。破損ガラス枚数254枚』や『着地時の衝撃により大陸横断列車用の大型線路が一部破損』、さらには『軍神の高速移動によって発生した轟音による騒音被害発生』などなど、とんでもないものばかりである。

そんな報告書を読めば読むほど、その被害がメルヴィスの頭の中で再現されてゆく。

まさしく人間台風 いや、『人災』と呼ぶべきだろうか。

「あ、あはははー。……………はあ」

後々の処理のことを考え、白髪の青年はただ渴いた笑い声を上げた。

俗に言う、もつとつにでもなれ、といった状態である。

リユカリオは口から魂が抜けかかっているメルヴィスに心の中でひそかに黙祷をさざげると、即座に　物音すら立てずに、執務室を後にした。

残っていたら確実に地獄デスマーチの書類処理に巻き込まれると、直感が告げていたからである。

そして執務室は再びメルヴィス一人だけとなり、静寂が満ちる。その中で青年は少しだけ気合を入れるように両手でガッツポーズをすると、羽ペンに手を伸ばした。

だが、そこでふと思い出したように『リバースソウル顕現心器』へ顔を向け、独りごちる。

「……………しかしこれは、どうということなんだろうねえ」

脳裏によぎるのは『ノンビット検索結果：0件』の一文のみ。

あまりに簡素なその文。存在そのものを否定するかのような文字列に、思わず体が一瞬だけ震えた。

ゆえに青年は呟く。それを否定するためではなく、ジョークのよ  
うに言い換えるために。

これじゃあまるで　。

「初めから、この世に存在していないみたいだ」

しかし、そんなメルヴィスの言葉は、蒼く晴れ渡っている空へと吸い込まれるようにして消えただけだった。

## 今までの登場人物 ver.2（前書き）

今までの登場人物です。

前回よりも情報量が増えてきたので、色々と書き足しています。

## 今までの登場人物 Ver.2

レーゼ・クライス - L e s e C r e i s -

『最強の矛』を持つ青年。

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』に所属している魔術士であり、『剣帝』の二つ名を持つ。

何事にも動揺せず、冷静な性格の持ち主。本心を簡単には曝け出さず、自分の優先順位が異常なほど低い。

ギルドの中で最も高いランクである『第一級単独探索許可書』エクステス所持者であり、その実力は折り紙付きである。

だが通常の魔術が使えないゆえか、影では『奏<sup>うた</sup>無し』と呼ばれている。

容姿は美形といっても過言ではない。

首すじまで伸ばした青の髪を一まとめにしており、鋭い刃のような冷たい碧眼を持つ。

黒いシャツの上に、対魔術の効力を持つ仮想金属を繊維状にして織り込んだ青い防刃ジャケットを羽織り、同じように金属繊維を編みこんだズボンを着用している。

使用武器は長剣と魔力銃。

堅実な戦法を得意とし、派手さはないが確実に守護機兵<sup>ゴレム</sup>を破壊するように立ち回る。

また、使用可能魔術は現在二つ。  
クイックフースト  
『身体能力の瞬間強化』

『絶対殲滅魔術式     アイン・ソフ・オウル』  
この二つのみである。

イリス・レミナート     - I r i s     L e m i n a r t -

『最強の盾』を持つ少女。

古代遺跡『アルバレスタ』の地下において巨大水晶に封印されていたところをレーザーに発見され、保護された謎の少女。

現在は重度の記憶喪失であり、保護される前までのことを名前を除いて一切覚えていない。

見た目は美少女といって差し支えない。

金髪碧眼で、肩甲骨が隠れるくらいの金糸のように美しいロングヘア。

『双翼』形状の防御特化能力・リヒトクラールを操る。  
ブロックコード

契約解放文は『今ここに、みこと命司る翼を授けたまえ』

アシュレイ・ツァイス     - A s h l e y     Z e i s s -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』に所属している魔術士。

『第二級単独探索許可書』セイレス・ルード所持者ではあるが、その実力は『エクステス』に匹敵している。

陽気な性格で、誰からも親しまれているが、一度調子に乗るとヘマをしやすい、どこか抜けている。

ざつくばらんに切りそろえた銀灰色の髪と緑の瞳を持つ。



その容姿はどちらかというと二枚目。

使用武器は十字架から姿を変えるアーティファクトの長槍。  
得意の重力魔術によって派手に動き回りながらブーツやコートに  
仕込んだ暗器なども使い分けて戦い、トリッキーな戦いが得意。

セレーネ・C・ミストノート - S e l e n e C M y s t n  
a u g h t -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』に所属している魔術士。  
『第二級単独探索許可書』セイレス・ルード所持者であり、その  
ことを誇りとしている。

その本質は高飛車なお嬢様に近く、無駄にプライドが高い。  
空間を支配する魔術を扱う、エウ・クレイデス空間系魔術師でもある。

メルヴィス・セルタレイ - M e l v i s S e l t a r a y -

『遺跡発掘・魔術士ギルド』が誇る三大ギルドマスターの一人で  
あり、『エンシェントマスター古の到達者』の二つ名を持つ青年。

『怒る』ということをしない極めて穏やかな性格だが、人を扇動  
するのが最も得意である。

また既婚者であり、『軍神』である奥さんに尻に敷かれているよ  
うだ。

雪のように白い髪で茶の瞳を持つ。容姿はそれなり。

レーゼらには手荒く扱われているが、大部分のギルド職員には慕

われている。

だが、どんな時でも心のゆとりを忘れずにはっちゃけまくっているせいか、『変人』として見られることもしばしば。

しかし、使用する魔術や特化能力共に不明であり、謎に包まれている。

マイナ・セルタレイ - Maina Seltaray -

メルヴィス・セルタレイの妻であり、この世に二人しか現存しない『軍神』の内の一人。

その攻撃力は圧倒的で、魔力込みの攻撃で無ければ破壊できない守護機兵<sup>ゴレム</sup>を素手で破壊するほど。

世間一般において『美人』として通じる容姿の持ち主だが、本人の性格は極めて陽気であり、そのことを自慢することをあまりしない。

リユカリオ・ヘルゼリオス - Ryukario Helzer  
ios -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』の中でも極めて特殊な部署、『第四階層情報部』に所属している『裏』側の青年。

よくメルヴィスの書類仕事に巻き込まれている可哀想な人でもある。

無精ひげがよく似合うナイスガイだが、20代な本人はそのことを気にしている。

## 第十四話：遊楽

### 大陸横断列車にて（前書き）

第三章スタートです。ここから、徐々に『敵』が姿を表し始めますよー。

## 第十四話：遊楽

### 大陸横断列車にて

見渡す限り果てのない大草原を、ただ風が吹き渡っていく。

風を受けた草木は海のような波を作り、幻想的な雰囲気を一時だけ作り出す。

そして、つかの間に現れた射風は、気まぐれに草の大海原を撫で上げて去っていった。

その大草原という名の大自然の景色の中に、そぐわないものがある。

それは、巨大な鉄製のレールであった。

よく手入れのなされたそれは、今でも現役なことを物語っている。

しかし唐突に、そのレールが揺れた。

最初は微かに。しかし、次第にその揺れは大きくなっていき、同時に穏やかな風を乱す巨大な音が響き渡る。

瞬間、野原の上を影が覆いつくした。

それを成したのは巨大な『鉄の箱』である。

ただし、底には車輪をはめ込み、側面には窓が付いているやけに尖がった『箱』だが。

その『箱』　大陸横断列車『ブラウアーエンツィアン一号』は空気中の界<sup>オド</sup>魔力を取り込んで燃料とし、いくつもの車両と車輪、そしてレールを軋ませながら草原の海の中をひた走る。

大陸横断列車はその名の通り、リストア大陸の端から端を縦横無尽に走り回り、『物資』や『人』、さらには『情報』などといった不確定なものすら迅速に目的地へ届ける、世界統一政府に管理されている最重要交通機関の一つだ。

長大な車両はそれぞれ、特等車両、一級車両、二級車両、三級車両、四級車両の五つから構成され、下にいけばいくほどチケットの値段も安くなる。だが、座り心地は最悪なので一般人は三級車両を利用する事が多い。

「わぁ！ 見てください！ さっきのお山がもうあんなところに！」

そんな三級車両の中央、窓に程近い座席に四つの人影が座っていた。

その一人は窓際に腰掛け、ガラス窓に手のひらを当ててわぁわぁと騒いでいる少女だった。

金系のように美しく輝く金色の長髪で幼い顔を縁取っており、普段来ている蒼色のローブではなくかわいらしいフリルの付いたブラウスとスカートを身にまとっている。

また、澄んだ碧眼は初めて見るものだらけなのか、めいっぱい見開かれており、白い肌 特に頬は興奮でかすかに桜色に染まっていた。

「イリス。あまりはしゃぐと落ちるぞ？」

その向かい側で彼女 イリスに静かな声をかけたのは、蒼髪の

青年、レーゼ・クライスだ。

鍛え上げた長軀を漆黒のシャツとズボンで包んでおり、象徴たる青い防刃製外套を今は脱いでいる。

そして溝の刻まれた長剣『アルゼス』は、鞘に納まった状態で脇に立てかけていた。

口元に僅かながらの苦笑を浮かべた彼はしかし、まるで父親が子を見守るような眼差しでイリスを見守っている。

「は、はいつ。でも、こんなに遠いお出かけは初めてでっ」

そんな彼女は窓から身を離し、わたわたと両手を上下に振りながら興奮気味に話し始めた。

頬は相変わらず桜色のままであり、レーゼとのツーショットで見ると、まさしく親子の微笑ましい会話そのものであった。

「しっかしまあ、メルヴィスの野郎も粹な計らいをするなあ」

と、そこに割り込むように口を開いたのはレーゼの隣、廊下側に座っている一人の青年である。

ざつくばらんに切りそろえたのかあまり整っていない銀灰色の髪はあちこちに飛び出しており、緑の瞳は気だるげに細められている。

「それによ……くあゝ……んぐつ。折角の休日だし、楽しまないと損ってやつだぜ。なあ、レーゼ？」

欠伸をかみ殺した彼　アシュレイはその言葉の直後に黒い笑みを浮かべ、懷から一枚のカラフルな色合いのチケットらしき紙片を取り出して、ヒラヒラとそれを振った。

そのチケットには『遊樂都市アダリア：娯樂施設ご優待チケット』

などとデカデカと書かれており、その文字の周りをカラフルな星や様々なキグルミのキャラクターたちが飾っている。

「それにしても……『遊楽都市』を選ぶなんて、メルヴィスも思い切ったこと考えたわよねえ」

「うおっ。何しやがる、セレーネっ」

そこへ、ピツ、と掠め取るようにアシュレイのチケットを細く白い手が奪い取る。

それを成したのはアシュレイの向かい側に座っていた、イリスと同じく金色の髪を持った一人の少女だ。

170cmほどある細いその体を、緑を基調としたワンピースで包み、深緑の瞳は我が強いことを表しているのか釣り上がっているその少女、セレーネ・C・ミストノートの行動にアシュレイは抗議の声を上げる。

だが当然のように彼女はそれを無視し、奪い取ったチケットを指先でつまんで揺らしながら、呆れ交じりの声色を発した。

「出資者が運営する施設への優待チケットをくれるなんて、気が利きすぎじゃないかしら？」

「いいじゃねえ、かつ。『アダリア』と、くりやあつ、遊楽地として、最、大、規模って、話だしさっ。こりゃあ、楽しみだぜ、っ！」

「おほほほ、捕まえて御覧なさい」

アシュレイがセレーネに奪われたチケットを取り返そうと躍起に

なりながら会話している様子を見ながら、イリスは首をかしげた。

「……あ、そういえば」

「どうした？ イリス」

「レーゼさん。これから行くところって、どんなところなんですか？」

その問いにレーゼはふむ、と呟いてあごに手をやり、答えるために口を開く。

『遊樂都市』アダリア。大陸北部にあるその都市は、名前の通り『遊ぶため』に作られた街だ。

世界統一戦争終戦後、アスガルド世界統一政府が計画した『拝命都市』計画これは各都市に名と役割を与えることによって、各地を効率よく支配しようとした計画である。に乗った、ギルドの出資者である大富豪の一人が、元々は小さく何の特徴も無い『名無し』の都市を買い上げ、己の趣味一色に作り変えたのが始まりだと聞く。

最初は誰もが興味本位だけで行っていたが、魔奏珠を用いた絶対の安全性をかね揃えた数々のアトラクションや、大人が遊ぶためのカジノなどが用意されるようになり、今では大陸一、人が集まっている場所だ。

それが『遊樂都市』アダリアの『遊樂』たる証である。

通称は『楽園』なのだが、どうも安い名だと思っているのはレーゼだけではないはずだろう。



「まあ、要約すれば、金持ちの道楽で出来た都市だな」

レーゼの解説に「ふへー」と、イリスは気の抜けた声を上げた。そんな彼女のどこかいつもと違う様子に青年は首をかしげ、問い返す。

「どうした？」

「あ、いえつ。その……」

その言葉にイリスは「えへへ」と満面の笑みを浮かべながら頬に手をやり、本当にうれしそうな声色で言った。

「楽しみですねっ」

「……ああ。そうだな」

ふつ、と口元を緩め、レーゼは返事を返すと同時に、窓の外の見事に青く晴れ渡った空へと顔を向ける。

そして、なぜ『遊樂都市』アダリアへと行くことになったのかを思い出していた。

「レーゼさん、お願いがあります」

イリスが真剣な顔で申し出てきたのは、遺跡での『単眼巨神型』<sup>ギガース</sup>との戦いから三日ほど経った日の朝のことだった。

あの後、『白癒都市』イザークのギルド支部で傷を癒し、本部に戻ってことのあらましを説明して『あつはつはつは！』『単眼巨神型』<sup>ギガース</sup>がいたこと、伝えるの忘れてたよ！ いやーごめんねー！ あーっはつはつは！』などと爆笑した挙句にその場の勢いで全てを誤魔化そうとしたメルヴィスを全力でぶっ飛ばしたついでに窓から叩き落したのだが、やはりしぶとく生きていたのは言うまでもない。

しかし、その事件の影響か、二人のわだかまりは溶け、今は普通に違和感を覚えることもなく暮らしている。

レーゼは少女の言葉を聞き、今日の朝食であるハムエッグを口に放り込んで咀嚼した後に、

「ん、今日のも悪くない」

その言葉にイリスは頬を桜色に染め、頬に手を当ててから「えへー」と嬉しそう笑うと、に自分も食べようとフォークを動かした。そして何度かハムエッグを租借して飲み込んだ後、気合を入れるように頷いてから口を開いた。

「それですね、レーゼさん。お願いが……」

「イリス、胡椒を取ってきてくれ」

「あ、はい」

だが遮るようなレーゼの注文に素直に頷き、台所へ「とてとて」

と走っていき、戻ってきたら言われた通りに胡椒を差し出す。  
それをレーゼはハムエッグに少量ふりかけ、また食べ始めた。  
穏やかな時間の中、二人は無言で食べる事に専念する。

と、またイリスが気合を入れなおすようなジェスチャーをし、  
レーゼに言った。

「えーつとですね、レーゼさん。私からお願いが……」

「イリスは牛乳でいいか？」

「え？ あ、はい。お願いします」

いつの間にか青年は簡易魔奏珠によって動く冷蔵庫の中から牛乳  
を取り出し、聞いてきた。

それに思わず答えてしまったイリスは「あれ？」と首をかしげ、  
しばらく何かを考えるかのように腕を組んで「うーん」と唸った。

そして今度は慎重に、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「レーゼさん、あの、お願いがあるんですけど……」

「……ああ、今日はいいい天気だな」

「あからさまに話題を逸らさないでください！」

だが、そのあまりの話題逸らしに、ついにイリスは怒った。  
机を両手の平で叩き、ついでにその痛みに机の下でうずくまる。

「それにいちいち答えているイリスもイリスだがな」

レーゼの呆れ返ったような声色の言葉に、少女の頬が桜色に染まる。

そして両手を押さえながら机の下から這い出てきたイリスは、両手の平がいまだに痛むのか、目の端に涙を貯めながら恨めしそうにレーゼを見た。

もちろんそんな表情を向けられて怖がるようなレーゼではない。むしろ、小動物が威嚇するような、そんな少女の表情に口元を軽く緩めているだけだ。

対するイリスは、普段あまり表情を表に出さないレーゼの顔にかすかな微笑が浮かんだのを見て、思わず胸の中心が温かくなるのを感じた。

だがそれではだめだ、と顔をブンブンと振ると、

「私はレーゼさんの仕事を手伝いたいんです！」

ついに言いたいことが言えたのか、椅子に座りなおした少女は満足そうな顔をする。

「ちょっとまって……。あー、イリス、俺の仕事が何たるかを理解しているか？」

何か嫌な予感がして、聞かずにはいられなかったレーゼは口を開いた。

なぜか、彼女の背後に己の上司であるあんちくしょうメルヴィスの姿が見えたからだ。

「はい、機械の兵士さん達と戦って優越感を得るとか」

「……とりあえず聞こう。その知識、誰からだ？」

「メルヴィスさんですけど？」

「あいつは……。後で覚えている……」

頭を抱えながらレーゼは恨めしげに呟いた。

メルヴィスは冗談が好きである。そしてそれを他人によく言うのだ。

さも、その『冗談』が『本当』であるかのように聞き手に認識させてしまう。ゆえに彼が語ることは嘘か真か、判断が付きづらい。

もつとも、長い付き合いのレーゼにしてみれば、どれが冗談でどれが本当なのか、それぐらいの判断は付く。

だがイリスは、メルヴィスあんちくしょうとで会ってまだ一月も経っていない。彼の冗談を見破れ、というほうが無茶だろう。

それにこの少女は良くも悪くも純粹だった。人を疑うことをあまりしないということは、それだけメルヴィスに騙されやすいということだ。

レーゼは思わず、イリスの将来が心配になった。

そんな青年の様子を知ってか知らずか、元気にイリスが聞いてくる。

「いいですね？ 私だってお役に立ってますし！」

彼女の言葉に、頭を抱えていたレーゼは顔を上げ、しゅしゅと頷

いた。

確かに役には立った。三日前の『ギガース単眼巨神型』と『セカンド追文』持ちの守護機兵との死闘で文字通り死にかけたレーゼはこの少女に救われたのだ。

『プロテクトコード双翼』形状の防御特化能力『リヒトクラール』。絶対的な防御の力。それが、イリスの取り戻した記憶の一つだった。

それ以外はやはり思い出せずに少々落ち込んでいたが、どうやら立ち直りは早いらしい。今では前向きに色々と頑張っている。

「ダメだ。却下だ。大反対だ」

しかし、レーゼは難しい表情で首を振り、否定を三連発する。

それは彼女を想つてのことだったのだが、それでも諦めていないのか、頬を膨らませてなおもイリスは食い下がってきた。

「私だつて嫌です。お世話になっている以上、何かの役に立ちたいんです！」

朝・夜の食事と掃除、そして洗濯をしてきている時点で助かっているんだがなあ、と言いかけ、これでは引き下がらないだろうと直感した。

嫌な勘だけはよくあたる。それがレーゼのジンクスである。

ゆえに、レーゼは別の方向であきらめさせることにした。すなわち、現実の厳しさを教えることにしたのだ。

「俺だつてあんな大物としょっちゅう戦っているわけじゃない。大半は遺跡の中をただ歩いて、弱くて少ない敵を狩るだけだ」

地味な作業だ、とイリスに説明しながらレーゼは思考する。だが事実でもあった。

魔術士の仕事は、『出土』した遺跡のマッピング、『はぐれ』守護機兵の殲滅、各方面への護衛、魔奏珠<sup>テリオス</sup>の確保、この四つに大別される。

その中でも特にマッピングは『地味』であり『苦痛』なのだ。遺跡はどれも半端なく広い。その上、地下に続いているものも存在するので、その作業量はもはや拷問ともいえるレベルだろう。

しかも仕掛けの一つも見逃そうものなら減給の対象となるので、誰もがマッピング作業を嫌っている。

かくいうレーゼも、あまり進んでやりたくない仕事である。

そういつたことを含めて説明し、ついでにメルヴィスの言ったことは嘘であるということを見せて、念を押すように「だから、お前が来る必要はない」と続ける。

しかし、イリスはそれでも引き下がらなかった。

腰に手を当て、レーゼを見上げる形で胸を張り、顔全体を「不機嫌です」と言いたげな表情にして言葉を返したのだ。

「だったら、この前みたいに後から勝手にいきますよ？」

その言葉に今度はレーゼが言葉を詰まらせた。

一応撒くことはできる。だがその後で道に迷われたり、複数の守護機兵に囲まれたりでもしたら、この少女がどのような被害をこうむるか。そう考えるだけでも、ひどく『嫌』だった。

自分がこれほどまでに他人を氣遣うことが出来たのか、と己の思考に若干驚きながらも、どうにか彼女が戦いの場にでないように説得すべきか、と考える。

だが、出てこなかった。直感が、なにをどう説得しても無駄である、と告げているからだ。

そしてついに諦めたかのようなため息を付き、レーゼは呟いた。

「……メルヴィスの許可が出たら、いいだろう」

「はい！　ありがとうございます！」

それを聞いた瞬間、イリスは嬉しそうに声を上げた  
その顔に、満面の笑みを浮かべて。



## 第十五話：行先

## 災厄を呼ぶチケット

「……メルヴィスの許可が出たら、いいだろう」

「はい！　ありがとうございます！」

その言葉がレーゼから漏れた途端、イリスはうれしさのあまり大きな声を上げていた。

何せ、ようやく得た『力』を役立たせることが出来るのだ。

今まで何のお礼も出来なかった、この生真面目で少し無表情な青年の役に立つことが出来るのだ、と、そう思うと、イリスは自分の胸のうちが何か暖かいもので満たされるのを感じていた。

そして思う。頑張ろう、と。この純白の双翼に恥じないような働きをしよう、と。

胸のうちに宿った暖かい『何か』の正体に気づきさえせずに、その心の中で少女は誓った。

漆黒色の外壁で構成されているギルド本部に着いたのは、昼が回る前だった。

レーゼは溜まった報告書の処理、イリスは掃除と食器洗いをしていたために遅くなったのだ。

自動ドアが開き、中に入る。少女は何が珍しいのか、きよるきよると辺りを見渡している。

まるで小動物のような彼女の顔の動きにあわせて、レーゼも視線を真正面に向ける。すると受付の前に見知った顔を見つけた。

生意気さを現しているつりあがった目を持ち、肩まで届く金髪が際立つその少女は、セレーネである。

今日は一桁台の子供が着ていそうなフリフリの白レースが付いたスカートをはいており、それを揺らしながら受付の女性と楽しそうにおしゃべりをしていた。

少しは歳を考えると突っ込みたかったが、そんなことをすればおそらく『血祭りの刑』だろうと直感が告げているので口を閉じておく。

「さ、イリス。行こうか」

「はいっ」

そしてセレーネは無視してさっさと歩き出そうとし。

「あら、レーゼじゃないの」

歩き出そうとしたところで、気付かれた。

「ん、ああ。……ちよつと用事があつてな」

適当に返事を返し、そのままイリスを連れてメルヴィスの執務室へ行こうとする。

だがその行き先を遮るように彼女が前に立ちふさがり、ちらりとレーゼの背後にいるイリスを見やって口を開いた。

「レーゼ、その子は？」

その言葉を聞いたイリスはびくりと身をすくめ、レーゼの陰に隠れてしまった。

まるで小動物のようなその仕草に青年は苦笑を浮かべる。

だがそう悠長に思考している暇はない。

今の状況はどう見ても、大の大人が似ても似つかない子供、しかもやけに幼い少女を連れているという、ある意味ギルドへの通報レベルのものだからだ。

ここに来るまでそのことに気づいていなかった時点で色々とアウトなような気がするが　というより、一緒に住んでいる時点でもはや犯罪者レベルのような気もするが、気にしないことにする  
その思考は脇にどけて、何か良い言い訳はないかととにかく頭をフル回転させる。

「ああ、その子が例の……」

だがセレーネは、レーゼの言い訳を聞く前になぜか納得しように頷いた。

あまりにあっけなく追及の手を収めたそんな彼女の行動にレーゼは呆氣にとられ、改めて聞き返す。

「あー、イリスのことを知っているのか？」

「ええ。今、ギルド中の噂よ」

「……は？」

「あの朴念仁、レーゼに隠し子か？　って」

あっけらかんにセレーネが答える。その言葉にレーゼは己の耳を疑った。

そして己の胸のうちがゆっくりと冷めていくのを感じつつ、しかし表面はきわめて冷静なままで口を開いた。

「……その噂は誰が流した？」

「メルヴィスだけど……。って、あんた！　なんで剣なんか抜いてるのよ！？」

「レ、レーゼさん！　早まっては駄目です！」

直後、セレーネとイリスの二人が慌てて止めに入ってきた。レーゼは無意識の内に『アルゼス』の柄に手を当てていたからだ。

皆を誤解させるような噂を振り撒いた上司に対しての理不尽な怒りがそうさせたのだろっただが　もう彼にとっては我慢の限界だった。

「悪いが離せ、二人とも。俺は敵を斬りにいくだけだ」

「て、敵、ですか？」

「ああ、名前はメルヴィスといってな」

「それは味方でしょ！……多分」

「なんだか騒がしいねー。何かあったの？」

と、そこへ騒メルヴィスぎの元凶が奥の廊下から顔を出した。

その声と姿を感知した瞬間、反射的にレーゼは長剣を引き抜き、思い切りブン投げた。

深い溝の刻まれた白銀の刃がメルヴィスの頬のすぐ傍を通り過ぎ、その背後にあった壁へと直撃。乾いた音と共に建築材の欠片が飛び散る。

「うひゃあ!？」

その瞬間、間拔けた声を上げながら廊下の向こう側へメルヴィスが引っ込んだ。

だが、逃がさんといわんばかりにレーゼが一步を踏み出す。

「逃げなさい、メルヴィス！ あたし達じゃ抑え切れないわ！ こいつあんたを本気で殺すつもりよ！」

そこへ、セレーネが必死にレーゼの右腕を押さえながら叫んだ。

「レ、レーゼさん、落ち着いてくださいっ！」

そこへイリスも左腕を掴み、必死になって止める。

しかしそれすらも無意味であり、二人の少女を引きずってレーゼは全ての元凶メルヴィスへ向かって歩き始めた。

「動くなよ？ この、大馬鹿者が……！」

「う、うにゃあああああ!？」

そして青年の静かな怒りの声と少女の悲鳴に近い声が、ギルド本部中に響き渡った。

「ほんとーに、すみませんでした」

執務室の中、あちらこちらに焼け焦げがある服を着たまま、メルヴィスは頭を下げていた。

「分かれば、よろしい」

彼の言葉に不機嫌そうに鼻を鳴らすレーゼ。

二人の立場から常識的に考えるとありえない光景だが、普段から『こつ』であるためか、それを咎める者はいない。

「……レーゼさんがあんなに怒ったの、初めて見ました」

そんな二人を見ながら、イリスは目をぱちぱちと瞬かせて呟くように言った。

彼女の言葉を隣で聴いていたセレーネは苦笑し、

「確かに、あんたってあんまり怒らないものね。そんなに腹立ったの?」

「ああ。あそこまで怒りを覚えたのは久しぶりだ」

「いやー、ほんの悪戯心だったんだけどねえ」

反省した色を見せていないメルヴィスは残念そうに唸った。

「そのくだらん悪戯心とやらで、この子の立場を悪くするような噂を広げるな、この阿呆」

そんな彼に咎めるような口調でレーゼが返す。

彼は心配していたのだ。イリスの立場が悪くなることを。

『ヴァルハラ』における彼女の立場は依然微妙なままである。どこで生まれ、どこから来たのかすら分かっていない『謎』に満ちた少女。それがイリスの全てだ。

ゆえに、人々はその謎を補完すべく噂話を始める。

やれ、彼女は『ああ』なのではないか。やれ、彼女は『こう』なのではないか。そんな小さな憶測や噂が重なっていき、いつしかそれは広がっていくだろう。

例えばそれが悪意のないものとしても、そうやって生まれた偽りの『事実』自体が人々の共通認識となってしまうえば、もはや改める術などなくなってしまうに等しい。

だからこそ、レーゼは過敏に反応したのだ。

全ては幼い少女の未来を想ったの行動と発言である。

それを隣で聞いていたイリスは、思わず両頬が熱くなるのを感じた。

それと同時に胸の中が暖かいもので満たされてゆく。

だがその感情を少女は理解できず、ただ恥ずかしげに俯くだけだった。

それに気づかぬレーゼは冷たい目線をメルヴィスに向けると、

「次、同じことをしたら……三枚に下ろすぞ？」

「あはは……。えつとね、うん、悪かったと思ってるよ？ けどさ、あのさ、一応ここでは僕が一番偉いんだから、そういうことを面と向かって言うのはやめようよ。ね？」

どうやらレーゼの本気を感じたのか、かすかに冷や汗をたらしながら弁解する。

そんな二人を見ながら、セレーネはやれやれといった様子で手を振り、

「そうになったら外でやりなさい。あんたたちの追いかけっこは、本当に本部が崩壊するかと思ったわよ」

「セレーネちゃんが暴れた方がそうなりそうだけど　って、セレーネちゃん！　頭、頭あ！」

メルヴィスが思ったことを口にした次の瞬間、にこにことした不気味の笑みを浮かべたセレーネは彼の頭を鷲掴んで引きずるようにして部屋の外に連れていく。

そして扉が閉まると同時に、肉と骨を思い切りぶん殴る音と、拳を振り上げたときに発せられる特有のフルスイング音、「ぐへっ！」



などというつめき声が扉の外から響いてきたが、それを無視してレーゼはコーヒーを口にする。

その隣でどう反応していいか分からないイリスは、「あ、あはは」と曖昧に笑った。

やがて数分後、戻ってきたメルヴィスはなぜか燃え尽きたように真っ白で、セレーネは満足そうな顔をしていたのはいうまでもない。

「……今日は厄日だなあ」

「自業自得だ」

自身の扱いにメルヴィスは嘆くが即座に咎められ、「よよよ」と妙な女座りで泣き始める。  
当然それは演技だということが分かったので、レーゼはため息をついて立ち上がった。

「……帰るか」

「え、お仕事はいいんですか？」

「あいつの様子じゃ、今日はまともなのがなさそうだからな」

付き合ってられるか、と言わんばかりに出口へ歩き出す。  
イリスは不思議そうな顔のまま彼に従おうとして。

「うつくくくく……」

背後から、不気味な笑い声が、聞こえた。

レーゼはそれを聞いたことがある。

大抵はメルヴィスが色々と悪巧みを考えたときに発する鳴き声のようなものであり、その対象はほとんど言っているほど周りにいた人間　つまりはレーゼやアシユレイだった。

予感というより、もはや生存本能的な何かがレーゼの中で働き、早急にこの部屋から出なければならぬと心が警鐘を鳴らす。

しかしイリスは立ち上がったばかりだ。面倒を避けるために彼女を置いていくわけにもいかず、葛藤が彼の頭の中で繰り広げられる。

そしてそれが、仇となった。

「レーゼくうーん」

不気味な、そして低い聞きなれた声が耳を打つ。

それを聞いてしまったが最後。蜘蛛の巣に引っかかってしまった獲物のごとく、逃げることは不可能となる。

それを理解しているがために、レーゼは「もうどうにでもなれ」と覚悟を決めて、固まった首を無理やり動かし振り向いた。

そこには、いつの間にか立ち上がって小型端末を手にし、満面の笑みを顔に張り付かせたメルヴィスと、額に手を当てて呆れ顔を浮かべているセレーネがいた。

すぐ目の前では引きつった顔をしているであろうレーゼを見上げて首をかしげているイリスが立っている。

不気味な声を発したメルヴィスは端末を覗き込んで数秒の後、口

を開いた。

「ねえ、レーゼ君。今日は仕事ないから、どこかに出かけてみない？」

「は？」

予想外の提案に、レーゼは思わず間拔けた声で聞き返した。

『出かけてみない？』と言ったのだ、メルヴィスは。

『こーんなはた迷惑で面倒な仕事を受けてみない？』などといった『ふざけた』モノではないのだ。聞き返すのも無理はない。

「……うん、決定！ あ、列車のチケットはもう取っちゃったから、さっさと準備してね」

そんな彼を余所に、メルヴィスは小型端末を操作しつつ言い放った。

レーゼは色々とツツコミたかったが、とりあえず彼の凶行を止めるために口を開く。

「おい、ちょっと待て」

「うーん、部下に休暇を与えるなんて、僕は何て良い上司なんだろうなあ！」

「人の話を聞け！」

自己完結して一人でうんうんと満足そうに頷いているギルドマスターへ力の限り叫び、そして疲れたようにぐったりとうなだれる。目の前ではいまいち事態を理解していないイリスがレーゼにどう声をかけようかとあたふたしており、その後ろではセレーネが哀れみの視線で彼を見て一言。

「あらあら、可哀想に」

「あ、セレーネちゃんも一緒に行く事になってるから」

「はあ!？」

しかし、彼女も次の瞬間怒りの声を上げ、メルヴィスの胸倉に掴みかかった。

「どおーいうことかしらあ？　メルヴィスう？」

「……く、苦しい。苦しいよセレーネちゃんっ」

落ち着いて落ち着いて死んじゃうよ死んじゃうから、と矢継ぎ早に、そして苦しげにギルドマスターが言うつと、深呼吸をしたセレーネはやつと手を離す。

だが彼女は目の前の青年を睨みつけ、その視線だけで理由を説明しろと伝えていた。

メルヴィスは肩を上げて「仕方がないなあ……」と呟くと、

「ひ・み・つ」

ウインクをして、茶目っ気全開でそう口にした。

瞬間、レーゼが残像を残す勢いで青年の前に踏み込むと同時に、横薙ぎに鞘付きのアルゼスを振るう。

しかし「うつひよう!？」とメルヴィスは奇妙な声を上げて、当たれば骨折間違いないのその一撃をしゃがんで難なく避ける。

「一度死ねば、この性格も治るかもしれんな」

「同意よ。こういうのはさっさと転生させて性格を矯正するのが手っ取り早いわ」

ぼそつと呟いたレーゼの言葉にセレーネも頷き、いつの間にか手にした鋼鉄の灰皿をポンポンと叩いた。

ちなみに両者共に口元は笑っているが、目は笑っていない。

「ちよつ、ちよつと！ 君たち、なに恐ろしいこと言ってるの!？」

「お前がまともに理由を教えれば、こうはならなかったんだが……。俺は悲しいぞ、お前を始末しなきゃならないなんてなあ。残念だ、実に残念だ。ははははは」

「ええ、悲しいわねえ。こんな形で別れることになるなんてねえ。断じて嬉しいとか、そんなことは思っていないわよ？ うふふふ」

「嘘だ！ そんな棒読みで言われても嘘にしか感じられない！

あー、分かりましたよ！ 教える！ 教えるから勘弁してくださいっ！」

「レーゼさんたちって、結構アグレッシブなんですねえ……」

あからさますぎる二人の脅しに、ついにメルヴィスが折れた。同じく、イリスも若干引き気味で呟く。

そしてメルヴィスは肩を落とし、「もう、からかいがないのな人たちだなあ」と残念そうに呟いて、口を開いた。

「イリスちゃんとのさ、親睦会ってやつだよ」

「私の、ですか？」

驚きの声をイリスが上げる。

「まさか自分のために」、そんな言葉が似合いそうな表情をした彼女は、目をぱちくりと瞬かせながらメルヴィスを見た。

対するメルヴィスはそんな彼女にウィンクで返すと、レーゼたちに向き直って言葉を続ける。

「イリスちゃんも『特化能力<sup>コート</sup>』に目覚めたし、これからレーゼ君と一緒に仕事を始めるつもりなんですよ？ だったら、レーゼ君とよく組む人たちと仲良くなっていた方がいいかなーって思ってたね」

イリスは彼の気遣いに涙が出そうになった。胸の内からは、レーゼと一緒にいるときはまた違う『暖かさ』が溢れてくる。

それを感じながら、彼女は勢いよく頭を下げた。

「ありがとうございますっ！」

そして頬を朱色に染めて嬉しそうな表情を浮かべると、レーゼに「用意をします！」と元気に告げて走り去っていった。

「そら、お二人さん。ギルドマスター命令ですよ。さっさと行ってあげなさい！」

それを見送ったメルヴィスは「かかった」といわんばかりの表情に一瞬だけなると、二人に細長い紙袋を手渡して「しっし」と追いつ出すようなしぐさをする。

思わず袋を受け取ってしまったレーゼとセレーネは仕方がなく心の中はあんちくしょうメルヴィスの行動と発言に対する不信感でいっぱいそのままではあるが　扉を開けて廊下に出た。

「あ、そうそう。もう一人、一緒に行く事になっているから。よろしくねー」

そんな声を背に、二人はお互いに顔を見合わせた。  
その数秒後、どちらともなく苦笑し、

「……ま、構わないか。イリスも喜んでいたし」

「ええ、私もよ。それに、今日は仕事もなかったらしいし、ね」

「ま、何も起こらないことを祈るわ」と、別れ際にセレーネはそう言い、レーゼも「そうだな」と返事をして背を向ける。

そして帰路の最中に、「そういえば」とレーゼは思い出す。メルヴィスの言っていた残りの一人とは、一体全体誰のことなのだろうか、と。

だが、その疑問は、数秒後に耳元の小型通信機が振動した事により解かれた。

『おう、俺だ、アシュレイだ。何かよお、ついさっきメルヴィス

に妙なチケットを手渡されたんだが……お前らもか？」

こうして、四人は列車に乗ることになったのだ。

そのチケットが、新たな災厄を呼び込むとは知らずに。



## 第十六話：襲撃

### 全て見つめるもの

大陸横断列車『ブラウアーエンツィアン一号』はひた走る。風をなぎ払い、界魔力<sup>オド</sup>を喰らいながら、ただひたすらに前へ、前へと。

その様子を、線路のほど遠くに存在する閉鎖された遺跡の『門』の上から眺めている者がいた。

それは少年だった。

どこかの組織のものだろうか、黒を基調とした制服を崩して着ており、短い頭髪は珍しい銀色で太陽の光を鈍く反射している。

整っている顔には嫌味つたらしい笑みが浮かんでおり、紫の瞳は遠くを走る大陸横断列車に向けられていた。

少年は両手にはめた黒縁の銀箆手の内の右腕をかすかな金属音を響かせながら持ち上げ、手のひらを広げて大陸横断列車に向ける。

「さア、凶劇のはアじまりだ」

ギチリ、と彼の口元が裂けた。いや、笑みを『変えた』。

先ほどの嫌みつたらしいものではなく、愉悦を含んだものへと。

「きツちり、仕事しろよオ？ クソツタレども」

そして少年は、開いていた右手を勢いよく握りこんだ。

大陸横断列車『ブラウアーエンツァン一号』の機長、ラウダー・リストールの人生は順風満帆そのものだった。

父親は政府の幹部であり、母親は厳格だが時に優しく、三十路を迎えた今では妻もいる。

さらには小さな頃から高い教養を身に付け、今まで培ってきた経験により勘は冴え渡り、そのおかげで大胆な駆け引きに生き残る事が出来てここまでやってきた。

このまま順調に業績を伸ばしていけば、父親のコネを使って政府の幹部にもなれるはずだった。

だがしかし、そんな彼でも今日のようなことは夢にも思わなかったのだらう。

頼りにしていた魔術式の警備システムが唐突に沈黙し、ロツクしていたはずの鉄戸が蹴り開けられ、漆黒の戦闘服バトルスーツに身を包んだ連中から一斉に銃が突きつけられるなどは。

銃口を向けられて一斉に動きを止めた機長たちを眺めていたその男は、銃を構えている漆黒の部下たちの間を通り抜け、隣に巨漢を一人だけ連れて後ろ手に腕を組み、ゆっくりと足音を立てて前に進

み出た。

細身で、若く精悍な面構えの男である。

隣で静かに立っている巨漢が握れば簡単に折れてしまいそうに見えるが、漆黒の戦闘服に包まれた体軀は仮にもその一撃を受けたとしても、決して倒れることはないだろう。

事実、ここにいる全員が彼に襲い掛かったとしても、傷一つなく全員を殺しつくすことが可能だった。

それだけの力を、その青年は持っていた。

そんな彼は、じろり、と周囲を睨めつけるように見渡す。

大陸横断列車の先頭に位置する主操縦室<sup>メインルーム</sup>は、列車の中でも最大級の大きさを誇るこの列車の車両と比べると、驚くほど狭い。

壁面のありとあらゆる場所には全車内を一望できるディスプレイが設置されており、前方と左右を機能的に取り巻く操縦用の装置が設置されているからだ。

その前には機長席を中心として、左右に副長席、操縦士席、副操縦士席があるだけである。

どちらかというと簡素な作りなそれらを眺めて、口を開いた。

「機長は、誰かね？」

「……わ、わたしだ」

恐る恐るといった様子で機長が手を上げる。

男はそちらに瞳を向けると、顎に手を当て、ふむ、と呟き、

「では今からその座、譲ってもらおう」

常人では反応できぬ速度で機長へ右手のひらを向け、

「我が漆黒は憎悪の牙

シヤドウサーヴァント  
“闇色演舞”」

「あ  
」

瞬間、男の足元に存在していた『影』がまるで熱湯のように沸き立ち、そこから姿を現した漆黒の巨大な『口と顎と牙だけで構成されたケモノ』が目の前の機長を喰らった。

そう、文字通り『食べた』のだ。

ガシュ！ と硬質な音が響き、一瞬で機長『だったもの』を噛み砕いたこの世のものとは思えない『影のケモノ』は、粘着質な音を立てながら咀嚼し、最後は「ゴクリ」と飲み込んで、再び男の影の中へスルスルと戻ってゆく。

その手の知識があるものならば、今の現象を『特化能力<sup>コード</sup>』による殺人と判断できただろう。

だが、あまりの出来事に副長も、操縦士も、副操縦士も、まったくといっていいほど反応できなかった。

メインルーム  
主操縦室は静まり返る。

そのあまりの無反応さに男は多少眉を動かし、しかし冷静な口調で告げた。

「私はアル・サレヴァート。今よりこの大陸横断列車は、我々反世<sup>アン</sup>チ・アスガルド界統一政府組織『黒の粛清者』の物となった。君たちの上司のような最期を迎えなくては、大人しく操縦だけをしてもおうか」

状況は進行してゆく。だれも気づかぬまま、ゆっくりと、しかし確実に。

<sup>メインルーム</sup>

主操縦室にて状況が進行してゆく一方、レーゼたちがいる三級車両は穏やかな静寂に包まれていた。

ある乗客は膝の上に置いた本へ目を落とし、ある乗客は眠たげに瞬きをしてあくびを繰り返す。

乗務員たちは、今の時間はそれほど動くことがないのか、奥の乗務員用の部屋の中で談笑をしていた。

そして、ギルドが誇る3人の魔術士たちと今回の旅の主役もまた、その穏やかな静寂の中に身をおいていた。

レーゼは、最近巷で名を上げている歴史家が執筆した『古代文明シンフォニアの輝き』という名の文庫本に視線を落としている。

だがその内容は憶測に憶測を付け足したようなずさんなもので、そのためか青年はくだらないものを見るかのような目つきになっていた。

アシュレイはコックリコックリと電車の揺れに合わせて舟を漕いでおり、向かい側に座っているセレーネは欠伸をかみ殺しながら女性ファッション雑誌を流し読みしている。

そしてイリスは、飽きもせず窓の外に流れる景色を眺めながら、鈴を転がすような、しかし小さな声で『歌』を口ずさんでいた。

「~~~~~」

彼女が歌っているのは子守唄だった。

『蒼い空』の広大さを説いた風変わりな内容の、昔から歌い継がれてきたためかこの地に暮らす人々ならば誰でも知っている、とても古い歌である。

向かい側にいたレーゼはその聞き覚えのある子守唄を歌っている少女をちらりと見やり、口元にかすかな微笑を浮かべる。

最近、イリスは目に見えて明るくなった。

言いたいことをハッキリと言えるようになったのも大きいだろう。

青年は思う。良い兆候だ、と。

同居し始めた頃に比べれば格段に良くなったと、そう思考する。最初期の彼女を表すのならば精巧な人形、だが今は歳相応の少女にしか見えない。

あとは記憶を取り戻さえすれば、レーゼの役割は終わりとなるだろう。

（寂しくなるな。……いや、俺はなにを考えているんだ）

思わず胸中でポツリと呟いたその言葉に驚きを覚え、頭を軽く振ってその思考を払拭する。

そして自分にそんな感情が残っていたのか、と、内心苦笑混じりに独りごちり、再びくだらない歴史解釈書に視線を落とそうとして。

「動くな！                   ぐおっ！？」

二級車両へと続く扉を蹴破って突入してきた黒い戦闘服バトルスーツに身を包んだ二人の男の内の一へと、瞬きするよりも早く、手元の『古代文明シンフォニアの輝き』を投擲していた。

魔力によって常時強化されている腕力。それにより放たれた文庫本サイズのその本は、風の抵抗すら凌駕して直進。

余裕の表れからかヘルメットを装着していなかった先頭の男の顔面へと、吸い込まれるように直撃した。

いきなりの反撃を予想していなかったその男の体は頭部への衝撃で仰け反り、後ろにいた彼の仲間は慌てた様子で銃から手を放し、その体を支える。

その出来事は時間からすれば『わずか』2・2秒ほど。

だが、魔術士たるレーゼにとって、十分すぎる時間であった。

コンマ8秒で脚部に身体能力の瞬間強化を発動。クイックフースト ジャスト1秒目には『アルゼス』を引っつき、驚くイリスを横目に男たちめがけて天井や壁を利用して高速移動。

そして1・6秒目には睜目する彼らの眼前へ着地し、鞘……に入れたままの『アルゼス』でなぎ払った。

「な、なに　　!？」

「　　遅い……!」

狙いは胴体。バトルスーツ 戦闘服を着ていようがお構いなし　　いや、着ているからこそ、全力の横薙ぎ一閃。

「ご、か、あ　　ッ!」

ゴキン! と、骨の折れるような嫌な音が響いた。バトルスーツ 鞘付き『アルゼス』が戦闘服もろとも男のわき腹にめり込み、その肋骨の一本をへし折ったからだ。

あまりの激痛に男は白目を向いて気絶し、口から「かひゅっ」と空気を漏らす。

「まずは、一人」

「き、きさまあ　　!」

目の前で仲間が倒れる姿を見て、頭に血が上ったもう一人の男は



がむしゃらにそう叫び、手にしていた小銃をレーゼに向けた。

剣を振り終わった直後だ、連続して攻撃できる状況ではない。  
いうなれば、それは『隙』。大振りの一撃が直撃したが故の空白<sup>レイ</sup>時間。

長い間、戦闘訓練を続けてきた男は『それ』を見逃さなかった。  
だからこそ、絶対の勝利の確信を持って魔力銃の引き金に指をかける。

だがレーゼは、引き金が引かれるよりも早く、動いていた。

彼は『見て』いたのだ。その蒼の瞳で、目の前の男が引き金を引き絞る動作も、勝利を確信する表情にゆがむ様も。

ゆえに、硬直していた体を無理やり動かす。レーゼにとってそんなことは造作もないことだ。

筋肉のかすかに軋む感触を感じながら動きを開始。

それはひどく単純な動作だった。

空いていた左手を腰のホルスターに伸ばして魔力銃を引き抜くと、滑らかな動作で左回転し、それによって加速した銃床の一撃を、相手の首筋へと叩きつける。

「せつ！」

「ぎゃっ！？」

首と肩の中間部に重い打撃を受けた男は、あまりの痛みに悲鳴を上げて小銃を取り落とした。

その隙を逃さず、レーゼは全力の右回し蹴りを顔側面へと放った。

「沈めっ！」

「ぐっ！？」

体重と遠心力の乗った一撃を横つ面に喰らった男は凄まじい勢いで横に吹っ飛び、壁にぶつかって床にずり落ちる。

しばらくの間呻いていたが、やがて気絶したのか動きを止めた。

僅か10秒程度の攻防。一人の死者も出すことなく勝利したレーゼは、『アルゼス』の鞘と魔力銃ホルダーとホルスターに収め、軽く息を吐いた。

「ふう……。で、だ」

いきなりの出来事から我を取り戻した乗客がざわめき始めるが、それに構わずレーゼはアシュレイに向き直り、首をかしげて口を開いた。

「コイツらは、何者だ？」

「おおう、確かめもせずによったのか」

「『殺意』に反応しただけだ。殺してはいない」

アシュレイのあきれた声に、レーゼは鼻を鳴らしてそう言い返した。

原則、ギルドは殺人を許容しない。

もしそれを破ったものがあるのならば、一切の例外なく処罰が下される。

それは、一般の人々とは隔絶した力を有している魔術士たちの暴走を抑えるための、ギルドが定めた『厳格な規則』の一つだった。

そもそも魔術士とは、極端に言い表すのならば『暴力の塊』である。

そんな存在が森羅万象を操り、無秩序に力を振るい始めればそれは歯止めも利かぬ暴力の嵐となるだろう。

だからこそ『規則』なのだ。

それを理解しているがゆえに、レーゼは『アルゼス』を鞘から抜かずに戦ったのである。

「それに」

青年は懷から取り出した縄　拘束用の綱糸が編まれた頑丈なものだ　で手早く謎の襲撃犯二人を拘束すると、元いた座席近くまで歩いていきながら口を開く。

「レーゼさん？」

彼のピリピリとした雰囲気にはイリスは首を傾げた。

そんな彼女の頭をレーゼは落ち着かせるようにぽんぽんと撫でると、

「　まだ来るぞ」

「おう」

「ええ」

そんな緊張を孕んだ声と共に、二人の魔術士は立ち上がっていた。アシュレイは右手に漆黒の十字架を、セレーネはどこからともなく取り出した札を数枚指の間に持ち、三級車両の二車両目へと続く扉に顔を向けながら構える。

やがて数瞬の後、鋼鉄製であるはずの扉が、ガラス窓が激しく震えるほどの爆音と共にひしゃげとんだ。

「敵発見！」

「排除する！」

その爆煙の中から現われたのは、漆黒の戦闘服バトルスーツに身を包み、突撃魔力銃を手にした『敵』が4名。

それを視認すると同時に、3人の魔術士と1人の少女は動き出す。

「やれやれ、今は勤務時間外なんだがなあ」

「あとでたっぷり請求すればいいじゃない、行くわよ」

「俺そはの傍から離れるなよ、イリス」

「はい！」

かくして、戦いは始まる。  
裏に潜む何者かの思惑に、気づかぬままに  
。

## 第十六話：襲撃

全て見つめるもの（後書き）

第三章、本格的に戦闘スタートです。

反政府組織連中がどうやって乗り込んできたかは、次あたりで…。  
また、冒頭の少年の出番はまだまだ先だったりします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9967/>

---

蒼天のシンフォニア

2011年3月14日19時45分発行